
奇跡の再会

ちやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の再会

【Nコード】

N0904V

【作者名】

ちやこ

【あらすじ】

マイは、ジーンとナルの兄弟とは幼なじみ。ジーンとは悪友、ナルとは恋人同士だ。

だけど、国籍変更の手続きのために日本に向かったマイが乗った日本行きの飛行機が事故に遭った。一度は心肺停止状態になったマイをナルがサイコメトリして、マイの死が明らかになった。

それから一年半後、日本で死亡した兄ジーンを探しに来たナルは、マイに良く似た少女・谷山麻衣と出会う。だけど少女は、記憶を亡くしていたマイ本人だった。旧校舎の調査の途中で記憶が戻った代

わりに、記憶喪失中の記憶を全て忘れてしまっていた。

ブログに掲載中の「記憶をなくした幼馴染（GH夢）」は、この話の別バージョンになります。（記憶を取り戻すのが、吉見家事件でナルが憑依された後です）

プロローグ（前書き）

実は、この話の同系統内容の別話があります。
キャラの語りでお送りいたします。
尚、ネタバレ一切、考慮なし。

プロローグ

ここはイギリスのケンブリッジにある英国心霊調査協会、通称SPRのフィールドワーク研究所。僕の双子の弟はそこで研究に精を出す若き博士だ。

ナルったら、またマイちゃんとケンカしたんですってナルと本気でケンカできる女の子なんて、マイぐらいじゃないかな？

あいつは、口と手が同時に出るんだ

僕と同じ顔で、マイとケンカする度にナルは擦り傷を作った。だけど、ナルはフェミニストなので女の子に手を上げることしない。それは何よりも、彼が嫌うことだから。

マイは、ナルと同じくらい頭がいいけど、感情的な部分も多いよね

能力者としては欠陥だらけだな

そこがマイのいい所だつて、ナルは分かってるんでしょ？

まあな

……そう言えば聞いたんだけど、マイちゃん、今度日本に行くことになったそうよ

まどかの突然の言葉に、僕とナルは同時にまどかを見た。

何で、また？

国籍のこととか色々あるのよ。マイちゃんは、二人と同じでまだ未成年だし、それに……ご両親がいらっしやらないから

マイはいわゆる孤児だった。僕とナルも孤児だったけど、アメリカにいた時、マーティンとルエラの養子としてデイヴィス家の子供になった。

僕の霊媒師としての能力のために、SPRに出入りするようになった頃にはすでにマイはいた。

マイは、大人達に混じって議論する一方で、同世代である僕達のような子供とも遊んだ。ムードメーカーだったマイは、人見知りだったナルすらも臆することなく、果敢に親しくなるうとした。

マイが孤児だと知ったのは、出会ってから一年以上が過ぎた頃だった。

え！ 両親がいない？

うん。……二人もそうだったって聞いたけど

……前はね。でも、今はマーティンとルエラがいるから

じゃあ、その二人がジーンとナルの両親なんだね

でも、マイにも養父とかいるんでしょ？

僕の質問にマイは首を横に振った。

あたし、施設に入ってたわけじゃないから。こっちの学校に通っている間に、両親が亡くなっちゃったの

……いつ、亡くなったんだ？

ジーンとナルに初めて会ったほんのちよつと前

僕達は驚いた。マイはとても明るく笑う少女だった。八歳の天才少女と言われていた。実際には学校に通っていたわけではなく、研究のために連れて来られたらしいが。

それから数年。ナルは心霊研究を始め、論文が認められて博士号を取得した。

おめでとう。ナルも研究員だね

……ありがとう。……マイは論文を出さないのか？

あたしは博士になりたいわけじゃないよ。……でも、ナルのお手伝いができればいいなって思ってる

そうか……

ナルは、マイとだけは自然に話すし、稀にだが触れることもする。双子の僕でも突然触ると固まると言うのに。

それはね、ジーンも大人になったら分かるわよ

そうですね

まどかとリンはそう言いながら苦笑していた。僕とナルは双子だ

から同い年だし、マイは同学年だが、ほぼ一年近く歳が違う。まどかとリンは、どう考えても列記とした大人だけど、あの二人と僕はどこが違うんだろうか。

ナルが博士号を取って一年ほど経った頃に、マイの日本行きの話が出たのだ。

マイが日本に行くこと寂しくなるね

仕方ないよ。こっちにちゃんと住むためだしね

大学の方はどうしたんだ？

休学届け出して来た。……ナルも寂しい？ あたしがいなくなったら

まあ、そうだな

ナルにしては珍しく素直だ。まあ、当然と言えば当然かな。二人は付き合いだして一年ぐらい経つわけだから。

それで、どの位で戻って来れそうなんだ？

早くて三ヶ月、長くても半年かな。両親が亡くなった時に一度帰ったけど、子供だったから、通帳とか色々持って来るだけだったんだよね

つまり、時間にゆとりができたってことだね

うん。まあ、そんなところだね

マイは意気揚々と日本に向かった。だけど、あんなことが起きるなんて誰にも思わなかった。

「 便は、日本近海で爆発炎上し 」

マイが乗った飛行機が事故に遭った。ナルはすぐにマイをサイコメトリした。

……どう？

周りに血だらけになった乗客が見える。……グリーンのハレーションが

ナルの言葉はそれ以上続かなかった。グリーンのはレーション。それは、サイコメトリした人物の死を表していた。マイの遺体は見つからないまま、SPRがマイの葬式をしてくれることになった。

僕達はマイの葬式に参列した。

ナルは終始無言のまま、僕にはどう慰めていいのかわからなかった。

旧校舎の調査

何の因果でこうなったのか、イギリスにいたはずのあたしは、目を覚ますと知らない人達に囲まれていた。

「おい。嬢ちゃんっ」

……誰？

茶髪だけど多分、日本人の男性。それに、どこの人か分からないけど金髪の男の人。それと、化粧が派手な日本人の女性が並んでいた。

皆さん……誰ですか？

あたしが何を言ってるのか分かんないのかな。そんなことを考えていると、金髪の青年が話し掛けてきた。

麻衣さん。どうしたんですか？

あたしの言ってること、分かるよね？ あたしはマイ・ライター。あなた達は誰？

ボクはジョン・ブラウンです。こちらは滝川法生さんと松崎綾子さんです

「おい、ジョン。嬢ちゃんは一体、どうしたんだ？ まさか、憑依されてるんじゃないだろうな」

滝川さんと言う人が、どうもあたしが憑依されているようだって言ってた。

「もしかして、英語分らないの？」

「こいつと一緒にしないでよ。アタシは分かるわよ」

「……それで、憑依されてるわけじゃないんだよな？ 谷山麻衣ってのは本名か？」

「え！ 何で、その名前知ってるの！ 変だな……。ライター教授しか知らないはずなのに」

「ライター教授ってのは誰だ？」

「あたしの後見人だよ。日本名だと覚えるの大変だろうからって、

名前借りてるの」

「あんたさつき、英語喋ってたけど、外国の出身だったの？」

「一応出身は日本なんだけどね。色々あってイギリスにいたんだけど……。何で、日本にいるんだろ」

「イギリスに住んではったんどすか？」

ジョンと言う名前前の金髪の青年の喋り方に、あたしは一瞬、何か妙なことを思い出してしまった。今のつて、関西弁だよ。イギリスでも日本の方言話す人に会ったことがあったけど、まどかさんと二人で思わず笑っていたら、何で笑うのか不思議がられたんだよ。日本に用があつて、こつちに来る予定だったのは覚えているんだけど……。そう言えば空港で……」

空港にいた時までは覚えてるんだけどなあ。

「つてことは、あんた記憶喪失だったつてことなの？」

「そう……かも」

三人から話を聞くと、あたしはどうやら、ここに心霊調査に来た少年に雇われているらしい。記憶を取り戻したせいで、困ったことに、あたしはここでの生活の全てを忘れてしまった。

「今、朝の四時だけど、今日、月曜日よ。あんた、学校はどうすんのよ」

「学校つて。……あたし、学校に行ってるの？」

「何、言ってるんだ。ここが、お前の通ってる学校だ。でも、何にも覚えてねえんじゃない。誰か先生が来るのを待ってから、譲ちゃんの住所聞いてやるよ」

あたしは、親切にしてくれる滝川さんと言う茶髪のお兄さんを頼ることにした。

この人の纏う空気はちょっとすごい、つて見た時から感じてたんだよね。

滝川さんは、事務の人が来てから、あたしの住んでる住所を聞いて送ってくれた。部屋に張ってあった時間割を見て、とりあえずカバンに詰めた。わけの分からないまま、とにかく冷蔵庫にあった物

を使って朝食を食べてから、さっきまでいた学校に向かった。

教室の場所が分からなくて困っていると、多分クラスメイトらしい人達に会った。記憶が戻ったせいで、今までのことを忘れたことを言えずにいた。

「黒田、谷山。校長室に来なさい」

先生らしき人に呼ばれて、女子生徒と二人で校長室に向かうと、驚いたことにナルがいた。でも、ナル以外にも朝会った三人と、他に着物姿の女の子、中年のおじさんが二人いた。

「座りなさい」

校長先生に言われて、空いている席に座った。

「今回の事件の関係者はこれだけです。では、少しお時間をいただきます」

ナルはそう言いながらカーテンを閉めて、灯りのスイッチを入れた。何があつたのかよく分からないけど、催眠術を掛けようとしているのは分かる。

「光に注目して下さい。…光に合わせて、息をして下さい。ゆっくりと、肩の力を抜いて…。自分の呼吸が聞こえますか。心の中で呼吸を数えて下さい」

ナルの催眠術の欠点を知っているから、心の中で苦笑してしまつた。それよりも、ナルが何で日本にいるんだろ。それにどうして、ジーンが一緒にいないの？

校長室を出た後、そのことを聞くためにナルを追い駆けた。

ナル！ 何で、日本にいるの？ それに、ジーンと一緒にいないなんて、どうしちゃつたの？

あたしの言葉にナルが怪訝な顔をしていた。

「麻衣？ ジーンのことをなぜ……」

もしかして、日本に来たのもジーンに何かあつたの？ だから、日本に来たの？

あたしはナルのシャツを鷲掴みにした。だけど、ナルはジーンのことよりも、あたしの言葉の方に戸惑っているみたいだった。

まさか……マイなのか？

何か話が合わないな。あたしが記憶喪失だったってこともそうだが、どうやって日本で暮らしてたんだろ。それにしてもナルってばちょっと、格好よくなった。

生きてたのか……

ナルの手があたしの頬を撫でた。それにしても、随分と背も伸びたなあ。

色々と聞きたいこともあるが、放課後になったら旧校舎に来い。車の置いてある場所だ。分かるか？

機材の入っている車だね

ああ

とりあえず授業に出て、朝いた車の場所に向かった。

ナル。お待たせ

「ここでは日本語で頼む」

「分かった。……とりあえず先ず、催眠術を掛けていた理由を教えてください」

ナルは調査の内容を覚えてくれた。

「ところで……昨夜、レコーダーをセットしてくれたの、麻衣か？」

「よく覚えてないけど、そうなんじゃないかな」

「麻衣の記憶は、いつ戻ったんだ」

「今朝かな。目を覚ましたら、知らない人達に囲まれてたの。……

空港でナルと別れた後からの記憶がないんだよね」

「それよりも、ここでは僕は渋谷一也と名乗っている。麻衣も僕の正体は秘密にしてもらいたい」

「じゃあ、渋谷さんとか一也さんって呼ぶの？」

「ナルでいい。お前は記憶がなくても僕をナルと呼んでいた」

「へえ、そうなんだ」

我ながら、すごいと思ってしまった。それからナルの仕事をジョーンと一緒に手伝った。

ナルは正体を隠して欲しいって言ってたけど、あたし、あの三人

にイギリスにいたことを話してしまったことを思い出した。まあ、ナルがいるとは思わなかったから、ナルのことは話してないんだよね。

翌日。様子を見に向かうと、松葉杖を突いたリンさんがいた。

リンさん！ リンさんまで来ていたんですか！

あたしがそう言つと、リンさんが不思議そうな顔をしていた。ナルが言うには、リンさんのケガはあたしのせいらしい。

では、あなたがマイさん本人だったんですね

ナルから事情は全部聞きました。すみませんでした

もう、気にしてませんから

ナルの実験により、黒田さんがPK能力者であることが分かった。調査はそれで解決したことになったみたいだけど、問題はあたしの方。自分が日本で暮らしている理由が全然分かんないんだよね。

イギリスに戻ろうにもお金がない。

部屋の中にある書類とか掻き集めて、自分が奨学金で高校に通っていることを知った。両親はすでにいない。今、事情を知っていて頼れるのはナルとリンさんだけ。でも、二人の今の連絡先は聞いてない。

調査終了から数日後。

『 1 - Fの谷山麻衣さん。 1 - Fの谷山麻衣さん。 至急、事務室まで来て下さい 』

放送で呼ばれたあたしは、わけが分からず事務室に向かった。

「あのー、谷山ですけど」

「電話が入ってますよ」

「あ、どーも」

電話の受話器を受け取った。

「もしもし？」

『 麻衣か？ 』

「……ナル？ ど、どうしたの？ 電話なんか」

「うちの事務所で働く気はないか？ 困ってただろ。僕はジーンが見つかるまでイギリスに戻るつもりはないんだが」

「素直に手伝って欲しいって言えばいいのに、相変わらず素直じゃないね。いいよ。手伝ってあげる」

電話口の向こう側でナルが苦笑しているのが聞こえた。

森下家の調査

日本に向かう飛行機に乗る前までの記憶から、ある時、明け方に目が覚めるまでの記憶がプツリと切れてしまったあたしは、双子の兄であるジーンの遺体を捜しに来た、かつての恋人であるナルに再会し、表向きはバイトとして雇われるようになった。

「義姉の香奈と姪の礼美八歳です。兄は海外出張中で、今は、この家に私達だけなので不安で……」

大きな屋敷に女三人だけで住んでいるみたいなんだけど、ポルターガイストに似た現象が起きるのだと言う。

「……典子さんの話から考えると、ポルターガイストの一種だよな」

「いっちょまえのクチ利くようになったなバイトちゃん」

「ゴーストハントだっけ？ 相変わらず大げさねえ。この機材のヤマ！ どーせ、地霊かなんかの仕業よ」

協力者にぼーさんと綾子。前回の調査で知り合った二人だ。

「そう言う凝り固まった考え方は危険だよ」

「じゃあ、麻衣は何だと思うのよ？」

「それを調べるのが、あたし達の仕事なんだよ」

「……麻衣はゴーストハントに詳しいけど、イギリスでもこう言うバイトでもやってたのか？」

「ちよつとね。後見人がそう言うのに興味ある人だったし、イギリスって、心霊関係は日本じゃ比べ物にならないぐらい年中ブームなんだよ。古いお城とか墓所に行くツアーがあつたりするの」

「まあ、心霊調査団体があるぐらいだから」

その夜。ナルは香奈さん、典子さん、礼美ちゃんの三人に催眠術を掛けて様子を見ることにした。

「今夜、花びんが動きます。ガラスの小さな花びんです。今夜は、この部屋のテーブルの上にあります」

反応はすぐに現れた。家具が斜めになったり、引っくり返ったり。

それにしても、さつきからちらほらと妙な気配を感じる。あたしは、ジーンほど霊視ができる方じゃないから感じる程度なんだけど。「…反応が早いと思わないか。心霊現象と言うのは部外者を嫌う。無関係な人間が入って来ると、一時的に、ナリをひそめるはずだ」「反発してるってことだね」

あたしの能力はばーさん達には秘密だから、あたしはただ単にゴーストハントに詳しい、記憶を取り戻した女子高生ってことになってる。

翌日。花びんはピクリとも動いていなかった。

それから綾子が祈祷をしたんだけど失敗。綾子の除霊の直後に台所から火が出た。

「ナル！ 誰がいる！」

窓の外に子供の姿を見た。礼美ちゃんじゃないのは分かった。とりあえずあたし達は、礼美ちゃんの様子を見に行った。

礼美ちゃんが何かを言う度に現象が起きる。

今までだったら、こう言う時に予知夢とか過去視とかして、情報を集めることが出来るのに。隠しごとをしているのって、面倒だし、ちょっと辛い。

「ミニーがおしえてくれたの。おやつにどくが入ってるって。あの人はわるいマジョだつて。まほうでお父さんをケライにしたの。礼美とおねえちゃんがジャマだからころそうとしてるの！！」

礼美ちゃんがそんなことを言った直後、あたしは夢でジーンに出会った。

礼美ちゃんが危険だ

それ。それ、どう言うこと？ 礼美ちゃんが危険って……どう言うこと？

あの人形に憑いている霊のせいだよ

人形に霊が憑いてるってことなんだね

あたしが真剣に考えていると、ジーンはちょっと笑った。

前に会った時は、麻衣は僕のことを覚えていなかった。……記憶

が戻ったんだね

え？ 夢で会ったつけ？

覚えてないの？ 麻衣の学校の調査で、靴箱が倒れて来て、麻衣が気絶しちゃった時だよ

そうなんだ。あたし、目が覚めたら記憶がプツリと途切れてたんだよね。……何だか、未だに信じられないよ。ジーンが死んだなんて

僕は死んでしまったけど、でも、麻衣は生きていた。麻衣。ナルをよろしくね

昔、何度も言われた言葉。ジーンは人当たりはいいけど、ジーンの不動の一番はナルだった。あたしは、ナルが唯一自ら触れて、無防備な状態をさらけ出すと言う理由で、ナルの傍にすることを許されたようなものだった。

「 礼美ちゃんがそんなことを？」

ナルがミニーを調べようとすると、礼美ちゃんは怒って逃げてしまった。

「ナルって礼美ちゃんに嫌われてますね」

リンさんにだけ聞こえる程度の小さな声であたしが言っと、リンさんは小さく頷いてくれた。

家その物よりも、今はミニーが危険だ。ナルはぼーさんに悪霊被いを頼んだけど失敗。結局ジョンと真砂子と呼ぶことにしたらしい。

「……麻衣。僕はこの家について調べた。……過去視を頼めるか？」

「あたしがやってもいいの？」

「僕がサイコメトリしてもいいが、それだとリンや麻衣が怒るだろう。だったら、リスクの少ない麻衣の方がいい」

「ぼーさん達にあたしの能力バラしちゃっていいの？」

「僕の正体がバレるよりはリスクが少ない。それに、麻衣の能力を少しずつ出した方が、麻衣も調査しやすいだろう」

「……分かったけど……。あたしは本来、心霊は専門じゃないんだ

けど」

「それでも今は、僕の部下だ」

「そーですね」

ナルの調べで、この家は八歳前後の子供が多く死んでいることが分かった。そのことを典子さんに伝えた後、真砂子とジョンが来たんだけど、真砂子は顔を真っ青にして、ベースに着くなりナルに縋り付いていた。

あんまり見たくない光景だけど、ここは我慢しよう。

「…子供の霊がいたる所にいますわ。みんな、とても苦しんで……。お母さんの所に帰りたいと言って泣いています。それに……。この家、霊を集めていますわ。全部子供の霊です……」

ジョンに人形に憑いた霊を落してもらった。

「…霊は落ちたと思います。けど、滅ぼしたわけと違います。二度と悪用されへんように、焼いてしまふのがええと思います」

ぼーさんが礼美ちゃんの部屋を除霊してもらったんだけど、礼美ちゃんの部屋ではなく、居間の方に現象が起きた。居間には大きな穴が開いた。

「…ここには女の霊がいます。奥深い所に潜んで……。母親のフリをして子供達の霊を呼んでいます。…子供達は家に帰りたいのですが、道に迷って出られないのですわ。女は子供達を使って新たな霊を呼んでいるんです」

「…とみこ」と言うのは？」

「…女の子供です。女は子供を捜していますの。自分の娘を……。それで子供を集めているのですわ」

「…そう言うことか」

展開が速すぎて、あたしはまだ、過去視ができずにいた。だけど、ナルが調べ物をして出て行った後、綾子の祈祷中にあたしはあの井戸の穴に落ちて、図らずも過去視をした。

人さらに連れて行かれた子供。嘆き悲しむ母親。そして、母親が井戸に身を投げた。

「人さらい〜?」

「だと思っただ。ね、何か意味ありげな夢じゃない?」

「なーにが! 霊能者でもないあんたの夢に、何の意味があんのよ」
「真偽のほどは分かりませんが、案外、的を射ているかもしれませんね」

リンさんはあたしのこと知ってるから、バレないように気を使ってくれている。ソファで少し休んでいると、ジーンが夢に現れた。

大丈夫だよ

と、笑顔で答えるジーン。ジーンの笑顔はナルとは違う。普段から笑顔のジーンには、ナルのような希少性価値が少ないんだよね。なんて思ってたら、ナルが帰って来ていた。

あたしは、ナルに過去視をしたことを伝えた。

「僕が調べた内容とほぼ一致するな」

「それで、解決できそう?」

「まあな」

ナルはその後、宣言どおり人形「ひとがた」を使って浄霊に成功した。ただ、ぼーさん達にはナルが陰陽師だと言っいたらぬ誤解を生じかねない結果になったのを、本人は知る良しもない。

公園の調査

渋谷サイキック・リサーチに入って半年が過ぎた。

「は。さすがに、もう、風は冷たいなあ」

半分ぐらいナルの興味で仕事が入るか入らないかで別れるので、イギリスにいた時よりは暇なんだよね。だから、あたしの仕事は専ら掃除が主。

「麻衣。お茶」

「リクエストはある？」

「何でもいい」

ナルは紅茶が好きだけど、好みがない。が、砂糖入りやフレーバーティー、ミルクティーなんかの甘い物は嫌いだ。

ナルはしょっちゅう地図を見ている。ジーンを捜すためにあちこち旅行しているのも知っているんだけど、当の本人であるジーンの幽霊に会っているあたしとしては、ちょっと複雑な気分だ。

「あつ、リンさん。あの、お茶淹れましょーか？」

「今はいいませんが、後で少し濃い目のコーヒーを願いでできますか？」

「分かりました」

リンさんはナルと同じくらいワーカーホリック。と言うよりも、ナルに言いように扱われているだけのように見えると、まどかさんとジーンが話してたことがあつたっけ。

リンさんに濃い目のコーヒーを淹れて持って行った後、真砂子が事務所に来た。

「こんにちは」

「真砂子！ わー。ひっさしぶり……」

「ナル。いらっしやいます？」

「…ナルなら所長室だけ」

「呼んでいただけます？」

真砂子は日本のメディアじゃ有名な霊媒師。ナルもいつ、そんなの調べただか。どうもナルのことが好きらしくて、偶に事務所に来るんだよね。

ナルの性格を知っているだけに、真砂子をちょっと哀れに思うことがある。

「あいにく、所長は仕事中ですので」

「あら。あたくし、今日は仕事の依頼に参りましたのよ」

ナルに真砂子の来訪と依頼のことを伝えたと、ナルは眉間に皺を寄せた。

「騙していると言うか、黙っていると言うか、嘘を吐いた時のリスクが大きすぎだよな」

「分かっているならどうにかしろ」

「真砂子の力は本物だよ。ジーンほどじゃないけど。真砂子の機嫌取りに尽力して下さい所長様」

「その呼び方やめろ」

「いいじゃん。ここじゃ、ナルはあたしの雇用主なんだから。それよりも早く行って」

ナルを押しやるように促すと、ナルは渋々ながらオフィスに向かった。

「実は、知り合いのテレビ局の方が本当の依頼主なんですの。ドラマの撮影がある公園でしているのですけど、妙な事件……と言うか、現象のせいで撮影が進まなくて困ってるそうですの」

「妙な現象？」

「ええ。突然、水が降ってくるのだそうですわ」

「雨じゃないの？」

「いいえ。その方が仰るには」

『まるで水風船が破裂したみたいに頭の上のへんから、いきなりパシヤツとね。それが撮影スタッフは何ともなくて、被害に遭うのがメインの役者さんばっかでねえ』

「それで調べてみたら、その公園ではここ半年ほどの間に何件も同

じょうなことが起きているそうですの」

真砂子の話を聞いていて、いかにも断りたそうなナルだったが、さっきのあたしの一言が効いたのか、ナルは真砂子の依頼を引き受けることにした。

ついでと言うわけではないけれど、協力者にぼーさんに来てもらった。

「ほんで、ここがその場所なわけね。ほんとに霊なんかいるのかよ……。こんなところで除霊かますのやだなあ、俺……」

ぼーさんの言い分も分かる。それだけ公園はカップルの多いのかな場所だった。

「真砂子ちゃん。何か、感じない？」

「ええ。何となく……。かすかに気配を感じますけれど。特に害のある物は何も」

「呼ばれたわけは分かったけど。ほんとなのかよそれ」

「らしいですね。被害に遭ったのは決まってそう言うシーンの撮影中だそうですし」

「でも信じられないよね。カップルだけを狙った霊現象なんて」

「困を用意することにしたあたし達は、二組のカップルに分かれることにした。」

「ぼーさん。行こうか」

「お、麻衣が俺を誘ってくれんのかい」

「こうでもしないと真砂子の機嫌が悪くなっちゃうし、必然的に残る二人で一組できる。ベンチに腰掛けると、ぼーさんが缶紅茶をおごってくれた。」

「俺はてつきし、麻衣はナルと組みたがると思ったんだけどな」

「あれが今のナルの仕事ですから」

「どう言うことが教えてもらえるかね？」

「真砂子の機嫌取り。他のみんなと違って、真砂子はナルが好きだから協力してる部分もあるんだよね。だから、人身御供になってもらいました」

「しっかし、ナル坊もこんな時くらいファイル手ばなしやいーのになあ」

「だって、ナルだもん」

「ぼーさんと話し込んでいると、頭上の方に気配を感じた。」

「どーした？」

あたしが咄嗟にベンチを離れた途端、ぼーさんの頭上にはバケツ並みの水が降ってきた。

「……麻衣ちゃん。君、勘付いて一人で逃げたな」

「ははは。……ごめん」

びしょ濡れになったぼーさんに笑いながら謝っていると、ナルが真砂子の名前を呼んでいた。

「原さん」

「どうした!？」

「分からない。急に倒れた」

真砂子に近寄ると、どうも憑依されているみたい。ナルが話を聞くと、ここでカップルに水を掛けていた霊だったようだ。真砂子の姿で喋るその霊は、ちよつと愉快な人だったけど、自殺しようとして失敗して、結局事故で死んでしまったらしい。

「ハラいせに、ヤツの代わりにこの公園でイチャつく人々を同じメに遭わせてやろうと思ったのよ〜〜」

「そんなのダメッ! く、くやしいからって、そんな人のせいでも他人達にわるいことしたら、それで恨まれるのはあなたじゃあないの? そんなの あなたばかりソンしちゃうんじゃない。そんなの変だよ」

「……あなただって、今の状態がいい物だとは思っていないはずですよ」

「そうそう。いつまでもそんなことしていると、地縛霊になっちゃうぞ。ちゃっっちゃか成仏した方が幸せだと思っな」

真砂子に憑いた霊は、どうにか成仏してくれた。

後日。事務所に来た綾子とジョンにその話をした。

「へー。そんな事件があったの」

「無事に解決してようおましたね」

「まあ、今回は麻衣のお手柄ってトコかな」

四人で話していると、真砂子が来た。

「こんにちは。あら。みなさん、おいででしたの。ナルはいます？」

「また、仕事の話？」

「いいえ。お茶にお誘いしようと思って」

「ムリよ。ムリ！ 行くわけないじゃない。あのナルが！」

「そんなことごさいませんわよ。あたくし何度か一緒にしましたもの。映画やコンサートに」

真砂子つてば素早い。

「でも、ナルは心霊オタクだから、映画やコンサートよりも神社とかお寺の方が喜ぶと思う。資料室にその手の本があるし」

「そうなんですか？」

「うん。ただなあ……。緑茶がダメなんだよね」

「何で、そんなこと知ってるのよ」

「緑茶は、頭に来て飲ませたことが一度……」

あ、しまった。これはイギリスにいた時の話だった。神社やお寺はどっちかって言うとジーンズの趣味なんだよね。

「いい加減にしてもらえませんか。ここを喫茶店代わりにするなど何度……」

タイミングいいのか悪いのか、ナルが所長室から出て来た。

「麻衣。僕はちよつと出て来る」

「ま、でしたらお供しますわ」

「結構です。ごゆっくり」

「一緒に一緒にさせて下さいませ」

真砂子がナルの腕を掴むと、ナルの目線がちらりとあたしを見た。あたしは素知らぬふりをして、そっぽを向いてやった。ナルは諦めたように真砂子と一緒に出掛けて行った。

「……なあ、麻衣。ナルは、真砂子に弱みでも握られてんのか？」

まあ、ナルの正体知ってるんだから弱みなんだろうけど。あたしはどっちかって言うと、リンさんと同じ立場なんだよね。

ナルが所長かどうか疑っていたけど、ジョンがパトロンがいるんじゃないかと言うと、なぜか綾子とぼーさんがこけていた。

「二人とも、何でこけてるの？」

「そう言や、麻衣はイギリス育ちだって言っつてな」

「うん」

「日本と外国じゃ、パトロンのイメージがちょっと違うんだよ」

「それで、麻衣は何か知ってるの？」

「スポンサーがいるんだけど。真砂子のことは、所長自らご機嫌取りしてるだけだよ」

「あの、ナルがだぞ」

「それでも真砂子は、そのナルが認めた霊媒師だもん。機嫌は取れる時に取ってもらわないと。ぼーさん達が、真砂子並に見えるって言っつたら別だけど」

あたしがそう言うと、三人は考え込んでいた。その後、ぼーさん達と映画を見に行くことになった。

ナルへの機嫌取りは紅茶で我慢してもらいましょう。それと、あたしはイギリスに連絡を取りました。

所長の機嫌取り（前書き）

性的描写が入ります。

所長の機嫌取り

日本で客死した双子の兄ユージンが死んだことを、偶然サイコメトリで知ったのは、ジーンが日本にいる最中だった。マイをサイコメトリした時と違って、僕はジーンが死んで、湖に投げ込まれるまで見えた。

ジーンを捜すために、日本に来て数ヶ月。なかなかまとまな依頼が来ず、まどかに何でもいいから依頼を受けるように言われて受けた依頼。

その依頼先で、僕はかつて飛行機事故で死んだと思われていたマイにそっくりな少女に出会った。

仕草、話し方、マイに酷似した蜜茶の髪と相貌。それに付け加えて、共にゴーストハントをしていた時に身に付けた知識。ジーンまで失って、何の拷問だと思った。

調査の方は地盤沈下だと分かったものの、なぜかポルターガイストのような現象は収まらなかった。今回の調査に関わった人間を調べていて理由は分かったが。もう一つ、麻衣が孤児であることを知った。出身は東京だが、彼女は新潟の中学を卒業していた。

翌日。関係者に催眠術を掛けた直後、僕に対して麻衣はあろうことか英語で話し掛けてきた。

もしかして、日本に来たのもジーンに何かあったの？ だから、日本に来たの？

僕は、体の中がざわめくのを感じた。それにあの時、マイの生死を最後まで確認しなかったことを後悔した。

麻衣はどうかやら記憶喪失だったようだ。日本にいた時の記憶は一切なかった。とりあえず、事務所雇って、調査の手伝いやジーンを捜す手伝いしてもらうことにした。

「そう言えば、話すの忘れちゃったんだけど、ぼーさんと

綾子とジョンの三人にイギリスにいたこと話しちゃったから、実はナルと知り合いでした。なんて言わない方がいいよね」

「は？」

「だって、イギリスにいたあたしが、ナルと知り合いだったなんてナルの正体バラすようなものでしょ。……だからナルは、甘んじて真砂子の言いなりになってるんだよね」

「お前は僕の恋人じゃなかったのか？ それとも、僕のことを嫌いになったとでも？」

僕がそう言くと、麻衣ははにかんだ。昔、よくやったやり取りだった。ジーンと仲良くするマイに嫉妬して、僕がそう言くと、嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「……今でも好きだけど、今は、ナルの立場の方が大事。そのためなら、少しぐらい我慢するよ」

「原さんの言いなりにならずに済むように、麻衣を好きになったと伝えてやるうか？」

「そんなことしたら、真砂子に正体バラされちゃうんでしょ？」

「だったら、好きでもない女に纏わり付かれた気分を解してもらえませんかね」

僕がそう言いながら、麻衣にキスをする、麻衣は腕を僕の背中に回してきた。少し長めのキスをした。

「ハア……。何だか、キスが上手くなってる。他に彼女でもできた？」

「そんなわけあるか」

「それもそうか。……ジーンも言ってたもんね。ナルが触れても平気でいられる女性は、ルエラとまどかさんとあたしだけだって。案外、真砂子や綾子も平気そうだけだね」

「あの頃と違って、我慢が出来るようになったからな。それよりも、イギリスの方に連絡取れたんだろ？ 何か言ってたか？」

「教授には、しばらくこっちにいたいって言ったの。ちよつと残念そうだったけど。それと、まどかさんにはね、このままナルを手伝

うように言われちゃったから、バイトは継続させていただきます」

「バイト……ね。麻衣は一応、正式なSPRの会員なんだが」

「表向きはバイトの方がいいと思わない？ とりあえず、あたしは心霊オタクってことにしておいたから」

「そうか」

僕が麻衣の太ももを撫でようとすると、麻衣に抓られた。

「一体、何をしようとしてるの。ここは、事務所でしょうが」

「僕は気にしないが」

「あたしが気にする！」

「幸い、所長室は防音だ。リンには聞こえない」

僕がそう言うと、麻衣は真っ赤になった。麻衣を抱いたのは二年前になる。あれ以来、誰に対しても欲情を感じたことはなかった。だけど、麻衣に触れていると、もっと触れたいと願う自分がいた。

二年前のような幼さはない。

「人の体、ジロジロ見ないでくんないかな」

「二年前とさすがに違うと思って」

「その台詞、そっくりそのまま返して上げるよ」

麻衣の股間に指を這わせると、麻衣の体がビクリと跳ねた。小振りだった胸もほどよく膨らんでいた。ただ、僕の手の方が大きくなつたのか、それとも、麻衣の胸が思ったほど成長しなかったのか。

「片手で胸が隠れてしまうな」

と、思わず言うと、頭突きが来た。恐らく足蹴りにしようとしたのだろうが、足の方は僕が両膝で押さええているので動かせない。

「胸が成長しなくて悪かったね」

「胸は揉むと大きくなるそうだから、心配は要らない」

「……それよりも、まさか、最後までやるわけじゃないよね？」

「そのつもりだが」

僕がそう言うと、それまで大人しくしていた麻衣が、突然抵抗を始めた。ここまでしておいて、今更止められるか。僕は抵抗する麻衣を押さえ付けて己自身を挿入した。

二年の間、誰も麻衣に触れていないと言う感覚に、僕はほくそ笑んだ。

「やあ……」

「暴れるな」

「だって……痛いんだもん」

「すぐに慣れる」

行為の後、僕の淹れた紅茶で麻衣の機嫌は直ってくれた。

「ナルが不愉快な思いをする度に抱かれたんじゃ、あたしの身が持ちません」

「久方ぶりだったから、痛かったただけだろ」

「……そう言うことを平気で言うかな。ナル。今日は安全日だからいいけど、避妊してよね」

「なぜ？」

「イギリスでならともかく、日本では、女子高生は普通、妊娠しないものなの。それに、あたしが妊娠なんかしたら困るのはナルですよ。昔みたいに基礎体温測って提出するからさ」

「僕が麻衣を抱くことに関しては文句はないんだな」

「悔しいけど、やっぱりナルが好き」

僕は、麻衣のその言葉を噛み締めた。

超能力騒動

ある日、渋谷サイキック・リサーチの事務所に友達がキツネ憑きになったと言う女子高生が来た。

「先月……。学校で友達がコックリさんをしてるのを見てたんですけど、その時、一緒に見てた子の様子がおかしくなっちゃって……。授業中に机に飛び乗ったり、体育の時、砂場の砂を食べたり……。それで、キツネに憑かれたんじゃないかって」。詳しいことは、実際にそのキツネ憑きの子を見てみないと何とも言えないんだけど、ナルはその依頼を断ってしまった。まあ、断る理由も分かる。

本人、もしくは親からの依頼じゃないと色々と面倒なことがある。学校内で起きている事件でも、校長や理事長などの学校に対して権限を持っている人から依頼が必要だ。

ただ気になるのは、あの後、同じ学校の子から立て続けに依頼があったこと。

その翌日。オフィスに訪れたのは、イカれたカウボーイ姿のぼーさんだった。

「ナルちゃん、やつほー。いやー。日曜の渋谷なんて来るもんじゃないね。あつ、麻衣ちゃん。アイスコーヒーちょうだい」

「ぼーさん、その格好……」

「あ、これ？ 今日、バイトだったのよ」

「バイトって……?」

「バックバンド」

「ええええーっ!?!」

「あのな。言ったことない気がするんで今言っけど。俺の本業はスタジオ・ミュージシャンってヤツなの！ いちおー、バンドも持ってるけど、ボーカルがいまいち君でなー」

「そ、そんじゃ、坊主がバイト？ え？ 高野山にいたってゆーの

は？」

「いたよ。俺んち寺だから、親父が坊主にしたがつたんだけど、山は、CDの持ち込み禁止だからさ。それにさ、この業界って意外に多いんだよ。祟りだのなんだって。元坊主ってことで、拝み屋が副業になってんの。納得？」

「…納得……」

「…それで？ 今日ほどんなご用件でいらしたんですか？」

驚きのあまり、騒ぎすぎて肝心なことを忘れてた。ぼーさんの依頼は、昨日来た女子高生と同じ高校だった。その直後、依頼人が訪れた。

「…実は、うちの学校で変なことが起こっているらしくて。その調査をお願いできないかと思ひまして……」

あまりのタイミングのよさに、あたしはジーンが何かしてるんじゃないかと思つてしまった。

調査中、夢を介して出会うジーンも、自分がどこにいるのかはつきりしたことは分らないらしい。あたしはナルと違って日本生まれだけど、子供の頃にイギリスに渡ったから漢字は読めるけど、地理には疎い。

ナルがジーンを捜すために旅行している時は、あたしが本物だと思つ調査の時だけ呼び戻すように言われていた。まあ、そんな調査は滅多にこないんだけどね。

こうしてやつて来たのは湯浅高校。私立の女子高なんだけど、妙な事件が続いているせいなのか、ナルを見てもあんまり騒いでない。先生や生徒達から話を集めていると、ぼーさんの知り合いだと言つ女子高生に、連続して事故に遭つと言う席に案内してもらつた。

ナルはぼーさんに気付かれないようサイコメトリしたようだったが、特に何も感じなかったようだ。

次の日。結局、あやこ、真砂子、ジョン、リンさんも呼んだ。留守番も兼ねてベースで待機していると、高橋さんが来て、スプーン曲げ事件の話をしてくれた。

「カサイ・パニック？」

「そ。三年に笠井千秋さんっていてね。超能力でスプーンを曲げちゃうの」

あたしはナルと一緒にその笠井さんに会いに行くことにした。そこでナルは笠井さんの信用を得るためにスプーン曲げを披露してしまっ。

「麻衣。分かっているとと思うけど、今のスプーン曲げは……」

「みんなには内緒でしょ」

「それもそうだが、特にリンには言わないでくれ」

「こう言う時のナルはちよつと年相応で可愛いと思ってしまう」。

「霊が全然いない！？ そんなはずねえだろ。真砂子ちゃん」

「いませんでしたわ。学校中を見て回りましたけれど、どこにも」

真砂子は霊が見えないと言った。だけどその夜、ジーンが校舎にある鬼火を見せてくれた。あたしも幽体離脱できるけど、霊媒師じゃないから、霊視の方はあんまりできないんだよね。

朝、ベースに向かうと、教室の外に笠井さんがいた。

「あれ、笠井さん？ どうしたの？」

「……今、来たの？」

「そうだけど……」

「…除霊進んでる？」

それが気になってたのか。

「え、えつと、あんまり……。霊媒の人がね、霊なんかいないって言うって……」

「まさか！ こんなに事件が起こってるのに」

「そうなんだけど、他に霊が見える人がいなくて……」

「渋谷さんとかあんたも霊能者なんでしょ？」

「あっ、あたしは違う違う！ ナ…渋谷氏はゴーストハンターだし「そうなの？ でも、中にいる人達が陰陽師がどうのって言ったけど」

ぼーさん達ってば、まだナルのことを疑ってたのか。勘違いする

のも分かるけど。それから笠井さんのことを少し聞くと、彼女は思ったよりもESPやPKについて詳しくかった。産砂先生からの受け入れたと話してくれた。

「へえ。スプーン曲げねえ」

「スプーン曲げなんていかにもじゃない？ あれでインチキ呼ばわりされなかった人いる？」

「さいですね。スプーン曲げゆうのは、もともとユリ・ゲラーが始めたんです。ユリ・ゲラーは二十世紀最高のサイキックやと言われています。PKから透視、予言……。できないことはないと感じて。そのゲラーがあちこちでスプーンを曲げて、それを見た子供らがマネをしてスプーンを曲げました」

ジョンはそれから、ゲラリーニや超能力について話してくれた。

「普通サイキックはPKやったらPK・ESPやったらESPのどつちかに分類できるんです。偶にまじつとる人もいますけど、大体分かります」

「だよな。エドガー・ケイシー。ジーン・デイクソンなんてすげえ予言者だけど、スプーンを曲げたって話は聞かないし。逆にニーナ・クラギーナとかオリヴァー・デイヴィスなんかは、かなりのPKをやつてのけるが ESPの能力を持つてるなんて聞かないもんな」話を聞いていると、どうもぼーさんとジョンはデイヴィス博士のファンみたい。

「麻衣はイギリスにいたんだから、少しはデイヴィス博士について聞いたことあるんじゃないか？」

「そうだね。ぼーさん達よりは詳しいかな」

あたし達がそんな話をしていると、ナルはちよつと気まずそうだった。

表向きに能力発揮して手伝えないもんだから、あたしは基本的にベースにすることが多い。だけど、ナルと二人でいる時、なぜか霊が現れた。ぼーさんがどうにか助けてくれたけど。

「あれ……ナルを狙ってるんだ」

翌日。笠井さんが産砂先生に昨日の話をしたことを教えてくれた。さらに、あの霊はナルの所に出たらしい。

「ああ。麻衣の勘は当たったな。昨夜、僕の部屋に出た。視線を反らしたらまずいと思っただんで、一晩中睨みあいだ」

「どうして、私を呼ばなかったんです？」

リンさんがナルの行動に怒っていた。

「リンさんの言うとおりだよ。ナルは自分の立場が分かってない」

あたしがそう言うと、リンさんがもつとやってくれとでも言う風に頷いていた。

「……悪かった」

こう言う時、素直に謝るのもナルなんだけどね。

「ところで、麻衣は何か感じないか？」

「あたし？ 鬼火がいるんだから、何も居ないってのも変だよな。」

それに、あたし、基本的にベースにすることが多いからなあ」

「では、谷山さんは昨日の霊を見て、どう思われましたか？」

「普通の幽霊とはちょっと違ったかな。それに、ナルだけを見ているのって何だか変な感じがした。……あ！ そうだ。ほら、あたしが大学入ったばかりの時にに行った調査でさ、日本の呪詛にはまった

人の依頼があつたじゃん。あの時に見た幽霊の感覚に似てるんだよ」

「呪詛ですか……」

「なるほど。その可能性はあるな」

ぼーさん達に人形「ひとがた」を使った呪詛である可能性がある」と伝えると、みんな、笠井さんを疑っていた。あたしには笠井さんが犯人じゃないと分かる。だけど、ここでは発言しないようにした。

記憶復活後の状況が分からなくて、あたしがイギリス出身であることは、すでにぼーさん達にはバレてしまっている。ナルのことを秘密にするためには黙っているのが一番なんだ。

全員で手分けして人形「ひとがた」を探したんだけど、これがまた大変だった。

事故の起きる席、陸上部の部室などから人形「ひとがた」を見つ

けたんだけど、全体的個体数が足りなかった。

「そう言えば、話すの忘れちゃったんだけど。笠井さんがさ、ぼーさん達がナルが陰陽師かもしれないって話していたのを立ち聞きしてたみたいなんだよね」

「……なぜ、僕が陰陽師なんだ？」

「森下事件で人形「ひとがた」使ってたから。産砂先生に話したって言ってたから、ナルだったらいい感じに解決できるよね。……少し情報収集したいんだけど、見張ってってくれるかな」

あたしは、ナルの返事も聞かずにトランス状態に入った。そして、学校の裏手の空き地に嫌な感じがした。

「何か分かったか？」

「裏手の空き地の辺りに、何か嫌な感じがした」

あたし達は空き地に向かった。子供の声が聞こえて、マンホールに入ろうとした時、足を引っ張られた。

「……いいか、落ち着いて。梯子に足を掛けるんだ。できるな？」

だけど梯子が壊れた。あたしがナルの手を離そうとしたのに、ナルと一緒に落ちた。ジーンがないのに、ナルはPKを使って、一緒に落ちる瓦礫を砕いた。

「ごめん……なさい」

「泣くな……。麻衣が無事なら別にいい」

「良くない！ あたし、せっかく手を離そうとしたのに……」

「あの高さから落ちたら、麻衣は大ケガしてたかもしれない。それに、僕に何かある時は、麻衣が予知をしてくれただろ。だから、大したことはない」

リンさんが来てくれるまで、あたしはとにかく、ナルの体が冷えないようにしがみ付いていた。マンホールの中からは、人形「ひとがた」が大量に出て来た。

ナルはその後倒れて入院する羽目になった。リンさんも慌てていたのか、ナルの保険証を出しちゃったみたい。産砂先生のことを話して、とりあえず調査は終了した。

「谷山さん。実は、ナルとも話したんですが、あなたが能力者だと言ったのを滝川さん達に話してしまおうと思います」

「え！でも、そんなことしたら、ナルのこと……」

「みんなの前で麻衣のサイ能力のテストをすればいい。麻衣が実は超能力者であることが分かれば、麻衣も動きやすくなるだろう」

ナルの退院後。予定通り、みんなが集まっている最中にあたしのサイテストが行われた。千回のランは全てゼロだった。何回やっても当たらないのが頭に来る。

「麻衣は潜在的にセンチタイプだ」

「センチタイプ？ 麻衣が！？」「こまやかな」「感受性の強い」
「！？」

「サイ能力者。ESP超能力者」

その後、動物呼ばわりされたことに頭に来て、スプーン曲げしたことを暴露してやった。

クリスマスの奇跡

それは日本に来て最初のクリスマスの日のことでした。協力者であるブラウンさんの依頼で、私達は教会に向かいました。

「麻衣！。走ると転ぶぞー」

教会を見てはしゃぐ谷山さんは、相変わらずですね。そう言えばイギリスで、日本風の建造物を見て、ジーンと二人ではしゃいでいたことがありましたね。

「クリスマスに教会！ いいねえ。やっぱ、こーでなくちゃ」

「麻衣。遊びに来たなら帰れ」

ナルに叱られて、谷山さんは真面目な態度に切り替えていらっしやいました。

「渋谷さん。この方が依頼人の東條神父さんです。こちらは、渋谷サイキック・リサーチの所長さんで渋谷さんです」

ブラウンさんに東條神父を紹介してもらった後、教会に入ろうとした時、教会にいた国際的な子供達を見て、谷山さんは少し沈んでいらっしやるようでした。

「この教会では、時々妙なことがありまして。今朝も様子のおかしい子供がいて、ブラウン君に連絡をしたら、そちらに願いは、と」

「妙なこと？」

「はあ……。それが……」

「さっきの 外に子供がいてましたやろ？ 時々、あの子らの中に憑依されてしまうお子がおるんです」

憑依された子供は隠れてしまっらしいのです。とりあえず私達は、その憑依しているケンジ君と言う少年の霊を調べることにしました。私が機材を用意していると、いつの間にか昼の時間になってしまつたらしく、東條神父がお昼をご用意して下さいました。外にいるナル達にそのことを知らせに行くと、突然後ろからしがみつかれま

した。

「お父さん！」

それは、タナットと言う名前の子供で、憑依されていた子供のようでした。

「私を父親と間違えているようです。誤解を解いて下さい」

「父親……。そうですか……。この子は父親に似た人を見るとこうなってしまうんです。何だか……。あなたは、特別似ていらっしやるような気がします。三十年も前のことなので、記憶がはつきりしません」

私はナルに言われて、仕方なくケンジ君を相手にしていたんですが、どうも子供は苦手ですね。私の様子をドアの隙間から覗いている滝川さんと谷山さんの会話もちらほら聞こえました。

「天にまします我らの父よ。願わくは御名を崇めさせ給え。御国を来たらせ給え。御心の天になるごとく、地にもなさしめ給え。」

「何か、可愛いそう」

「ん？」

「ケンジ君。お父さんに会えて喜んでるのに、また、引き離しちゃうんだよね」

「……あ……。でも、タナットだってずっと憑依されてたら可愛いそうだろう？」

「そうだけど……」

「イン・プリンシピオ」

ようやくケンジ君の霊がタナットから落ちたと思った矢先、今度は谷山さんに抱き付かれてしまいました。私は、ナルの顔を見るのが心底怖かったです。

「すつ、すんまへん！ すんまへん！ えらいこつちゃ。谷山さんの中に入ってしまったみたいですよ〜っ」

それからは、谷山さんに憑いたケンジ君の相手をさせられていたのですが、次第に機嫌の悪くなるナルの視線に耐え切れなくなりま

した。

「いい加減にして下さい！　こんな茶番に付き合う理由がどこにあるんですか。離しなさい。私は君の父親ではありません」

「ちよいと、リンさん」

「人違いです。こんなことはやめてもらいたい」

「おい、嬢ちゃ　　じゃない、ケンジ！」

走って逃げて行ってしまったケンジ君は、その後すぐにかくれんぼの合図を鳴らしていました。

「彼は隠れる。見つけてくれと合図を出す。見つからなくても出て来るからいなくなるのが目的ではない。東條神父の言うように見つけて欲しいからなんだろう。　なぜだ？」

「……あー……そうか。そうだな。戻りたいから見つけて欲しいんだ。教会って言うか「家」だな。形じゃなくて父親と一緒にいる場所に」

「彼は戻りたいんだ。教会に……ひいては家に。そのために見つけてもらいたい。ゲームを終わらせたいんだろう」

四人で捜してもなかなか見つからず、子供達に捜すのを手伝ってもらうことにしました。その過程で、滝川さんが重要なことに気付かれました。

「ジョン！　高い場所だ。全然捜してない！　子供達がさつきから、俺達も探した場所しか捜してない。だけど、同じ場所でもあいつらの見てない場所があるんだ。俺達の視線の高さだよ！　自分達の視線より上の高さは頭がないんだ。俺達も同じだ。上の方は見てない」

「……そやったら、外もそうなんちゃいますか？」
外の木の上にいたケンジ君は、見つかると再び私にしがみ付いて来ましたが、ナルが彼の遺体を発見するとようやく、谷山さんの体から離れてくれました。

「　　そっかあ。ケンジ君、見つかったんだ。かわいそうにね……。戻れてよかったけど」

「そだな」

「あつ、でも、ケンジ君には悪いけどつ。タナットに懐かれてるリンさんは面白かったね！」

谷山さん。お願いですから、それ以上、そのことは仰らないで下さい。

私はその夜、ナルに大量の仕事を押し付けられて過労で倒れる夢を見ました。

コックリさんで呪詛

夏休みが明けてすぐのことだった。ぼくの通う高校の一年生が自殺した。

それからぼくの学校では奇妙なことが起こり始めた。ぼくは生徒会長として、生徒の訴えに耳を貸さない先生達とのクッション役を務めていた。

除霊まがいのことをやろうとした生徒もいたが、騒ぎが沈むことはなかった。

「安原会長。これ、生徒から集めた署名です」

「ありがとうございます」

「……本当に行くんですか？ 校長だって断られたって話ですよ」

「だけど、このままじゃどうにもならないだろう。先生達に訴えても、気のせい的一点張りで解決できるわけじゃない。こう言うのはプロに任せるのが一番だって言うだろう」

「それは、そうですが……。でも、本当に信用できるんですかね。」

その『渋谷サイキック・リサーチ』って心霊事務所

「……話に聞くと、都内の高校の校長の間では有名な心霊事務所らしいよ。だから、うちの校長も行ったんだと思う」

ぼくは生徒全員の署名を集めて、東京都渋谷区に向かった。

東京には時折遊びに来るぐらいだけど、ぼくは住所を頼りに、その心霊事務所に向かった。

「さすがに人が多いですね……」

誰かに道を尋ねようかと考えていると、蜂蜜色のショートでセーラー服を着た女子高生がぼくに話し掛けてきた。

「こんにちは」

ぼくは最初、これがいわゆる逆ナンと言うやつだろうかと思った。だけど、次に続く言葉を聞いて、さすがのぼくでも驚いた。

「渋谷サイキック・リサーチをお探しなんですよ。あたし、そこ

のバイトですから案内しますよ」

名前を聞くと、彼女は谷山麻衣と言う名前だと言う。渋谷サイキック・リサーチのオフィスは、カフェの二階にあった。

「あの……。なぜ、ぼくがこの事務所を探していると分かったんですか？」

「あたしが予知能力者だからです。……。あ、このこと、仲間以外には内緒にして置いて下さい。人に話すとナルに怒られるもんで」

「分かりました」

ナルと言うのが恋人か何かなのだろうと思った。

事務所に行つて、谷山さんが呼んで来てくれた所長を見て、思わず見とれてしまった。

「緑陵高校の生徒会長をしています。安原修と言います」

ぼくは、渋谷さんに生徒達の署名を集めたものを渡しました。

「……。今、学校はひどい状態です。最初はありがちな怪談がいくつがあっただけでした。それが、今では毎日、変なことが起こっているんです。みんな不安で心細い思いをしています」

「……。正直言うと、緑陵高校の事件には興味を持っています。ただ、僕は、マスコミと関わるような事件は……」

「お気持ちばかりです！ ぼく達も、毎日押しかける取材に迷惑していますから。だからこそ、いっそう早く、事件が解決されることを願っているんです。どうか、お願いします！」

「……。麻衣、緑陵高校に電話してくれ。依頼をお引き受けしますと」
数日後。所長の渋谷さん、谷山さん、それと滝川さんと言う方が学校に来てくれました。三人は、松山の案内されて来ました。

「お待ちしました」

「安原！ お前、授業は」

「三年はもう短縮授業ですから」

「受験は大丈夫なのか」

「ご心配なく」

松山は相変わらずの性格だ。

「手っ取り早くやつてくれ。俺も忙しいんでな！」

「先生はお帰り下さって結構です」

「そうはいかん。生徒を管理するのが俺の仕事だ」

「先生はここじゃ、ただの役立ずなんですから、いない方がよろしいかと思えますけど」

谷山さんの一言に松山は青筋を立て、滝川さんは驚き、渋谷さんは溜め息を吐かれています。

「なっ！」

「自分達でどうにも出来なかったんだから、依頼をしたんですよ。だったら、自分の身の程を知って下さい。先生が教師のプロなら、あたし達は心霊や超常現象のプロなんです。先生だって、畑違いの人間に文句を言われると頭に來ることありますよね？」

「おいおい、麻衣……」

「それでも関わりたいと言っのなら止めません。自分で自分の首を絞めることになりますよ。……まあ、死にたいなら別ですけど」

谷山さんの冷やかな冷笑には、ぼくも背筋が冷たくなりました。いい加減にしろ。……とにかく、松山先生はお引き取り下さい」

渋谷さんが谷山さんの頭をファイイルで叩くと、最後は渋谷さんの決めの一言で、松山は怒って出て行ってしまいました。

「……谷山さんって、最初にお会いした時と印象が違いますね。ぼく、思わず背筋が凍り付きました」

「ナルちゃんの毒舌がいつ飛び出すか楽しみにしてたんだけどな」
「豚に説教しても意味がない」

「ところで麻衣。何だ？ さっきの発言は？」

「……あの松山って先生から嫌な感じがするの。あの人と一緒にいたくない」

渋谷さんに事件の関係者を呼んで来るように言われた直後、近くの教室から叫び声が聞こえたので駆け付けると、黒い犬が教室にいました。

犬はすぐに消え、ぼくはケガをした生徒を負ぶって保健室に連れ

て行きました。それから、生徒達に呼び掛けて、怪談に関係した生徒を事件ごとに分かれて向かうように伝えました。

「次の生徒達を連れて来ました。「集団食中毒」の
ぼくは会議室に入り、イスに座りました。

「よろしくお願いします」

「…安原さんも被害者だと言うことですか？」

「そうです」

ぼくは異臭のする教室の話をしました。妙に生臭い教室。気分の悪くなる生徒達。

それから彼らを教室に案内することになりました。渋谷さんと谷山さんが教室を回りながら見ていると、渋谷さんが突然、

「ここで、何か変なことをしませんでしたか？」

と、言いました。

「変なこと…ですか？」

「降霊術のような」

「降霊って……」

「ヲリキリ様のことじゃない？」

「ばっか、違うよ！ だって、あれは……」

「ヲリキリ様？」

「最近……ていうか、二学期になってからはやっているんです。ヲリキリ様とか権現様とか……まあ、いわゆる……」

「あたし、持つてる！ まだ、使っていないやつ」

「ほら、これ！ 学校中で、すごい流行ってるんだよ」

「！ コツクリさんじゃねえか！」

「ええっ!？」

「違うよ！ コツクリさんは狐を呼ぶんでしょ？ ヲリキリ様は神様を呼ぶんだよ。恋愛とかよく当たるんだから！」

「……権現様、花子さん、キューピッドさん、エンジェルさん、全部コツクリさんの別名。名前が何だろって、やっつてるとは同じ！」

面白半分に霊をオモチャにしていることになるんだ」

「そんなあ！ フリキリ様は神様だから危なくないって……」

「そんなのは、デマだ。霊を呼ぶのは素人でも出来るが、帰すのに訓練がいる。二度とやるな！」

滝川さんは怒って、紙を丸めてしまわれました。

フリキリ様をした生徒を数えるのを手伝うと、思った以上に多くの生徒がこの降霊術に関わっていました。

「ナルちゃんよー。本気でやんのー？ やなんだよねー。コックリさんて、とんでもねえ霊を呼び出したりするからさー」

「そこを何とかお願いしま……」

「そーだっ。除霊のやり方教えるから君がやれ！ そーだ。そうしよう。そりゃいーわ！」

「…ぼーさんっ」

滝川さんは、谷山さんに殴られました。

「だつてー！ んじゃ。お前、松山の態度見てヤル気出るかー？」

「すみません。松山はああ言うやつなんです。生徒達もね、あいつに関してはサジを投げてるんですよ。人の意見なんか聞く奴じゃないかですから、こつちが大人になってガマンしてやらないと」

「そんじゃ、松山に何か言われたんじゃねえの？ 安原クン。俺らんとこに依頼に来ちゃつてさ」

「大丈夫です。ぼくは成績いいから」

松山ごときに付け入る隙を与えるようなぼくではありません。それから少し、コックリさんの話になりました。

夜になって、リンさんと言う背の高い男の人と、松崎さんと言う女性がいらつしやいました。泊まることを伝えると、早速こき使われてしまいました。

「…最近の霊能者ってこんな機械を使うんですか？」

「うちは特別なんです。…ゴースト・ハンターって言うんですよ」

「あ、知ってる。それ」

それは、坂内がなりたいた言っていた職業だった。

「ところで、谷山さんの見立てではどうなんですか？ うちの学校

は。これから起きることも予知されたんですか？」

「やろうと思っても、見たい範囲が見えるわけじゃないんです。明日になったら、あたしと同一年の霊媒師の女の子が来ますから、彼女に霊視してもらってからですな」

「そうですか。残念だな。谷山さんの本領発揮が見れると思ったんですが。……とところで、最初にお会いした時に仰っていた「ナル」と言いう人物。あれって渋谷さんのことですよな？ 渋谷さんは谷山さんの能力のご存知なんですね。もしかして恋人ですか？」
ぼくは聞くと、谷山さんはどう返答しようか考えているようでした。

「じゃあ、ぼくにもチャンスがあるってことですかね」

「……それもちよっと……。今から言う話、当分の間、誰にも話さないって約束できますか？」

谷山さんの突然の言葉にぼくは二つ返事で聞くことにしました。

「先ず一つ目。安原さんは今後、あたし達に関わることになると思います。このことは、次にナルから話が来たら教えてもいいです。

二つ目。明日来る霊媒師の女の子に、さっき安原さんが言った発言をするの止めて下さい。ただ、いずれにしるバレちゃいますけど、今はまだ、その時じゃないんで」

「分かりました」

翌日。谷山さんが仰っていた通りに原さんとブラウンさんの二人がいらっしやいました。谷山さんをベースに残して、ぼくは渋谷さんとリンさんの手伝いをするようになりました。各教室を案内したりと。

「そう言えば、昨夜、谷山さんに渋谷さんとの関係をお聞きしたんですけど、はぐらかされちゃいました」

ぼくは渋谷さんの反応を見ただけで、彼は無反応だった。敵は、なかなか手強い。

先に会議室に戻ったぼくは、居眠りしている谷山さんを発見。

「……うん。分かった……」

「何が「分かった」んです？」

「サボってるけど渋谷さんに言い付けちゃいますよー」

二人で話していると滝川さんとブラウンさんが戻って来ました。
「気を利かせて下さいよ。いいところだったのに」

「……少年や。少し、おじさんと話をしよう」

「はあ」

「気持ちには分かるが状況と場所を考えにやいかんぞ。やはり、こーゆーことにはムードっちゅーモノがだね」

「あ、そうですね。じゃあ次は頑張ります」

「……麻衣が好きなのか？」

「好きですよ。あつ。でも、渋谷さんも好きだなー。キレイだし。

……でも、滝川さんはもつと好きです……」

滝川さんをちよつとからかって遊んでみました。ブラウンさんと谷山さんの反応が面白いですね。それから、ESPと霊媒の関係性について話していました。

「ボク、何かで読んだことあるんですけど、霊媒には二通りあるんじゃないかて……霊媒とESPと」

「ああ……。デイヴィス博士の論文じゃないか？」

「やと、思います」

「博士の兄弟にユージン・デイヴィスゆうう人がいはるんですけど、この人は、完全な霊媒やと博士は言わはるんです」

「……まあ頭を使うのはナルに任せとこうや。ちゅーわけで、麻衣、お前何か感じないか？」

「ちよつ、ちよつとイキナリそんな」

「あ、谷山さん言ってたじゃないですか。火事が起こるの放送室じゃないかって」

彼らは谷山さんの能力を知らないと言っていたな。そう言えば、何で彼女は、ぼくにそんな重要なことを教えてくれたんだろうか。機会があつたら聞いてみよう。

渋谷さんが話を聞いて放送室に機材を置いたんですが、明け方、

谷山さんの仰ったとおり放送室が火事になりました。

「他に鬼火がいたと言う場所は？」

「えと……。印刷室……と、LL教室と……。保健室のが大きかったかも」

その日、再びあの黒い犬が現れたそうです。谷山さんはなぜか、松山と一緒にいたそうです。ぼくはヨリキリ様の発生ルートを調べたのを報告しに行きました。

「あの……いいですか？ ちょっと気になることを聞いたんですけど」

「何ですか？」

「ぼく、ヨリキリ様の発生ルートを辿ってみました。ちょっと気になったもので。ヨリキリ様はやり始めたのは、二学期以降みたいです。分かっているルートは二つ。一年生から聞いたと言うのと、美術部の奴から聞いたと言うものです。……それで、その……気になると言うのが……。死んだ坂内が美術部だったんです。もちろん絶対に意味があるってわけじゃないですよ。飽く迄も情報の一つですから」

「意味があるにしろ、ないにしろ、ともかく二学期以降、一年生が美術部の間ではやり始めたってわけだ」

「どれほど降霊術を行ったところで、何の訓練もしていない素人が、これほど大量の霊を呼べるとは思えないな」

「この場所が墓だったって言うのは関係ないんですか？」

「まあ、ありがちだな」

「あ、バカにしましたね。墓って言うても緑陵遺跡って言う奈良時代の墓地があっただんですよ」

「なるほどな。古い墓地と言うのは、霊がさまよい出て祟りを行わないように血塊を引いた場所だ。呼び出された霊が結界のせいで出られなくなってしまうた可能性はあるが……」

「こんだけの霊を何で、生徒達が呼び出せたのか、ゆう、肝心の部分が謎のまんまですね」

「あーそっか、そっだよねえ……」

「……どうも分からないな。この学校は」

夜になって、谷山さんだけがいないことが分かり、みんなで捜すと彼女は生物室で倒れていました。生物室はホルマリンの匂いが充満していました。

それからブラウンさんと二人で、夜の見回りに行ったのですが、松崎さんが慌ててやって来ました。

「ちよつと！ 麻衣が印刷室が危ないって言ってるんだけど！」

「ほんまどすか？」

「何だか、ひどく慌ててたわよ」

「そやつたら、印刷室には近付かへん方がええですね」

「安原君も戻りましょう」

「分かりました」

その直後、大きな音と共に振動が。ぼく達は一瞬、地震かと思っ
てしまいました。渋谷さんがいち早く、保健室に向かったそうです
が、床は陥没、天井が落ちてきたそうです。

今回のことで、先生達は調査の中止を決定しました。

「か「帰れ」って……調査の途中なのに？」

「会議でそう決まったんだとさ」

「この状態のままほつぼつて帰れつての!？」

「でもなあ。「ここまで事態が悪化したのは、あんた達が中途半端
に手を出したからじゃないのか!？」って。…まあ、依頼人にそう
言われちゃ、ひっこまなきゃしゃあねえだろ」

「そんなこと……。ナル！ いいの!？」

「だって……あれがいるのに。このままほつといたら、また、残っ
た霊同士が共食いをして、そしたら……そしたら、どんどん強くな
って、最後には一番強い霊が残っちゃうんじゃないの!」

「麻衣。もつと具体的に説明できるだろう」

渋谷さんがそう言うと、谷山さんはこう言いました。

「……霊を使った蠱毒が行われてる。……フリキリ様は、呪詛なん

だよ」

「……安原さん。ヨリキリ様に使われる紙を用意してもらえますか？」

「あ、はい」

ぼくは会議室を出て、その辺の生徒に持ってないか聞いてみた。紙はすぐに見つかった。渋谷さんに渡すと、さらにリンさんに見せていた。

「谷山さんの仰るとおり、これは呪符です。それも、神社の下に埋めてあるからには 人を呪い殺すためのもの」

「谷山さんには、何で分かったんですの？」

原さんがそう聞いても、谷山さんは答えない。予知能力は仲間には言っていていいと仰っていたのに。何か、答えられない理由があるのだろう。と、思っていると、谷山さんは大きく溜め息を吐きました。「あたしは、その紙を一度見ているから……」

「俺だって、見てるぜ」

「ぼーさんはコックリさんだと思って、その紙をちゃんと見なかったでしょ。そこに書かれている梵字、ぼーさんなら読めると思うけど」

滝川さんがそう言われて、その紙を見ました。

「マツヤマヒデハル……」

「……この学校であいつに会った時から嫌な感じがしてたの」

「麻衣は、知っていて黙ってたのか！」

「あたしは最初の時に言ってる！ 松山の態度が自分の死を招くって。……ぼーさん達なら、大丈夫だなんて思った自分が嫌になる」

「それは、俺達に対する嫌味か？」

「何だか、険悪なムードですね。」

「違うよ。制約があり過ぎて、全部話せない自分が面倒。いつそのこと、自分のこと、全部話しちゃいたい気分」

そんなやり取りをしている最中にこの男は本当にタイミング悪く、会議室に来た。

「帰る準備は済んだか？ もう、用はないんだ。さつさと引き上げるんだな」

渋谷さんが呪符が行われていたことや、松山本人が狙われていたことを話しました。

「！ さ、坂内か！？ あ、あのバカ。何てことをしてくれただ！ 何で俺が……」

ぼくはその言葉に怒りさえ覚えました。いじめが殺人として立証できるのなら、坂内君を死に追いやったのは、紛れもなく松山本人だった。

「なぜ自分が選ばれたのか、本当に分からないんですか？」

「……安原……」

「「ぼくは犬ではない」坂内君の遺書に全文です。ぼくらは学校がぼくらを犬のように飼い慣らそうとしているのを知っていました。

その代表が誰かと聞かれたら、ぼくでも先生を上げます。先生は学校の象徴だったんです」

渋谷さんは松山を助けると言った。だけど、彼が生徒を見捨てると思えませんでした。

「ど、どうにかならんのか！？」

「解決策は？」

「ありません」

「呪詛を返すことは出来るだろう？」

「出来ませんが……。返してもいいのですか？」

「……やむを得ないだろうな。死んだからと言って心が痛む相手じゃないが……。死ぬと分かっている見殺しには出来ない。呪詛は返す」

「呪詛を返す……？」

「呪詛を呪った本人に返すと言うことだ。残った霊同士が食い合っで、もう間もなく蠱毒は完成するだろう。そうすれば松山に待っているのは死だけだ。それも、恐らく残酷な」

「は、はは。はは……たす、助かるんだな？ ははっ。そうだよな。」

何で、俺が死ななきゃならんのだ」

「先生。そもその原因はあなたです。覚えて置いて下さい」

それから準備があると言って、渋谷さんはリンさんと一緒に出て行ってしまったのですが、なぜか、谷山さんまで連れて行かれたことに、皆さん驚いていました。

「……麻衣って、一体何者なのかしらね」

「そーだな。妙なことが多すぎる」

「そうなんですか？」

「……少年は、何か聞いてないか？ 今回、随分と仲良かったじゃねえか」

「実はぼく、最初に渋谷サイキック・リサーチを訪ねた時、場所が分からなくて人に道を聞こうと思ったら、谷山さんの方から話し掛けてきたんです。「渋谷サイキック・リサーチをお探しなんですよね」って」

「本当ですか？」

「ぼく、驚いちゃいましたよ。まだ、何も聞いてないんですよ。したら彼女、予知能力者だから分かったって教えてくれたんです」

「マジかよ。麻衣の秘密ってのは、そのことなのかもな」

「渋谷さんもご存知みたいですよ。人に話すと怒られるって言うてましたから」

「さっきの行動と言い、あの二人、怪しくないかしら」

予知能力のことは話すなど言われてないから、話してもよかったですよな？

渋谷さんは人形「ひとがた」と言う木で出来た人形で、ぼく達、生徒全員を助けてくれました。

「トコロデ少年。ここだけの話だけだな。実は、あん時、ビビってたろ？」

「あの時。……ああ、呪詛を返すって言われた時ですか」

「そうそう」

「んー……。でも、ぼく、信じてましたから」

「何を？」

「自分を。だって、この若さで死ぬほど悪いことをした覚えがないですから。何があっても自分だけは助かるって自信がありました」

「…お前さんは長生きするよ……」

今まではつまらない人生でしたが、こんな楽しい方達とお近付きになれるなんて、ちょっと考え方を変えてみようかな。その前には大学受験に集中することにしましょう。もちろん、坂内の慰霊祭と、学校の体質改善が終わったんですが。

まどか来日

四月の始め。日本に行く用事が出来て、その準備に追われている時だったわ。

チーフ。日本からお電話です

こんな時に……。もうっ

電話を受け取ると、それは麻衣ちゃんからだったの。彼女は、二年半前に飛行機事故で亡くなったと思われていたんだけど、実は生きてて、記憶喪失中に日本に行ったナルと再会。記憶が復活したらしくて、去年の夏に生きてるって分かったのよね。

麻衣ちゃん。どうしたの？ 電話くれるなんて。日本は今、朝でしよう

時計を確認すると、時刻は夜の九時をちよつと過ぎたところ。

『まどかさん。近日中に日本に来る予定がありますよね。ちよつと頼みたいことがあって』

驚くことじゃない。予知。それが彼女の能力なのよね。

いきなり行つて驚かそうと思つてたのに、麻衣ちゃんにはかなわないな。それで用事つてなあに？

『持つて来てもらいたいものがあるんです。あたしがそつちにいた時に首から提げていたペンダント覚えてます？』

確か、ご両親の写真が入っていたやつね。ジーンとナルからプレゼントトされていた

『そうです。新学期に合わせて部屋を掃除していて忘れたことに気付いたんです。今まで気付かなかったんだから別に構わないかもしれないんですけど。何だか手元にないって気付くと寂しくて』

分かったわ。ライター教授の所に寄つてから受け取つて来るわ
『それと、あたしがまどかさんと知り合いだつてことは隠してもらいたいんです』

あら、どうして？

『あたしがイギリス出身だったこと、協力者の人にバレちゃってるんです。だから……』

ナルの秘密を守るためだもんね。……分かったわ

『まどかさんが来る時、ちゃんとナルに事務所にいるように伝えときますから』

お願いね

麻衣ちゃんからの電話を切った後、わたしはライター教授に電話をしたわ。翌日、ライター教授の所に行ってペンダントを受け取ったわ。

麻衣ちゃんに伝言はありませんか？

時々でいいから、手紙や電話が欲しいと伝えてくれないかな。忙しいかもしれないけど、生きてると分かったら、本当は会いに行きたいんだけどね

彼は苦笑しながらペンダントを渡してくれたわ。それからデイヴィス家に行つて、同じようにナルへの伝言やお土産も受け取ったわ。麻衣ちゃんに会えるのは楽しみだけど、知り合いじゃないフリをしなきゃならないなんて辛いわ

……でも、本当にマイが生きていたなんて奇跡だわ。……きつと、ジーンが引き合わせてくれたのかもしれないわね

麻衣ちゃんの話では、ナルに再会して、調査の手伝いをさせられていた時の事故で記憶が戻ったらしいわ。ただ、記憶を失っていた間の記憶が全くないらしくって。どうやって生活していたのか分からないんですって

そうなの？

ええ。とにかく、日本に行くことになってから会えるの楽しみにしてたのよね

私も早く、マイに会いたいわ

息子よりも未来の娘なの？

当然でしょう。無愛想な息子も可愛いけれど、マイはもっと可愛いもの

数日後。日本に向かったわたしは、セーラー服姿の麻衣ちゃんを見つけたわ。

「こんにちは」

「いらっしやいませ。ご依頼ですか？」

仕事なんだろうけど、ちよつと他人行儀な感じが寂しいわ。

「なんてね。まどかさん。お久しぶりです」

「わたしのこと、忘れてなかったのね。嬉しいわ」

「だって、まどかさん、全然変わらないんですもん」

「ところで、ナルはいるかしら？」

「ちゃんと所長室に閉じ込めておきました。リンさんも呼んで来ますね」

麻衣ちゃんはそう言いながら、所長室に向かいドアの外からナルを呼び、機材室にいるリンにも声を掛けていたわ。

「それで、まどかが来た理由は？」

「麻衣ちゃんから聞いてないの？」

「聞いていたら確認をするだけだ」

「それもそうね。実は、南心靈調査会つてところが、オリヴァー・デイヴィス博士のニセモノを連れて歩いているらしいのよね。ちよつと調べてみて欲しいのよ」

「ナルの偽者……ですか？」

「ええ。彼らが次に調査する場所までは調べがついているの。長野県の諏訪にある大きな屋敷よ」

わたしが資料を見せると、三人は驚いていたわ。

「リンさん。これって、この間依頼に来た調査場所ですよね？」

「そうですね。それよりも……谷山さんでも気付かれなかったんですか？」

「……まどかさんが日本に来るのが見えただけなので。それよりも、ナルはどうするの？ 場合によってはマスコミ沙汰だよね？」

「……安原さんに代理を頼もうと思う。彼なら慣れているし、性格的にも合っていると思うんだが」

「そうかもね。ぼーさんを手玉に取って遊ぶところなんか」

知らない人達の名前が出てきたけど、こっちで出会った協力者なのかしら。

「あ、安原さんって言うのは、前の調査で出会った高校生……今は、大学生か……。で、ぼーさんってのは、元お坊さんのミュージシャンなんです。他にも協力者が三人いて、ナルの毒舌にもくじけないバイタリテイあふれる人達ばかりですよ。今日はいませんが、時々事務所に来るんです」

「ほとんど喫茶店扱いだけだな」

「いいじゃん。ナルがお茶を淹れるわけじゃないんだから。それに、こっちで一人でいることが多いから、みんなが来てくれると嬉しかったりするんだよね。二人ともお籠りばっかだから」

麻衣ちゃんがそう言うと、ナルはばつが悪そうに、リンは申し訳なさそうにしてたわ。

「ねえ、明日は日曜日だし、麻衣ちゃん、わたしが泊まってるホテルに遊びに来ない」

「え、でも……」

「いいじゃない。ね」

「まどか!」

「ナルやリンはいつも一緒だからいいけど、わたしは明日から、今日初めて会ったフリをしなきゃならないのよ。少しくらいいいですよ」

わたしは無言を言わず麻衣ちゃんを連れて行ったわ。

麻衣ちゃんは、ナルとどうなってるの？

どう……って

付き合ってるのかってこと

表向きは、ただの上司と部下です……

表向きは……ってことは、付き合ってるのね

文句言つと、機嫌が悪くなるんです。リンさんにとっては、わたしは未だにナルのご機嫌取りみたいなものですね

リンの気持ち分かるわ。麻衣ちゃんがなくなった後、本当に大変だったのよ。なのに……ジーンまで

……あたしがいたら、ジーンの死は回避できたのかな

麻衣ちゃんが気に病むことじゃないわ

……まどかさんに秘密にしてたんですけど、あたし、調査中に夢でジーンに会うんです

その言葉には驚いたわ。それは、ジーンがこの世にさ迷っているってことだから。

ジーンにも自分の居場所が分からないらしくって、一生懸命旅行して、自分を捜すナルを見ているのが辛いつて言っていました

そのことをナルには？

ジーンに会ったことは知ってます。場所が分からないことも伝えました。……だから、余計にナルを見ていると落ち込んだりして

寂しそうな顔をする麻衣ちゃん。麻衣ちゃんはジーンと仲良しかったものね。それにしても買い物に行けなくて残念だわ。次のチャ

ンスは、調査終了後ね。

迷路屋敷

ある春の土曜日。最近よく協力を依頼される渋谷サイキック・リサーチの所長から依頼を受けた。翌日の日曜日、SPRの事務所向かうと、綾子や真砂子ちゃんにジョンもいた。

「事件の依頼を受けた。そこで、全員に協力を頼みたい。結構大きな事件になると思う。依頼主は内密に処理したいようだが、マスコミがかぎつければ大騒ぎになるのは目に見えてる。本来なら受けたくはないんだが、多少事情があつてやむをえない」

「それは、大橋さんとおっしゃる代理人の方からの依頼ではございません？ あたくしのところにも先週依頼がございましたわ」

「では、原さんは別行動になりますね」

「もちろん、あたくしなりに協力はさせていただきますわ」

「ともかく、僕は極力目立つことは避けたい。そこで、安原さんに身代わりをお願いすることにした」

「どーも」

扉の奥から現れたのは、前回の調査で知り合つた安原少年だった。さすがにちよつと驚いた。

「ナルちゃんのマスコミ嫌いは分かるが、影武者を立てるほどのことなのか？」

「そうでなければ、わざわざ安原さんに来てもらつたりしない。依頼主は、他にも何人が霊能者を集めたようだが、そのほとんどが、マスコミでもてはやされてはいるが、うさんくさい連中だ。僕は、ああ言つた連中と係わり合いになりたくない」

「…ハン。自分がイヤなことを他人に押し付けるわけか」

「気が進まないなら、帰つてもらつても構わないが？」

「…もつっ。どうして、ちゃんとお願ひしないの！ 人に物を頼む時には、それなりの口調つてものがあるでしょう？ いつも言つてるのに、学習効果のない子ね！ ごめんなさいね！ この子、礼儀

を知らなくて」

「まどか！ 黙っていただけませんか。話が進まない」

「あら、そうね。ごめんなさい。だったら、口の聞き方に気を付けてね」

森まどかと紹介された、麻衣曰くナルの師匠と言う女性は笑顔でナルをやり込めていた。

「…ナルは、派手な舞台を嫌うのね。さっきも言ったとおり、今度の事件も断るつもりだったらしいんだけど、わたしの事情で引き受けてもらったの。皆さんにはご迷惑だと思っけれど、協力して下さい」

「あれ？ でも、そしたらナルは、どう言う立場の人になるわけ？」

「…僕は、ここの単なる調査員と言うことになる」

「こんなにエラそうなのに……。しかも依頼人は、元総理大臣だった。」

真砂子を除く俺達八人は、長野県の諏訪市に向かった。まどか嬢は別行動で外で調査を、残り七人が美山邸へ。それにしても、結局まだ、麻衣のことはほとんど聞けず仕舞いだ。

「ようこそおいで下さいました。わたくしは大橋と申します。今回の件については全権を任されております。わたくしを依頼主と思っただけでも結構です。ところで、所長さんは……」

「あ、ぼくです。所長の渋谷一也と申します」

「お聞きしてた通り、ずいぶんとお若くていらっしやる。そちらの皆様は」

「親しくさせていただいている霊能者の方達です。今回の件で協力をお願いしました」

「あ、滝川法生と申します」

「松崎綾子です」

「ジョン・ブラウンと言います」

「こちらの三人は、ぼくのアシスタントです」

「谷山麻衣です」

「 鳴海一夫と言います」

「 林興除と申します」

「 中国の方ですか？」

「 もとは香港です」

「 「えーっ!!? そうなの!?!」」

俺と綾子は驚いた。どうやら麻衣は知っていたようだ。

「 ……これで謎が一つ解けたな」

「 へ?」

「 いやー。ずっと“リン”って呼び方はどこから来てるのかなーと思つててさ。名字なのか、名前なの。名前だったらちよつと怖いなーとか」

「 ちよつとやめてよ! 顔見る度に思い出すじゃない!」

俺の言葉に綾子が吹き出し、麻衣は笑いを堪えていた。ただ、麻衣は余程ツボにはまったのか、しばらくリンを見る度に笑いを堪えている姿を見掛けた。

「 それでは、まず今回、ご助力をお願いした皆様をご紹介いたします。法専寺ご住持、井村賢照さま。防衛大学教授、五十嵐智絵先生と助手の鈴木直子さま。霊能者の原真砂子さま。南心霊調査会 所長、南麗明さま。所員の厚木秀雄さま、白石幸恵さま、福田三輪さま。そのオブザーバーで、英国心霊調査協会のオリヴァー・デイヴィス博士」

マジかよ。こんな所で会えるなんて思つてもみんかった。

(俺……この仕事やつててよかった……)

俺はこの時、心底そう思つたね。

「 な、なあ、ジョン。後で通訳してくんねえかな」

「 ハイです」

イギリス出身つて言つてたから、麻衣にでも頼もうかと思つたら、綾子と真砂子と一緒にさつさと宿泊場所まで行つちまったからな。真砂子ちゃんは結局、一緒に行動することにしたらしい。

機材をベースに設置中、ナルが大橋さんからこの屋敷について聞

いていた。幽霊が出ると言う噂がある屋敷。朽ちるに任せると言うて亡くなった先代当主。

「…はーっ。何か「いかにも幽霊屋敷」ってカンジじゃない？」

「だよな。古い洋館に曰くありげな由緒…。と、ナルちゃん、どうした？」

「気に入らないんだ」

「何が」

「長いこと無人だった幽霊屋敷。建物は複雑な上、平面図もない。そんな所に泊り込むんだぞ」

「おっと。けっこ弱気な発言」

「慎重と言ってくれ」

建物の各部屋の気温を測ることになり、さらにナルは綾子に護符を書くように言った。

「おいおい用心しすぎじゃねえの？」

「無思慮な人間が怠惰な言い訳にするセリフだな」

綾子と二人でナルをからかったら、ナルの冷やかな笑みに凍らされてしまった。俺達がそんなことをしていると、麻衣が顔色の悪い真砂子に声を掛けた。

「…真砂子？ どうしたの？ 顔色が悪いよ」

「…何だか、いやな気配がしてますの。この家に来てから…ずっと。それに 血の臭いがする気がしますわ」

「…真砂子は、特に一人で行動しない方がいいかもね」

「何か、また予知か？」

「まだ、はつきりと見たわけじゃないから何と…。ただ、真砂子も言ったけど、この建物、入った時から血の臭いが纏わり付いている感じがする」

「…麻衣さんもですか？」

真砂子ちゃんは、麻衣が同じ感覚を感じていることに少し、安堵しているようだった。

それから安原少年、麻衣と三人で各部屋の温度を計りに行ったん

だが、生ダンジョンみたいな複雑な構造をしていた。

「 ウインチェスター館だな、これは」

「 …… ってウインチェスター銃の？」

「そ。こう言う複雑怪奇な家らしいぜ。家が完成したら悪いことが起こるってんで、果てしなく増改築を繰り返したって話」

「この家もワケありってこと？」

「でなきゃ、ただのお笑いだよ」

そんな話をしていると、南心靈調査会の連中が来た。アルコール温度計で温度を計る南所長を俺達は呆然と見ていた。

「そ言えば、ぼーさんは残念だったね。博士がいなくて」

「な、何で急にふるんだよ」

「だって、ファンなんでしょ？ スゴイ人だっていつも言ってるじゃないん」

「だつ、だつてなあ！ あんだけ厳密な研究者って珍しいんだぞ！」

「へー。そうなんだ」

「そ。すっげー真面目な人なんだよ。まるで、普通の科学論文みたいなきちんとした論文書くしさ」

俺がデイヴィス博士について熱く語っていて、麻衣がイギリス出身だってことを思い出した。

「そう言や麻衣は、イギリス出身だったな。デイヴィス博士に会ったこととか、見たこととかあったか？」

「 …… 噂だけでしか……。ほら、忙しい人みたいだし」

「そっか……」

「あれ。そう言えば、ジョン、さっき博士がどうのって言ってなかった？」

「はあ…。ボクは博士におうたことあれへんですけど。確か、お若い人やと聞いたことがあって…」

「「博士」にしちゃ充分若いじゃねえか」

「ハア…。でも、博士はロンデンバーグ財団の博士号をもらうたんですよね。あそこは心靈研究に力を入れてる欧米の財団の中でも最

近、特に熱心な所で、博士号を作つて、優秀な研究者に与えたり、大学に講座を作つて、その教授にしたりしてます。デイヴィス博士はその博士号をもるたんで、いわゆる普通の博士号とはちょっと違つて…。それに、博士が来日したら、もっと大騒ぎになつてると違ひますか？」

「…そうよね。一部とは言え、有名な超能力者だもんねえ」

俺達がそうやってデイヴィス博士について話していると、いつの間にかカメラを設置に行つていたナルの冷やかな視線を浴びた。

それから、安原少年、ジョン、麻衣と共に各部屋と廊下のサイズを測つて平面図を作ることになった。二日目も測量は続いたが、建物の奥に行けば行くほど、部屋は複雑になつていった。

ベースに戻る時、井村のじーさんに会つたが、安原少年にからかわれて、怒つて行つちまつた。何度見ても、ああ言う坊主にはなりたくないと思つぜ。

夜。ジョン、安原少年、綾子、麻衣、真砂子と一緒に夕食を食べていると、五十嵐先生が降霊術の誘いに来た。そこにちょうどナルとリンが来て、少年は上手く切り抜けていた。

降霊会には、南所長とデイヴィス博士も参加していた。

「……深く息をして、霊に呼びかけて下さい。この家に住む霊に

」

「この家にお住まいの方。どうぞ、この女性の手を借りて、お心を語つて下さいませ。どうぞ、わたくし達に語り掛けて下さい。どうぞ、お心の内を語つて下さい。この声をお聞きでしたら、どうぞ、語つて下さいませ。どうか」

その時、鈴木さんの手が物凄い速さで動き始めた。ラップ音が響き、俺は真言を唱えた。

「 ナウマクサンマндаバザラダンカン！」

散らばつた紙を拾うと、その中の一枚に血で「死ニタクナイ」と書かれたものがあつた。ビデオを再生して、みんなで確認すると、その文字だけ、紙がテーブルから落ちる途中で現れた。さらに、気

分が悪いと言う真砂子ちゃんを、綾子と麻衣が部屋まで一緒に連れて行った。

明け方、あたしはこつそりと部屋を抜け出た。これから鈴木さんを助けるためだ。

「鈴木さん」

ボーっと歩いていた鈴木さんを、あたし達が眠る部屋の前を通った時、部屋の中に引き込んだ。結界が張つてあるため、鈴木さんを連れて行くこうとしていた下男二人の霊が不思議がつっていた。

「……鈴木さん。大丈夫ですか？」

あたしが声を掛けると、ようやく意識がはつきりしたのか、あたしを見て驚いていた。

「あなたは確か……渋谷サイキック・リサーチの……」

「谷山と言います。あたし、予知能力者なんです。だから、あなたがこの家に住む霊に、この時間に連れて行かれるのが分かったんです」

「……助けてくれたんですね。ありがとうございます」

「完全に朝が明けるまで出ないで下さい」

それからあたしは、五十嵐先生の所に鈴木さんを送って行った。

「じゃあ、鈴木さんは助けられたんだな？」

「うん。今、五十嵐先生の所に連れて行つたよ」

「……谷山さんが見た、連れて行かれた人間は全部で何人ですか？」

「えっと……四人かな。鈴木さんと、南心霊調査会の厚木さんに福田さん。それと……真砂子が」

「……原さんを絶対に一人にするんじゃないぞ」

「分かつてる。……いざとなつたら、使つてもいいよね？」

あたしがそう言つと、ナルの嫌そうな顔をした。

「あれは、お前にも負担が掛かることを忘れたのか」

腕を抓られた。くそ。みんなに見えない部分を抓るなんて卑怯

だ。

「谷山さん。私もナルと同意見です。場合によっては、私達もなるべくフオローしますが、何分、気を付けて下さい。時と場合によっては、松崎さんにも話しておかれると良いかもしれません」

「綾子かあ……。綾子はここじゃ、役に立ちそうにないよね。……

あたし、ぼーさんの方が好きだな。教授と一緒にいる時みたい。実の父親のことはあんまし覚えてないけど、教授に色々教わったから

「……。イタズラは、ジーンと一緒に覚えたんでしたな」

「それはともかく、そろそろみんな起きて来る。食堂の方に向かう」

ナルがそう言うと、あたし達は食堂に向かった。食堂に向かう途中、ナルと一緒にいるところを真砂子達に見られてしまった。

「麻衣！ いなくなっただと思ってビックリしたのよ！」

「あ……。夢を見たんで慌てて報告に……」

「……。五十嵐先生が、あんたが鈴木さんを助けたって言うってたわ」

「……。麻衣は、ナルと一緒にでしたの？」

「誤解しないで。ベースにはリンさんもいたよ」

「では、どうしてナルと二人なんですか？」

「……。原さん、松崎さん。とりあえず、食堂の方に行きませんか？

ここで話しては迷惑になります」

ナルに促されて、あたし達は食堂に向かった。途中でぼーさん達もベースにいるリンさんから話を聞いたらしくて、食堂に慌てて現れた。

降霊会をした翌朝、綾子と真砂子ちゃんが麻衣がいなくなったと慌ててやって来た。ベースに行くのとリンがいて、麻衣は予知夢を見た報告に来たと教えてくれた。

食堂に行くと、怒った顔の真砂子ちゃんと綾子、少し困った顔の麻衣、相変わらず無表情なナルが座っていた。

「いなくなつたつて聞いたからビックリしたぜ」

「……ごめんなさい」

「谷山さんは夢を見たど、リンさんからお聞きしましたが……」

「それにしたつてねえ……」

「今度こそ、きつちりと説明してもらいますわ」

朝っぱらから、何でこんなことになつてんだか。これじゃあ、まるで吊るし上げだな。

「分かつた。事情があつて話せない部分もあるけど、話せる限りのことは全部話すよ」

俺、ジョン、少年の三人も席に着かせてもらつた。

「ちよつと、先に聞かせてもらいたいんだが、麻衣の事情は、ナルヤリンは知つてんのかい？」

「……予知能力のことは相談したことがあるから」

「そうか……」

「あたしがイギリス出身だつてことは、みんな知つてるよね？ あたし、小さい頃から予知能力があつて、あたしの後見人であるライアー教授はそう言うのを研究している人だつたの」

「そう言や、最初の調査の時にそんな名前を言つてたな……。あ！ 思い出した……」

「滝川さん、ご存知なんですか？」

「確か、ビンセント・ライアーだ。彼もデイヴィス博士と同じSPRの会員だ。……麻衣の言つとおり、予知や予言の研究者で知られている」

「そのライアー教授の被験者として、あたしは六歳の時から十四歳までの九年をイギリスで過ごしたの。向こうにいる間に両親が亡くなつちやつてね。長く住んでいたこともあつて、国籍を移すために日本に向かおうとしてたんだ。自分でも何があつたのか覚えてないんだけど、あたしの記憶は空港からあの時、目が覚めるまでプツツリと切れちやつてるの」

「そやけど、その教授は麻衣さんを捜さへんかつたんどすか？」

「電話掛けたら驚かれてた。何でも、あたしが乗った飛行機が日本近海で爆発炎上して海に墜落。乗客乗員が全員亡くなったらしいの。まだ、遺体が見つかってない人もいるみたい。あたし、その時一度死んでるんだと思う。でも、何かの拍子に生き返ったんだと思うんだけど……」

「それで、あなたの能力は何なのよ？ 予知能力以外にあるって言うの？」

「夢を媒介にする力……」

「何よ、ソレ？」

「サイコメトリとか、過去視とか。基本的に夢を媒介にして物事を見るの。今回、鈴木さんを助けられたのも、あたし達の部屋の前を通るのが分かったから、連れて行かれる前に部屋に引き入れることができたの」

麻衣の言葉に、俺達は驚いた。麻衣はの言葉が本当なら、鈴木さんは、この家に住む霊に連れて行かれそうになったところを麻衣に助けられたと言うことになる。

「他にも、誰か攫われるのを見たんですか？」

麻衣はそれから南心霊調査会の若い二人の名前を出し、最後に、

「それから真砂子が」

と、言った。

「あたくし……ですの？」

「回避はできると思う。ただ、どう言う状況でそうなるのか分からないの。だから、気を付けてね……」

少し、気分が晴れないまま朝食を取り、俺達は昨日の測定の続きをすることにした。

「でも、いまいち分からないのが、鈴木さんが狙われた理由なんだよね」

「そう言うのは、分からんのか？ 大体、麻衣が見る予知夢ってどんな感じなんだ？」

「鈴木さんの場合は、あたし達が寝ていた部屋の前をフラフラと通

つて行つた後、五十嵐先生がベースに来て、鈴木さんがいなくなつたと言いに来るんだよ」

「そんなものなんですか……。じゃあ、ぼくの時も……」

「まあね。ただ、この予知夢、欠点があつてさ。見る期間が短いし、見たい内容は見えないし、自分のことは全然分かんないんだよね」。

……。でも、みんなにちよつと秘密を話せてすつきりした」

麻衣はそう言いながら笑つた。

測量をしている途中、隠し部屋を見つけた。その中に「美山慈善病院付属保護施設」と言う名札の付いたコートを見つけた。

ナルにそのコートを渡すと、内ポケットにお札が入っていた。字が書かれていたが、どうにも読めなかつた。その夜、まだか嬢が調査報告に来た。窓から侵入して。

「調査結果を知らせようと思つて来たの」

「そんな危険なことを。何かあつたらどうすんだ？」

「あら、ナルが助けに来てくれるでしょ？」

「とりあえず連絡のあつた鈴木さんのことだけ……この辺のバス、タクシー会社に問い合わせた所、それらしい人を乗せたり見かけたりにしてないみたい。ヒッチハイクの可能性もはないけど、やっぱりこの家から出てないんじゃないかな」

「先に消えた二人は？」

「最初に消えたのが松沼秀樹十八歳、無職。二月十三日の夜、友人七名とここに来て消息を絶つたの。部屋の一つで宴会をしている時、フラフラと出て行つてそれきり戻らなかつたんですつて。一週間後に失踪届けが出されて、警察が人手を集めて搜索したんだけど彼は見つからず、それどころか帰ろうとしたら一人足りなかつたわけ。消えたのは二十一歳の青年よ。この中に証言を録音したテープと

ここを建てた美山証幸親子の簡単な経歴をまとめておいたから」

「……美山氏は、「美山慈善病院」と言う保護施設が付いた病院を所有してたりしなかつたか？」

「え？ 何で知ってるの？」

翌朝。麻衣が言っていたことが本当に起きた。南心靈調査会の厚木青年がいなくなったと言う。

「マジ……かよ。麻衣の言ったとおりになったぜ」

南所長はそれでもデイヴィス博士に頼らずにいるようだった。

「言われてみれば、あの博士が本物って証拠ないわよね」

「おいおい。何だよ、急に」

「だよ。南さんが言い張ってるだけだもんね」

「あら。麻衣ちゃんまで、そんなこと言うの？」

「だって、博士のことすごいって言う割りに、すごいところ一回も見せてもらってないもん。それもこんな時にだよ」

「それもそうね。どっちかって言うと、いなくなるのを当てた、あなたの方が優秀よね」

「そう言や、今回は助けらんかったのな」

「部屋割りのせいだよ」

「でも、谷山さんの予知が本物だって分かった以上、南さんの所に知らせた方がよくありませんか？」

「……あんまし予言って、人は信用しないからなあ……。だから、みんなにも話さなかつたんだよね。話すのは構わないけど、あたしのことは言わないでもらえるかな」

麻衣にそう言われると、俺達はどうしていいのか分からなかった。測量の過程で、今度は階段の途中に扉があるのを発見した。部屋の中から浦戸と書かれた肖像画を見つけた。その肖像画の名前から、お札に書かれていた文字の一部を解読することができた。

「じゃあ、最後の一文は簡単よね。これは、誰かに宛てたメッセージジなんだわ。ここに来た者はみな死んでいる……」 「逃げよ」

そんな話をしている時、再びまどか嬢が現れた。彼女は美山鉦幸の潔癖ぶりのエピソードを話していった。

「……麻衣」

「何？」

「過去視をする気はあるか？」

「……調査員として、引き受けましょう」

「危険じゃないのか？」

「あたしは、物体を通してサイコメトリするわけじゃないから大丈夫……。あんまし、気持ち悪くないといいんだけど……」

「……ナルは、麻衣を頼りにしているんですね……」

真砂子に何だか、悪いことした気分。それでも、今は仕事は仕事。真砂子が霊媒師のプロなら、あたしだってプロには違いない。

精神を集中させて、あたしはトランス状態に入った。

男の人が二人。部屋に入って来た。彼らはあたしを連れて行く。この屋敷に存在した部屋へと。

暖炉のある部屋。クローゼットの中に通路があり、さら扉の向こうに続く迷路のような垣根。階段の奥の部屋。血で薄汚れた部屋。

「ヴラド」

わけの分からない言葉が浮かんだ。

違う。見えたんだ。

そのわずかな隙が油断を生んだ。一瞬、カッターが遅れて、首を少し斬られてしまった。

「ヤバイなあ……。ちょっと、深く入り込み過ぎちゃった……」

溜め息が出た。パジャマの襟に付いた血の痕を洗い落としながら、さつき見た映像を繰り返し頭に浮かべた。

「忘れない内にメモとかなないと……」

あたしは自分の荷物の中から手帳を取り出し、先ほど見た映像の道順を書いた。状況、場所、建物全体から見た、大体の位置。あたしはそのまま、書いている内に眠くなってしまった。

朝になって、再びベッドになかったあたしに驚いていた綾子達が、ベッドの脇いたあたしを見て、安堵したそうだ。

「ビックリさせないでよね……。今度は本当にいなくなつたかと思

「つたじゃない」

「…………ごめん。メモしないと忘れちゃうもんで」

「では、見れたんですの？」

「うん」

「…………麻衣は、怖くないんですの？ 死んだ方の疑似体験をするのは」

「最初は怖かったけどね…………。ううん。本当は今でも怖いことがある。一瞬、自分は本当に生きているんだろうかって思う時がある」

「何、言ってるのよ。あんたはちゃんと生きてるわよ」

綾子はそう言いながら、あたしの背中を叩いた。

「…………綾子…………。ちよつと、痛いよ」

「痛くて当然よ。痛いと生きてるって分かるでしょ。それよりも、報告がてらに朝食に行きましょ」

麻衣が過去視に成功したらしい。

測量したどの部屋にも該当しない部屋。もしかしたら、そんな部屋が存在するのではないかと、この日も調査を続けた。

「ちよつといいですか。谷山さんには、嫌な夢を思い出させちゃうので申し訳ないんですけど…………」

「い、いいよう。気を使わなくて。どしたの？」

「厚木さん…………。もう、生きてないってことは、ありえませんか？」

ここで死んだ人達が、谷山さんの夢のように殺された可能性があるのなら、行方不明になった人間は死んでいる可能性がありますよね？

「なるほどな…………。そうかもしれないな」

それから少し、誰が犯人かと言う話になり、職員が狙われている事実から、この職員犯人説を出したが、自分でもムリがあると思っただ。そんな時、ジョンがこう言った。

「…………やったら、もしかして、この霊は若い人が好きなのかもし

れません。職員の皆さんは年配の方ばかりですやろ。反対に、消えた人は、二十代以下の若い人ばかりと違いますか？」

「……言えてる。あ、あたし、ナルに話して来る！」

「待った！ 一人で行くな。俺達は全員、三十前だろーが。ジョンの意見が正しかったら、全員が危険なんだぞ。ナルちゃんの言うとおりだ。絶対に一人にならない方がいい」

全員でベースに戻ると、南心靈調査会の福田と言う若い女性がいなくなっただけらしい。

「麻衣さんの予言は当たりましたわね……。と言うことは、次はあたくしの番なのですかしら」

「鈴木さんは助かったじゃありませんか」

「ですけど……」

「真砂子は守るから……。だから、一人にならないで。一人になりたい時は、部屋の中で一人になつてね」

麻衣が真剣な表情で言うので、真砂子ちゃんも、思わず頷いていた。

結局色々あって、少年がリタイヤする形でまどか嬢のアシスタントに回るようになった。それから、俺とジョンと麻衣で福田さんを捜したが、結局見つからなかった。

夜になり、まどか嬢と少年が報告に来た。その時、様子のおかしくなった麻衣に気付き、真砂子ちゃんが声を掛けた。

「……この人はいけませんわ。あなたを救ったりは出来ません。だって、あなたはもう死んでるんですもの。さ、降りて。恐れないで光の方へ行つてごらんさい。きっと、楽になれますから」

その直後、電気が消え、激しいラップ音が響き、再び電気が点いた時には壁中に血で書かれたような文字が浮かび上がった。

「この家の霊って、一体、どれだけいるのよ？」

「……浦戸ってのは、思ってた以上に意味のある言葉らしいな。こりゃあ、単なるペンネームとは思えねえぞ。「浦戸に・さ・た・・聞・く」。これの意味が分かればな」

「……原さん。ここで降霊術をやる自信はありますか？」

「……ありますわ」

それから真砂子ちゃんの降霊が行われた。真砂子ちゃんに憑いた霊は、最後に血文字で「ヴラド」と言う言葉を残していった。

「そうか、浦戸ってのはヴラドのことだったのか！」

「……ヴラド……。あ！あの時の……そっか……。ヴラドかあ」

「何、一人で納得してんのよ」

「過去視をした時に、変な言葉が浮かんだんだけど、それが何なのか思い出せなかったの。分かってすっきりした」

「ヴラドと浦戸……か。確かにイメージが被るな。少年達の話とさ」

「鉦幸が外遊していた頃、すでに「吸血鬼」は出版されていた。彼が知っていたとしても不思議はない。それとも一つ。ヴラドと混同される人物にエルジェベット・バートリと言うハンガリーの伯爵夫人がいる。彼女は自分の容色が衰えることを恐れ、若い女性を殺しては絞り取った血を浴槽に満たし……その中に体を浸した。そうすることで、美貌が保たれると信じていたんだ」

「……じゃあ、しょっちゅう女中さんの顔が変わってたって言うのは浦戸が……」

「恐らくそうだろう」

「なるほどな……。あの紙幣の文字の意味も分かった。「ここに来た者は皆死んでいる。」「浦戸に殺されたりと聞く。逃げよ。」「」

それから俺達は建物の壁を壊すことになった。壊した壁の中には焼却炉があつて、その中からは遺体が出て来た。

「……わしは帰るぞ！失踪者どころか、自分の命が危ついわ！」

「井村さん！」

「あの、会長。私達も帰った方が」

「え。あ……ああ。そう、そうだな。さ、博士」

「ちよつと待って下さい！厚木さんと福田さんを捜してあげないんですか!？」

「そ……そりゃ、捜して無事な姿見つかるならそうしますがね。この

「ままじゃ、被害者が増えるだけでしょ？」

「じゃあ、あたしの後見人からデイヴィス博士に依頼します」

「後見人？」

「ビンセント・ライアー。英国心霊調査協会所属の研究者です。所属機関からの命令は絶対ですよね？」

麻衣は何だか怒っているみたいだな。

「おいおい。そんなこと、出来んのかよ？」

「出来るよ。本当はそんなことしなくても、デイヴィス博士が断るはずないもん」

そう言いながら麻衣は、デイヴィス博士の腕を掴んだ。だが、博士はその麻衣の手を振り払った。

「ワタシは違います。ワタシは、デイヴィス違います！ 名前はレイモンド・ウォールです。博士ではないです！ 南サンが「デイヴィスと言え」と言っただけです」

マジ……ですか？ 偽者だったのかよ……。俺、立ち直れるかな……。

「ぼーさん。元気出して」

「麻衣……。お前さんは優しいなあ……」

俺は慰めてくれる麻衣に縋った。不意に、首元に包帯が巻かれているのが見えた。

「何だ？ こりゃ」

「あ……」

麻衣は咄嗟に俺から離れて、首を竦めるように隠した。麻衣の行動に気付いた綾子が、後ろから襟を捲った。

「何よ、これ！ 包帯じゃない！ あんた、ケガしてたって言うの……！」

「……ちょっと、失敗しちゃって」

「この間の過去視の時のか？」

「……うん」

俺達がそんな話をしていると、ナルが五十嵐先生に忠告をしてい

た。

「五十嵐先生。先生も早くお帰りになった方がいいと思います。この家は危険だ。出た方がいい。僕らも引き上げます」

「えー!? ちょ、ちよっと…。他の失踪した人達はどうするの? ほっぽって帰るつもり!？」

「全員死んでいる。捜しても望みはない。家の中は捜しつくした。失踪者は閉ざされた部屋の中にとしか思えないし、事実そうだった。浦戸がどうやって犠牲者を壁の向こうに連れ込んだのかは分からない。生身の人間が壁を通り抜けたり出来ない以上、空間を捻じ曲げるかどうかしたとしか思えない。それが、どれだけの力を必要とするか分かるか? ヤツは、恨みを晴らしたくてさ迷っているわけじゃない。この世に未練や心残りがあるわけでもない。ヤツはただ単に生き延びたいだけなんだ。そのために獲物が必要だか狩っている。これはもう、亡霊とは言わない。「鬼」「悪魔」「妖怪」何でもいい。そう言う化け物なんだ。僕は幽霊を狩る方法は知っていても、化け物を狩る方法は知らない。除霊は不可能だ。それともこの中でヤツを狩る方法を知っている者がいるか?」

「俺には出来ん。壁に人間を通すような力を持っているヤツをねじ伏せるほどの能力はない」

「アタシにも無理。条件が悪すぎるもの」

「ボクもです。神の栄光を恐れない者を封じることが出来ません」

「ただ、一つだけ奴には弱点がある。この家から出ることが出来ないんだ」

「家を燃やせばいいってこと?」

「まあ、そうだな。警察を呼んで、家を解体すれば失踪者は発見出来る。それは僕らの仕事じゃない」

「で、逃げて帰るわけか」

「逃げるんじゃない。僕らの仕事は終了したんだ。僕がここに来たのは大橋さんの以来を受けたからじゃない。僕はまどかの依頼を受けたんだ。僕らの仕事は今、終了した。危険をおかしてここに残る

理由がない。引き上げる」

まさか、ナルの本当の目的が偽デイヴィス博士の調査だったとはな。

「もしかして、麻衣からの依頼か？」

「違うけど……。今、ナルが森さんからだって言ったじゃん」

「だけど、後見人は本物と同じSPRの人間なんだろう？」

「忙しい人だからなあ。教授もほとんど会ったことないんだよね。

あ、でも、デイヴィス博士のお父さんとは同じ大学で教授をやっているから知り合いなんだよ」

「……同じイギリスや、同じ機関に所属しても会えないヤツは会えないんだな……」

「まあまあ、その内いいことあるからさ」

俺が落ち込んでいると、麻衣が背中を叩いて慰めてくれた。

それから、各部屋に戻って帰り仕度をする事になったんだが。

「そう言や、麻衣の予知は一つ外れちまったな」

「そう言えばそうどすね。麻衣さんの話では、原さんも連れてかれる言うとりましたね」

「……まだまだ、油断はできないってことか？」

俺とジョンが帰り支度をしていると、ドアを叩く音がした。開けてみると、血相を変えた綾子と真砂子ちゃんがいた。

「ちょっと、麻衣がいなくなったのよ！」

「……また、先にベースに行ってるんじゃないのか？」

「ベースの方にも行ったら、リンが来てないって」

「……麻衣は、あたくしの代わりに捕まっただんですわ……」

「……とにかく、ベースの方に行こう」

俺達はベースに向かった。安原少年とまどか嬢が撤収の手伝いに来ていた。

さつきから、真砂子ちゃんはしきりに何かを握っていた。

「そりゃあ、麻衣のか？」

「少し前に麻衣が持っていてくれと言っただんですわ。お守りのよう

な物だと仰っていましたわ」

「麻衣だって危険だって言うのに、何考えてんだ」

「……麻衣は過去視をしたな。何か、手掛かりになる物を残していないか？」

「そう言えば、何だか忘れるからメモを取ってみたいだったわ」

「なるほど。リン、原さん。一緒に来てくれ。そのメモを探す」

ナルは、麻衣の荷物の中から手帳を取り出した。中には、こと細かに過去視した内容や部屋の見取り図などが描かれていた。

「……ナルは、麻衣が心配なんですね。攫われたのがあたくしでも、同じように心配して下さったのかしら」

「……原さん。あなたは、僕の正体を知っているから話しますが、

麻衣は、僕の恋人です。死んだと思われていた麻衣が生きていた。

今度こそ本当に死ぬようなことがあったら、僕はあなたを許さない」

「ナル……。それぐらいに……」

ナルは、麻衣の手帳を使ってサイコメトリした。ナルは安心したような溜め息を吐いた。

「どうですか？」

「麻衣は無事だ。今のところはな。とにかく、このメモを頼りに麻衣を捜そう」

ベースに戻るうとした時、リンが真砂子に、

「ナルと谷山さんの関係は、しばらく秘密にしておいてもらえますか」

と、言った。

「……分かりましたわ。元々、望みがなかったんですわね」

戻って来たナル達は、麻衣が残したと言うメモを持っていた。

「麻衣がメモを残していた。かなり細部まで書かれたものだ」

俺達は壁の薄い所を探して、壁を壊す作業に入った。

「それにしても、真砂子が捕まるって言ったのに、どうして麻衣が……」

「そう言えば谷山さん。ご自分のことは分からないと仰っていましたよね。そのせいじゃないんでしょうか？」

「……ですけれど、では、なぜ麻衣はこんな物を寄越したんでしょう?」

「それは?」

「麻衣のお守りだそうですね。なぜか渡されて、持っていて欲しいと」

麻衣がいなくなったのは、本来は麻衣もいなくなるはずだったのか、それとも、真砂子ちゃんを守ろうとしたためなのかは分からなかった。

壁を壊すと、中には家があった。

「ひよつとして、ここは鉦幸の住んでいた母屋じゃないか?」

「ありうるな。よし、暖炉のある部屋つてのを探そう」

ようやく一人がその部屋を見つけた。

「麻衣のメモによると、クローゼットの中に道があり、そこからさらに先に迷路のような生垣があると書かれている」

ナルが読む麻衣のメモに沿って、俺達は先へ進んだ。

「おっ、またドアがある」

「ここが一番大きな空洞の辺りだ。…なるほどな。あの床の不自然な高低は、ここを覆うためのものだったと言うわけか」

ドアを抜けると、階段があった。

「ジョン、リン、二人とも来い!」

俺はジョンとリンを促して、階段の奥の部屋に向かった。

「麻衣!」

「麻衣さん!」

「谷山さん!」

麻衣は壁にもたれた状態で気を失っていた。リンが脈を確認する

と、安堵の溜め息を漏らした。

「大丈夫です。首の傷以外はケガもないようです」

「すぐに、ここを出しましょう」

麻衣を抱えた時、ヴラド達が現れた。ジョンが聖水を降り掛け、リンが口笛を吹いて何かをけしかけた。俺達は急いで、部屋の外にいるナル達と合流し、外側の建物まで来た時、窓から外に出た。

「その窓から外に出る。とにかく、家の中から出るんだ！」

俺は、麻衣を抱きかかえたまま走ってたんで、腕がもう上がらなかつた。

「麻衣はまだ、気を失ったままですのね。聞きたいことがいっぱいありますのに」

真砂子ちゃんがそう言いながら、麻衣のおでこを小突いていた。

そこでようやく、麻衣は目を覚ました。

「……真砂子？ よかつた……無事だよね」

「何を仰っているんですの。麻衣の方が無事じゃ済みませんでしたわ。……どう言うことなのか、説明していただけますわね」

「……あたしの特殊な能力の一つなの。他人との運命を入れ替えることが出来るんだよ。ごめんね。真砂子の帯留拾った時から考えたの」

「運命を入れ替えるなんて、そんなこと、出来るのかよ？」

「過去に何回かやったことがある……。やるなって言われてたんだけど……。真砂子を助けるのに一番手っ取り早い方法だったの」

「だから、原さんが捕まらずに谷山さんが捕らえられたと言っわけですね」

話を聞いていたナルが、寝っ転がっている麻衣の頭上に立ち、麻衣の手帳で頭を叩いていた。

「二度とやるな！」

「……はい」

「そっ言や、リンさんや、さっきのありや何だ？」

「……さっきの？」

「麻衣達を助ける時に何か投げるか、どうかしたろ？」

「ああ…。私の式です」

「どうやらリンは中国の道士らしいな。」

次第に空が白んできた。俺達は建物の中に戻ることにしたんだが、玄関のドアを開けた大橋さんに驚かされてしまった。安原少年やまどか嬢の存在にも驚いていた。

「除霊は不可能です。後で報告書を提出しますが、嚴重に封印して先代の遺言通り、このまま朽ちるに任せるか……。さもなくば、炎による浄化しかないと思います」

「……分かりました」

調査は終了し、こうして俺達は美山邸を跡にした。

「それにしても、麻衣の謎は深まるばかりだな」

「そーね。全部話してくれるようで、隠していることもあるみたいだし」

帰りの車には、五人と四人で分かれて乗ったんだが、麻衣、真砂子ちゃんの二人はナルとリンの車に乗っていたため、真相が分からずじまいだった。

「ぼくも知りたいですね。谷山さんの秘密」

「あら、谷山さんの秘密なんかあるの？」

「彼女、予知能力者なんだそうですよ。実のところ、厚木さんや福田さんの失踪も予言してました」

「まあ、すごいよね」

まどか嬢は、少年の言葉に耳を傾けているようだった。

ちなみに、ナルが師匠であるまどか嬢ではなく、麻衣を車に乗せたのは、途中で病院に寄るかららしい。

所長のお仕置き (前書き)

性的描写が入ります。

所長のお仕置き

あれほど言ったのに、このバカは、原さんと自分の運命を変えると言っことをした。

「バカ、バカ言わなくてもいいじゃん」

「何度言っても分からないようですので」

「……しかも、真砂子にあたし達の関係までバラしちゃってさ」「隠しておく方が原さんに失礼だと思うが」

美山邸の調査終了後、東京に帰る途中で病院に寄って、麻衣のケガを診てもらった。あれから一月、まどかはイギリスに帰国し、麻衣のケガはほとんど治った。

「一ヶ月も前のことをネチネチと……」

「お前は昔、あのせいで大ケガしたのを忘れたのか！ あのジーンでさえ、やるなと言ったのを忘れたとは言わせないぞ！」

「……だからってさあ……。土曜日の度に、ナルの相手をさせられるあたしの身が持ちません」

僕は、ベッドの上の麻衣を組み敷いた。平日は学校があるので、一応その辺は考えてやっているが、僕としては麻衣にいつも触れていたいと思う。

包帯の取れた麻衣の首筋を舐め、背中にキスを落とす。麻衣がイギリス出身だと言うことがみんなにバレている以上、今はまだ、麻衣との関係がバレるわけにはいかない。

「ちょっと、キスマーク付けないで」

「一つぐらい構わないだろう」

「この前のやつ残ってて、クラスの友達にからかわれたんだから僕は何だか頭に来て、麻衣の太腿に痕が残るように強く吸った。

麻衣の股間に指を這わせた。グチュグチュと次第に濡れる麻衣に己を宛がった。

「あ……。や……」

「麻衣は、相変わらず感度がいいな」

「そんな恥ずかしいこと、耳元で言うな！」

「……麻衣。胸が少し大きくなったか」

片手で余っていた麻衣の胸が少し大きくなったような気がした。

麻衣にそう言っても、気をやっているのか返事は返って来ない。

「……ナル」

「どうした？」

「……ジーンが見つかったら、ナルはイギリスに帰るんだよね」

「麻衣もだろう？」

「……始めはそう思ってたんだけどね。向こうに帰りたと思って思う反面、こっちでできた友達や仲間と離れたくないって考えもあるの」

「僕は麻衣を手放すつもりはない。だが、麻衣を束縛したくもない。僕がそう言くと、麻衣が珍しく自分からキスしてきた。」

「そう言えば、美山邸の事件で捕らえられた時に、ジーンが来て励ましてくれたんだけどね……。何だか、もうすぐ見つかるような気がするの」

「予知夢を見たのか？」

「はつきりと見たわけじゃないけど……。ナルだって、旅行の方、段々減ってきてるでしょ？」

ジーンをサイコメトリした時に見たビジョン。僕はその湖を捜し続けていた。

「……ジーンは捜してもらいたい半面、遺体が見つかったらもう会えないかもしれないって思ってるみたい」

「さつさと成仏しろと伝えておけ」

「了解」

麻衣は苦笑しながら苦笑した。

彼女は、僕が唯一安らげる場所。彼女を失ったと思った時、側にいたのは双子の兄のジーンだった。ジーンを失い、僕は再び麻衣に出会うことが出来た。

彼女を再び失うことがあったら、僕はどうなるのだろう。

などと考えていたら、麻衣に殴られた。彼女は接触テレパスではないが、僕の無表情な顔色を読み取ることがある。

「ナルは、あたしにだけ執着しちゃダメだって言ってるでしょ。…日本で出会ったみんなって、いい人達だよ。安原さんの高校で、あたし、ぼーさんとケンカしたのに、次に会った時に謝ったら普通に接してくれたの。あたしが秘密にしていることも無理に聞かないでいてくれる」

「一応、僕が認めた人間だからな」

「……ナルが本物のデイヴィス博士だって知ったら、ぼーさんはどんな顔するかな……。ぼーさんと一緒にいるとライター教授を思い出すんだよね。当たり前だけど、ぼーさんの方が若いけど。そう言えば、ずっと聞こうと思ってたんだけど、ナルはどうして、綾子を連れて行くの？ そりゃあ、全くの紛い物ってわけじゃないけど」

「僕は、麻衣の学校で偶々知り合った彼らの経歴を調べた。原さんはすでに世間に知られていたが、他の三人の中でも松崎さんの経歴には少し妙な所があったんだ」

「妙な所って？」

「彼女は恐らく真正の巫女だ。血統や家系ではなく、突然変異のパターンだな。彼女の浄霊を一度ぐらいは見てみたいとは思ってたが、条件が難しいらしい」

「へえ、そうなんだ。そう言えば、機材運びしないせいもあるけど、護符は大体綾子に頼んでるもんね。ナルがそんなに見たがる綾子の浄霊かあ。あたしも見てみたいかも……」

麻衣は眠くなったのか、そのまま寝息を立てて眠ってしまった。

僕も、麻衣に軽くキスを落として眠ることにした。

能登の事件

それは夏のある日のこと。世間的には夏休みに入ったばかりで、アタシは涼みがてらにいつものように渋谷サイキック・リサーチの事務所に向かったわ。

「こんにちは」

いつもならバイトの麻衣の返事が返ってくるのに返事がない。不思議に思っていると、どうも電話中だったみたい。

だから、まだ帰れないんだって

は？ 費用は出す？ お金だけの問題じゃなくて、夏はバイトの稼ぎ時だから

……うん。……分かった。……じゃあね

相手は、どうやらイギリスからみたいね。

「あれ？ 綾子、来てたんだ」

「そーよ。お土産持って来てあげたわよ」

「ありがと！ お茶淹れて来るね」

麻衣も若い子らしく、甘い物とか好きなのよね。麻衣がお茶を用意してくれていると、アタシと同じくこの渋谷サイキック・リサーチのイレギュラーの一人が来たわ。

「こんちゃー。お、綾子も来てたんか？」

「いちゃ悪い？」

「いんや。麻衣は？」

アタシが給湯室の方を指差すと、ぼーずはアイスコーヒーを頼んでたわ。

「そう言えばさっきの電話、イギリスから？」

「さっき？」

「アタシが来た時、麻衣が電話してたのよ。英語で話してたからそうだと思うんだけど」

「うん。ライター教授から。日本の学校は夏休みに入ったんだから

帰って来いって」

「あんたって、一体どうなってるのよ？ 記憶喪失だって言ってる、イギリスに帰らないで日本にいたり」

「……だって、記憶喪失中の記憶がないんだもん。それに、わざわざ受験して入った高校を辞めるのももったいない感じがしちゃって」「どうやって学校通ってた？ それも分かんねえってわけじゃねえんだろ？」

「奨学金をもらってる」

「あんた、親がいるんでしょ。何で、いつまでも奨学金で通ってるのよ」

「言ったことなかったっけ？ あたしの両親、とっくに亡くなってるんだ」

「「え！」「」

麻衣のその一言にアタシとぼーずは驚いて声を上げたわ。

「じゃあ、ライター教授が養父か？」

「ううん。教授はただの後見人。まあ、養ってもらってるから養父みたいなものかな。ぼーさんに似て、面白い人なんだよ。イギリスでの世間一般的なことは、ほとんどあの人に教わったの」

「へ、へえ……」

ぼーずは、引き攣っていたわ。二十代半ばで、四十近くの人間に似ていると言われると、ちょっと複雑よね。

「そう言えば、ナルはどうしたんだ？」

「旅行だよ。今日、帰って来るって言ってたけどね」

「まさか、観光目的じゃないでしょ？」

「実は、温泉好きで秘湯探検だったりしてな」

ぼーずのその言葉に、麻衣は薄いリアクションをしてたわ。

「何にしても、けっこうなご身分よねえ」

ナルの旅行の話はさておき。それからオフィスの家賃の話になったわ。

「「こごって、いつも暇そうよね」

「所長の気紛れ経営ですから。でも、心靈事務所が大盛況つてのも怖くない？」

「……それも、そうね」

「そうだな」

「そう言や、最近は何か予知とか見たんか？」

「あ、見たよ。調査が入る夢」

麻衣がそんなことを言った直後、機嫌の悪そうなナルが帰って来たわ。

「あ、ナル。お帰りー」

「よう、お邪魔してるよ」

ナルはアタシ達を無視して、所長室に直行したわ。それからすぐだったわ。依頼者が来たのは。

その時、カランとドアベルが鳴った。

「いらつしやいませ」

「……あの、こちらは……その、いわゆる霊能者さんですよね？」
大学生ぐらいの少年が、小さな女の子を連れて来たわ。まさか、麻衣が言ってたとおり、本当に調査になるなんて思いもしなかったわ。

アタシとぼーずはその場ですぐに同行することになり、石川県は能登半島に向かったわ。

「……何からお話したらいいのか……。バカな話だと思いでしょ
うが、この家は呪われているのでございます。吉見の家には君の悪い言い伝えがございます。代替わりの時に必ず返事が起きると言うのです。実際に先代 わたくしの父が亡くなった時、家族からばたばたと死人が出ました。先代が先々代から家を譲られた時にも同じことがございました。その時のことは、わたくしも小さくてもう覚えておりません。ただ 六人おりました兄弟の中でわたくし一人が生き残ったのでございます。そして先日、わたくしのつれあいが亡くなりました、すぐに葉月にあの湿疹ができました。一週間もしない内にあんな風になってしまいました。背中の戒名と言い、

まるで葉月の首を切ってやると言っているようで」

「…先代さんが亡くなった時の話を伺いたいのですが、いつ頃のことですか？」

「今から三十二年前でございます」

「何人の方がどのように亡くなられたかを覚えておいでですか？」

「……はい。家からは八人ございました。七人の子供のうち、下の五人。一番上の孫とわたくしのイトコと叔父と……。半分ぐらいが事故で、残りが原因のよく分からない病気でございます」

「家から　　と言うことは、家族以外にも亡くなった方が？」

「……はい。店の……お客様が……」

「お母さん。きちんとお話した方が……」

「何か？」

「母は、皆さんが帰ってしまわれるのじゃないかと不安なんです」

「……と、仰いますと？」

「……霊能者の方が三人亡くなりました」

「なるほど」

「助けていただきたいのはやまやまですが、危険を承知でご無理は
」

「危険なようなら引き止められても帰りますよ。俺達は、分てものを知ってますんでね。だからと言って、相手を見ないで帰るほど臆病じゃない。　　とは言っても、客も危ないとなるとやっかいだ。」

「どうするナルちゃん？」

「今、店にお客は？」

「いらつしやいません。父が亡くなってから閉めてございます。従業員も葬儀の片付が終わってから休みを取っております。今、この建物にいるのは家族だけです」

それからアタシ達は用意されたベースに向かったわ。ベースは、和室を二部屋繋げたような部屋になっていてかなり広かったわ。

「しかし、吉見さんや。こんな、ヘンピな所で料亭なんて商売になんのかい？」

「はあ……。うちは普通の料亭さんとは少し違うので……。会員制の料亭と言ったら分かるでしょうか」

「あつらー。よかつたじゃない、二人とも。仕事でもなかったら、あんた達一生こんな所来れないわよ」

その夜、食後に栄次郎さんが包丁を持って暴れたのをリンが取り押さえたわ。ナルに憑依落としを頼まれて、栄次郎さんに憑いた霊を落とすことになったのよね。

「つつしんで、かんじようたてまつる。みやしるなきこのころに、こうりんちんざしたまいて、しんぐのはらいかずかずかず、たいらけく、やすらけく、きこしめして、ねがうところをかんこのうじゆなさしめたまえ」

「……ね、ねえ。やっぱ綾子じゃ無理なんじゃないの？」

「かもしれない。どうせ、明日にはジョンが着く」

アタシが祈祷を上げると、栄次郎さんに憑いた霊が現れたわ。それはまるで動物の霊のように見えたとわ。霊は、アタシを襲おうとした後、ナルに向かって行ったわ。

「……」

「ナル！ 危ない！」

麻衣がナルを押しやって、霊の衝撃をまともに受けて壁に体を打ちつけていたわ。霊はそのまま、麻衣の体と壁をすり抜けて行ったわ。

「ちよつと！ 大丈夫なの？」

「……大丈夫」

麻衣はフラフラと立ち上がった後、休ませて欲しいと言うので、ナルが許可していたわ。ナルにしてはちよつと珍しいわね。庇われたことに対して、情けなく思ってるのかしら。

翌朝。先に目を覚ましたアタシが麻衣を起こそうとした時、麻衣の枕元に手紙らしき物が置いてあるのを見つけたわ。夜中に起きて、また予知の内容を書いたのかと思っただらそうじゃなかったわ。

「綾子へ。あたしはナルが霊に憑依されるのを見て、運命を入れ替

えました。とても強い霊です。あたしの中に封じ込めたまま調査を続けて下さい」

アタシはすぐに、その手紙をナル達に見せたわ。ベースにはジョンと真砂子も到着していたわ。ナルはその手紙を見るなり、怒ったように手紙を握り潰したの。

「あのバカ……。あれほどやるなと言って置いたのに……」

「麻衣さんに憑いた霊を落とさして……」

ジョンがそう言い掛けた時、リンがそれを制止したわ。

「待って下さい。谷山さんの話が本当なら、次に誰に憑くか分かりません。彼女は自分なら霊を封じ込められると思ったから、そういう行動を取ったのでしょう」

「……なるほどな。麻衣は子供達を除けば、僕達の中でも体格は小さい。それに重い機材を持てても、男に比べれば非力だ……」

「……麻衣を憑依されたままにするんですの？」

「そうなりますね」

真砂子がどうもナルを睨んでいるみたいなのよね。以前に比べて、真砂子のナルに対する態度がちょっと違うのよね。

結局話し合いの結果、麻衣をベースに隣接している部屋に移動させて、リンが金縛りを掛けて寝かせておくことになったわ。

その後、彰文さんに洞窟まで案内してもらったことになったんだけど。それにしても、彰文さんって若旦那って感じよね。思わず若旦那って呼んじゃったわよ。

「お、あんなところになんか、建物が」

「あれが神社です。神主さんもないような小さな神社ですけどね。行ってみますか？」

さらに神社の方に移動したわ。

「あああ！ 立派な神社。ちゃんと掃除もされてるじゃない」

「立派ですか？ 掃除はうちの家の者が代々世話役をしているんです」

ここは正常な空気が流れているわ。何だか、とてもいい気持ち。

「ここなら、アタシの力が発揮できそう。」

海岸から洞窟に向かったんだけど、ハイヒールはちょっと歩きにくいよね。洞窟の奥には、祠があったのよね。

「若旦那。中に入ってるこりゃ何だ？」

「流木ですよ。多分、そうだと思うんですけど。『おこぶさま』って言うんです」

「おこぶ…。あの岩の？」

「あれとは別なんじゃないかな。頭と手があつて、何だか人間みたいでしょ。しかも、この手つてこつ見えませんか？」

「お、見える！」

「これつて仏像によくあるポーズなんですよね。それで祀つてあるんだと思います」

ベースに戻つた後、洞窟にカメラを設置することにしたみたい。

それから、ナルが安原君の所に連絡を入れたみたいなのよね。

さらに、靖高さんが大ケガして救急車で運ばれて行ったわ。

「リン、ナル。麻衣が起きた様子はあるか？」

「いいえ。部屋の周りに式を残しているの、谷山さんが起きれば分かります」

「じゃあ、逆に霊が近寄つたら？」

「それも分かります。出て行つても同じですね」

「……霊は一つだけじゃないと言う可能性がある」

「ちよつと、ちよつと。じゃあ、何？ 靖高さんは憑依されてるつてわけ？」

「他に考えられんדרוףが」

「家族全員に注意が必要だ。霊が一体じゃないと言うことは、三体系それ以上である可能性もある。 ジヨン」

「ハイ」

「さつき、葉月ちゃんの様子を見てどうでしたか？」

「ハイ。ボクには分からへんかったんですけど、原さんが、これは悪質な憑き物の可能性があると言わはつたので。一応簡単な除

霊をして部屋を封じておきました」

「手ごたえは」

「…分かりませんです」

「原さん。その霊はどう言う相手だったか分かりますか？」

「…分かりませんわ。ただ。麻衣に憑いてるあの霊と同じ感じがします。強いて言えば空洞ですかしら。恨みもなければ怨念も感じられません」

何だかつくづく、今更ながら麻衣って役に立ってたのよね。

予知能力者で、霊の存在を感知するし、過去視やサイコメトリも出来るって言うってたわね。それに何だかんだ言っても、アタシもそうだけど、ベースに出入りする人間が麻衣が寝ている部屋を気にしているのよね。

「リン。一応、安原さんも呼んだが、本当にこれでよかったと思うか？」

「谷山さんにそう言われたのを忘れたんですか？ それに、ナルも分かっているんでしょう。だから、美山邸の調査の時に安原さんに身代わりを頼んだ。違いますか？」

「まあ……そうだな」

麻衣が、安原さんに関わるようになると言ったからだけではない。僕自身も、彼の調査能力は使えると思っていた。

「……くれぐれも言うておきますが、谷山さんに対する態度には気が付けて下さいね。美山邸の事件の時、誰も気付かないようでしたが、滝川さんが、私やブラウンさんと呼ばれた時、あなたが真っ先に駆け出そうとしたのを忘れないで下さい」

「別に年齢的に考えて、僕が麻衣を好きになってもおかしくはないと思うが？」

「そうかもしれませんが、彼女から、あなたの正体がバレしてしまう可能性もあります」

「……麻衣もあそこまで話す必要はなかったんだ」

僕がそう言うと、リンは大きく溜め息を吐いた。

「……記憶がなかったところにいきなり、知らない人達に囲まれていれば混乱もします。その時、うかつに話してしまったとしても、誰が、彼女を責めることが出来ますか？ むしろ、こちらの都合で正体を隠さなければならぬ我々の方でしょう」

「それが分かつてるから、麻衣が自分のことを話しても僕は何も言わないんじゃないか」

「……その歳で、ベッドに連れ込むのは違うんですか？」

リンにそう言われて、言葉に詰まった。調査の度に、麻衣は自分の秘密を暴露する。僕はそれを横で聞いていて、何とも言えない感情が湧き上がるのを止められない時があった。

それに、麻衣が出会うジーンの霊。

「……リン。ジーンは麻衣を守ってくれていると思うか？」

「そうですね。ジーンなら必ず谷山さんを守ろうとするでしょう」

僕はそれを聞いて、ホツとした気持ちになった。ジーンが麻衣を守らないわけがない。それは、双子の僕が一番よく分かっていた。

家族全員に護符を配ることになった時、ちよつと子供達とトラブルがあったのよね。靖高さんだけじゃなくて、陽子さんや二人の子供にも憑依霊が憑いているなんて思わなかったわ。

七縛で相手の動きを止めて、ジオンに落としてもらったんだけど、ちよつとヤバかったわね。

「我は、キリストの御名において汝に厳命いたす。身体のいかなる箇所にも身を潜めていようとその姿を現し、汝が占有する身体より逃げ去るべし、離れるべし。いづくに潜みおろつと離れ、神に捧げられたる身体をもはや求めるなかれ。父と子と精霊の御名により、聖なる身体は汝に永遠に禁じられたものとすべし。イン・プリンシピオ」

陽子さんなんか、アタシ達が来た時にはすでに憑依されていたみたいなのよね。

「まさか、始めから憑依されていたとはね」

「気付かないなんて、鈍感ですわね」

「あんたは一言多いわよ」

「でも、これで麻衣が手紙に書いておいた、「強い霊だから封じ込めておく」ってのが気になるところね」

「……ナルも口には出しませんが、麻衣のことを心配していませんわ」

「麻衣つて、感情的で暴走しがちだけど、何だかんだ言っても使える人間なのかもしれないわね」

「そう言や、俺達が最初に会った時はまだ、記憶がなかったんだよな？」

「そうどすね。あの時、思い出したと言っってはりましたから」

「だけど、ナルも不思議がってたけど、麻衣は始めから異様にゴーストハントや機材について詳しくったよな」

「そうだったっけ？」

「使えない頭だな」

「悪かったわね。そんなこと、一々覚えてないわよ」

「たださ、ナルは案外、麻衣を頼ることがあると思わないか？ 美山邸の事件なんか特にそうだし。俺は、あの二人、以前から知り合いないんじゃないかと思うんだ」

「まさかー。だったら何で、麻衣の記憶が復活したつてのに黙ってるのよ」

「……麻衣が記憶喪失中に知り合ったのかも知れねえぜ。それだったら、麻衣が全く覚えていないだけなのかも知れない」

こいつの推論に聞きかじるほど、暇じゃないのよね。ぼーずはそれから、食事が終わってもジョン相手に自分の持論を話し続けたわ。

夜になって奈央さんがいないって騒ぎになったんだけど、深夜に

なつて洞窟に彼女の遺体が流れて来ていたのが発見されたわ。

「原さん。奈央さんを降ろせますか？」

「分かりましたわ」

真砂子の降霊の結果、奈央さんは誰かに海に突き落とされたみたい。

翌朝になつて安原君が来たわ。ナルは、安原君に情報収集を頼んだんだけど、この日は本当に色々あったのよね。

先ず、母屋の方で火事があつて、みんなでそっちに行っている間に憑依されていた和泰さんが麻衣を起こそうと、ベースを襲つたわ。だけど、追い詰められて彼は自殺してしまった。

それから夜になつて、安原君が戻つて来たわ。

「まず、これが新聞のコピーです。これが先代。こつちが先々代」

「ご苦勞様です」

「先代と先々代の分。要約すると、こうです。先代　つまり彰文さんのお祖父さんがひいお祖父さんから家を譲られた時、八人の人間が死んでいます。四人は心中。残りの四人の内、一人が自殺、一人が事故、他の二人が原因不明の急死です」

「心中…ですか」

「ええ。次男が妻と二人の子供を殺して死にました。無理心中と言ふ奴ですね。それと客が二人死んでいます。原因ははっきりしません。海岸に死体が上がつたので、一応事故と言ふことになってますが、怪しいと思いますね。あと死んだ霊能者が三人。二人は自分達で焚いた護摩の火が衣に燃え移つて死んでいます。計十三人です。その前のひいおじいさんの時には、新聞に載っているだけで家族が六人。ただ戦前のことなので本当に六人だったのか怪しいと思いますね。井戸に入った毒物のせいで死んだらしいと。これは、金沢のお店を閉めてすぐのことです」

「…じゃあ、曾々じいさんが死んだのは、こつちに移つてからか？」

「そのようですね。享年七十八歳だから随分高齢ですよ。もう息子に店を譲っていたんじゃないでしょうか。これが過去帳です」

「コピーさせてもらえましたか」

「ええ。朝一番にお寺へ行ってコピーさせてもらって、それから市立図書館によって、すぐ金沢まで行って来たんですが」

「金沢まで行ってきたのか!？」

「行きましたとも。で、コピーを見て妙なことに気付いたんです。お祖母さんは、代替わりの時に必ず変事が起こると仰ってたんですよね。ですが、実際に吉見家で代替わりの時に大量の死人が出ているのは、先代と先々代の時だけなんです。結論を言いますと、

問題は吉見家じゃなく、この場所にあるんですよ」

安原君の話の聞いていると、ナルが資料を読みながら考えているみたいだったわ。

「とにかく力を分散させない方がいい」

除霊に掛かるうとした矢先、大きな音と共に、建物内を走り回る音がして、サーモグラフィもモニターもいかれたわ。

「…先手を打たれると言うやつですね」

「訪ねて行こうと思ったのに、向こうから出向かれちゃったよ」

「それって、もうけじゃないですか」

「美人が相手ならな」

「そうか。見苦しい女性だと迷惑なだけか」

「そう言うのに限ってしつこいんだ」

「経験者の言葉は重みがあるなあ」

「二人ともそれぐらいにしてもらえますか」

ナルの一言で二人の掛け合い漫才みたいな会話が途切れたんだけど、それからベースが死霊に襲われたわ。ぼーずがどうにか結界を敷いて持ち堪えてくれたんだけど、朝まで緊張しっぱなしだったわ。傷だらけのぼーずとジョンが除霊するって言うんで、

「……アタシがやる」

って言うのと、二人とも驚いていたわ。まあ、今までのことを考えたら当然かもしれないわね。

「言いたかねえけど、お前じゃ無理だ。そう言うことは、もっと役

に立ってから言え」

「今までは事情があったの！ 今度はできる。アタシに任せてあんなもジョンも寝てなさい。フラフラしてんだから」

「松崎さん。本当に出来ると仰るんですね」

「出来るわ」

「分かりました。一応のために、ぼーさんとジョンも一緒に来てくれ」

アタシはナル、ぼーず、ジョンと一緒にあの神社に向かったわ。それにしても、ナルがアタシを信用してくれるのがちょっと意外だったわね。

「つつしんで、かんじょうたてまつる、みやしろなきこのところにこうりんちんざしたまいて、しんぐのはらいかずかずかず、たいらけく、やすらけく、きこしめして、ねがうところをかんこのうじゅなさしめたまえ 臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前」

思っていた通り、アタシの浄霊は成功したわ。樹の精霊達はアタシの声に応えてくれた。ぼーずとジョンが、アタシの浄霊を見て、少しポーっとしているみたいだったわ。

「松崎さんから見ても、全部の霊を浄化できたと感じましたか？」

「いいえ。霊じゃないものがあるわね」

「…何だっ？」

「さつき、どうしても近付いて来ない力があつたのよ。霊なら浄化を求めて来るはずだから、あれは霊じゃない。なんだかは知らないけど、もっと大きな力だわね。それが連中を式として使役してたんだと思うわよ」

「ナルは、何なのか分かってんのか？」

「恐らく『おこぶ様』だろう」

とりあえずベースに戻ると麻衣がいた部屋の襖が開いていて、中にもぬけの殻になった布団だけが置かれていたわ。

「リン。麻衣はどうした？」

「食事を頂いています。起きて一言、「お腹が空いた」と」
「麻衣らしいわね」

「……真砂子ちゃんも一緒か？」

「ええ。ずっと寝ていたこともあって、着替えもついでにしてきた
いと仰りまして」

それから、麻衣と真砂子が少しして戻って来たんだけど、なぜか、
真砂子まで洋服に着替えていたわ。

「二人ともその格好は……？」

「麻衣が着替えておいた方がいいと仰ったんですわ」

まさか、さつき出たばかりの答えを予知してたつて言うの。

「麻衣は、『おこぶ様』を除霊できると思っているんか？」

「出来るつて言うよりも、やっとかないとまた同じことを繰り返す
だけだと思う。……海で死ぬ人がいる限り、式にはこと欠かさなさ
そうだしね」

「だからと言って、麻衣達も付いて来る気か？」

「当然。だって、今回ほとんど何も出来なかつたし、最後まで見
届けたいの」

それからアタシ達は、麻衣の提案で、全員で洞窟にある『おこぶ
様』を除霊しに行くことになったわ。

ぼーさん、ジョン、松崎さんが着替えている間、麻衣が安原さん
に何かを伝えていた。

「麻衣。安原さんに何か、頼んだのか？」

「あ、うん。ケガ人が出るから、先に救急車を呼んだ方がいいつて
言ったの」

「それも予知ですか？ ……そう言えば、麻衣は眠っている間も意
識はありましたの？」

「……あつたけど、霊を捕まえるのに苦労しちゃつて。つくづく、
みんなのありがたさが身に沁みました。それよか、ナルは無茶しな

いでね。次は助けられない」

「助けてもらおうとは思ってない」

「二人ともそれぐらいにして下さい。人が来ます」

リンに窘められてはつの悪そうな顔をしていると、麻衣は皮肉な笑いを、原さんは苦笑していた。

着替えの終わった三人と、救急車に連絡のついた安原さんを加え、僕達八人は洞窟へと向かった。

ぼーさん、安原さんらがケガを負う中、麻衣までケガをしたのを見て、我ながら子供のようだと思った。僕は力を使ってしまった。

「ナル！？ やめなさい！」

リンの声も僕には届かなかった。

大きな衝撃と共に、流木は壊れたわ。

「…今、ぼーさんは除霊できるんなら、最初からやって欲しかったな」と言う気持ちでいっぱいです」

「戻るぞ」

アタシと真砂子で安原君を支えて、リンとジョンの二人でぼーずを支えていたんだけど、何事もなかったのように歩くナルが突然倒れたわ。

ナルの心臓が止まっていたのか、リンが心臓マッサージをしていると、救急隊員が来たわ。手際よく連れて行かれたナルは、どうにか一命を取り止めたみたい。

「……あたしのせいだ。こうなるって分かってたんだから、ナルと一緒にいかせなければよかった」

「あんたがそんなこと言っても、聞くような奴じゃないわよ」

「そうかも」

「とりあえず、あんたはここにいなさい。…処置室の方のぼーさん達の様子見て来るわ。そろそろ手当ても終わる頃だろうし」

「あたくしも行きますわ」

「真砂子は、ここで麻衣と一緒にいて上げなさい」

「……分かりましたわ」

処置室の方に向かうと、三人ともそれなりにケガをしていたみたい。安原君は肋骨にヒビまで入って、入院が決定したわ。

それから、入院することになったナルと安原君の着替えなんかを取りに吉見家に戻ったわ。

ぼーず達は、今度は麻衣のことから、ナルの話題に切り替えたみたい。

廃校に閉じ込められた

渋谷さんが入院して二週間。ボクと滝川さんと、先に退院した安原さんと三人で、渋谷さんの正体について話しおつてました。

「ただなあ、ナルってのが何の愛称なのか分かんねえんだ。辞書にも乗っ取らんかったし。二人とも知らねえか？」

「ぼくはちよつと分かりませんね。ブラウンさん。ナルと言う愛称の方って、英語圏にいらっしやるんですか？」

「そうでおますね……」

ボクは「ナル」と言う愛称で呼ばれる名前を思い出したんどす。

「オリヴァーの愛称が確か、ナルやったと思います」

「マジかよー！」

「ほんとですか？」

「ハイです。ただ、ナルが愛称やったら、滝川さんの推論であるデイヴィス博士説が微妙になってしまふんどす。「ナル」と言うんは、アメリカの発音でおますから」

「だけど、それが本当だったら、俺の仮説が成り立つってことだろ」

「そうかもしれまへんね」

「ただなあ……。麻衣がどう言う関係なのか分かんねえんだよな。」

麻衣は、自分の後見人がSPRの人間だっってはつきり言ってるし、本人に会ったことはないけど、後見人がデイヴィス博士の父親と知り合いだっって言ってる。ナル＝デイヴィス博士が本当なら、あの二人はかなり昔からの知り合いってことになる」

「そやったら、以前、滝川さんが言うてはった、記憶喪失中に知り合ったゆうのは、違つとゆうことですよるか？」

「そうなるな。麻衣からナルの正体がバレることを恐れて、あの二人は態度が余所余所しいのかもしれないねえな」

渋谷さんの退院の日、ボクは安原さんとお留守番をさしてもらいました。その翌日。お世話になつた吉見家を出て、東京に帰ることに

になりましたです。

原さんがリンさんの運転される車に乗って、ボクは滝川さんの運転される車の後部座席に松崎さんと麻衣さんに挟まれる形で座っていたんですが……。

「なんつなのよ。真砂子のやつ！ 見た？ あの「当然でしょ」な態度！ ムツカつくつたら！」

「こっちに乗れるのは五人までだからな。一人、リンの方に乗ってもらうことになるけど誰か」

『原さん。乗りますか？』

『もちろんですわ』

「さも、自分は特別ですって顔しちゃってさ！ ナルもナルよ！

どうして真砂子だけに声掛けるわけ！？」

「どうせ、あっちに乗ったって後悔するくせに」

「どうせとか、そーゆー問題じゃないの！」

「ようは、自分が特別扱いされたいだけでしょ！。別により美人な方を乗せたわけじゃないんだから」

「当たり前よっ！」

「あのう。原さんが一番お小さいからと違いますか。三人やと狭いやろっし」

「あーら。アタシが真砂子より太いって言いたいわけ？」

「そ、そんなことは」

「身長が違や、サイズだつて違うじゃん」

「うるさいっ！ 大体、あんたナルが好きなんじゃないの！ 真砂子に出し抜かれてもいいわけ？」

「何で、そこであたしが出て来るのさ」

松崎さんと麻衣さんに挟まれた上に、この後、松崎さんは運転手の滝川さんとまで言い争いを始めてしもつて……。松崎さんを止められへん自分に恥じて、思わず心の中で、

（お師はん。ボクはどうしたらええんですかー）

っと思つてしまいました。

森まで来て、ようやく道に迷ったことが分かり、今度はリンさんに誘導してもらって帰ることになったんですが。ようやく広い道路に出た時、前を走る車がいきなり停まりはったようでした。

「何だ？ また、間違えたのか？」

「そんなはずはないんですけど……」

「あれ？ ナルが」

前の車から渋谷さんが出て来りました。慌てて、麻衣さんが車を降りられました。

「やだ。具合でも悪くなっただんじや。ナル！ 大丈夫？」

「どうしました。ナル？」

それからリンさんが様子見に、二人に近付いたんですが、渋谷さんの様子を見て、驚いていはりました。

「！ ここですか！？」

「……やつと、見つけた……」

それからボクらはキャンプ場のある場所まで戻ることになったんです。せやけど、渋谷さんの言った一言が衝撃でした。

「あのオフィスは戻り次第閉鎖する」

「閉鎖あ！？」

「閉鎖するって廃業すること！？」

「ど、どうして」

「説明しなさいよっ！」

「渋谷さん。夏バテですか！？」

「どならなくても聞こえます。もう少し、静かに出来ませんか」

それからボクらは滝川さんの提案で、キャンプ場に残留することになったんです。バンガローで、少し滝川さん達と話していたんですが、夕食の買出しのために麻衣さんが呼びに来りました。

翌日。滝川さんが渋谷さんに話を付けに行ったんですが、話を聞いてくれはる様子はなく、断られてしまったそうでした。

「ナルはどうも、湖の中の何かを捜しているみたいなんだよな」

「ぼく、噂でお聞きしたんですけど、死体を捜してるって、キャン

「ぶ場に来ている人が仰ってました」

「死体……どすか」

「ええ。ぼくの勘ですけどね。やっぱり、原さんと谷山さんは何かご存知だと思いますよ」

松崎さんらのバンガローで休んでいた時、リンさんがちょうど来はりました。

「少年がダイバーが死体を捜してるって噂を聞いたんだが。どう言う関係の人間なんだ？」

「……ナルのご兄弟です」

「何で亡くなつたのか聞いてもいいかね？」

「……事故だと聞いています」

「事故つて？」

「詳しいことはわたしにも……。ナルは言いたがらないので。

ただ、殺された。」と

「殺された……？ 犯人は」

「いえ……」

「ナルが自分で殺したんじゃないでしょうねえ？ でなきや、何で

ここに死体があるなんて分かるわけ？」

「綾子！」

「まさか。ナルは知っているんです。それだけです」

その時、渋谷さんが来たんですが。話している途中で、村長の松沼さんと助役の畑田さんゆう方が依頼に来りました。それから、暇だからと言う理由で、渋谷さんが依頼を受けはったんです。

依頼人らが帰られはった後、安原さんの何気ない一言から幽霊についての話になりましたです。

「あたしもこの体質のせいで、似たような物ならいくらでも見たけど、信じない人って信じないんだよね」

「何だか、ここじゃ、ぼくだけ素人ですね」

「安原さん。ぼーさんの愛読書でも見せてもらったら？ 安原さんも、デイヴィス博士のファンになっちゃっかもよ」

「ははは。じゃあ、そうだったら、谷山さんをコネに使っちゃいましょうか」

安原さんがそう冗談を言わはった時、麻衣さんは本気で少し考えているようどした。

その翌朝。ボクらは廃校になった小学校に向かったんどす。昼に近づくに連れて気温が上がり始めて、ボクも着ていた上着を思わず脱いでしまったんどす。麻衣さんらは、全員分の専用コップを用意してくれました。ちなみにボクのはペンギンでおました。

「可愛らしくてよろしいどすね」

「どんな局面でも遊び心を失わないのはいいことですよねー」

休憩していると、少し空が曇って来はりました。

「あれー。雲が出てきたね」

「ひよっとして雨ですやるか。降る、言う予報はおまへんでしたけど」

「降ったら面倒だ。今の内に昼飯の買出し行こうぜ」

「そうですね」

「じゃあ、ついでにちよつと聞き込みをします」

「ここにある物も買って来て」

滝川さん、安原さん、原さんの三人が買い出しに向かつてすぐに雨が降り出して来はりました。かなりひどい降りになってしまったこともあって、雨宿りのために校舎の中に入ってしまいましたです。せやけど、ファイルを取りに外に出ようと思った渋谷さんがいくらやってもドアが開かず、窓を開けようと思つても開きまへんどした。

「完全に閉じ込められたな」

滝川さんらが戻って来るまでのわずかな時間、各教室を調べることになったんどすが、何や、妙どした。机の中に荷物が残つとました。

出席簿を調べると、出席は十六日までしかあらしまへんどした。日誌を読んで、五月十七日に遠足があつたことが分かりました。

「……まさか。そのバス…が事故　とかで、それで生徒達が…ひよっとしたら全員死んじゃって　。それで廃校…:…?」

麻衣さんの意見は的を射ているような気がしたんどすが。

その後、何かの足音が聞こえて、二階に一人様子を見に行ったりんさんが消えはったり、滝川さんらが戻って来た直後にごっつい物音がして、同じように松崎さんも消えてしもうたんどす。

「なるほどね」

「ぼくら、完全にハメられたんですよ」

「だろうな」

「いやいや。これが予想以上の話でして。買い出しに行ったスーパーにいた人達に話を聞いたわけです。するとですね…。大概の人が口を開きたがらない。偶に開く人がいても「学校に近寄るな」とそればかりです。これは何かあるなと言うわけで、地元の図書館に行つて来ました。廃校になつた五年前の五月が怪しいと言うわけで、当時の新聞を引っくり返したら簡単に出て来ました。山津波です」

「え?」

「五年前土砂崩れが起こつて、車や家が巻き込まれてたくさんの方が死んだんです。　ドライブウェイに面した崖が崩れたんで

す。森林伐採のせいで地盤がゆるんで、長雨でゆるんだ山が崩れて、バスと車の何台かと道路わきの家を飲み込んだんです。その中に遠足のバスも混じつて、全員が死亡。それが分校の全生徒だったものだから、その学校が閉校になつて　」

この近くでそないなことがあつたなんて、知りまへんどした。そやつたら、この校舎にいてはるのは、そのお子達と言うことですやろか。

「それじゃ、その五年前の事故つてこの近くであつたことで、巻き込まれた遠足のバスつてこの学校の…:…?」

「ですね。それで、翌年の新入生が一人しかいなかったこともあつて、事実上の廃校になつたんです。あのダムが出来たのはその翌年で、確か、集落が一つ移転してますが　。ダムが出来るずっと前

のことで、廃校には関係ありません」

「……じゃ、何から何まで大嘘じゃない！」

「一応、合同で慰霊祭が行われて、現場付近には大きな慰霊碑も立っているようです。で、とりあえず事件のカタが付いた格好になるわけですが。問題はそこからなんですよね。図書館で若い連中に聞いてみたんですが」

「新聞をチェックしたところ、確かに小学生くらいの失踪事件がすごく多いんです。それも五年前から頻繁に。五年前の六月を皮切りに、四ヶ月から三ヶ月に一人の割合で消えてたんですが、実はこれが一昨年でぴたと止まってるんです。正確には一昨年の十月を最後に新聞の上では一年半に及んで失踪事件がないことになってるわけです。何やら怪しげでしょう？」

「怪しげって……」

「失踪事件はまだ、止んでいないと言うことが」

「ええっ!？」

「だから、村長達が依頼に来たんだろうな。間隔が空いているのかもしれないが、少なくとも完全に終わったはずがない。報道されな
いのは、手を回していると考えた方がいいだろう」

「ご名答です。帰り道、近くの集落の人にカマを掛けてみたんですが「失踪事件はなかった」とは言いませんでしたよ」

「子供達の行方は？」

「最初の頃の子供は全員死体で見つかってます。五年前の六月から約一年の間ですね」

「それ以後は？」

「見つかってません」

「……「死体が見つかったのはどこか」と言う質問を待ってますか？」

「やだなあ。分かっているんなら意地悪しないで下さいよ。待ってます」

「どこです?」

「勝矢字勝矢。支野田の山腹です」

「それは、この学校の所在地と一致しますか？」

「一致します」

「……なるほど。そう言うことか」

渋谷さんの見解では、失踪事件は今でも続いていはいはると言うこと
どした。

「村長達にしてみれば事件は防ぎたいが内情は、知られたくない。
霊能者を探したいが怖いし、手の内を明かすわけにもいかない。ど
うしたものかと思っていたところに 偶々霊能者の方からやって
来たと言うわけだ」

原さんの霊視やと数は二十人以上。存在感はとても薄いもんやそ
うです。原さんでも、リンさんと松崎さんの気配は分からへんそう
どした。

「麻衣の方はどうだ？」

「真砂子と同じかな」

それから、ボクらは再び全ての教室を見て回ったんですが、教室
の天井から死体が出て来はりました。

「……やっぱり。あれ、死体だった……よね……？」

「あれで生きてるはずがねえ。 大人だったぜ」

滝川さんは「餓鬼」ゆう鬼の一種や言うとりました。それから飲
み物を飲んで休憩することになったんですが。

「はいはい。少し、リラックスしましょう！ ペンギンのカップは
誰でしたっけ？」

「あ、ボクです。すんません」

「いえいえ。ウサギは誰の？」

「……松崎さんですわ」

「あつと……」

「内心動揺してるな、少年。まだまだ修行が足りんのう」

「何分、若輩ものでして。早く滝川さんみたいなステキなおじさま
になりたい」

「気持ち悪いからやめろ」

「へええ。そちらを取りましたか」

「あ？」

「気持ち悪いと講義してくるか、まだ若いと来るか。どっちかなーと。おじさんであることを認めましたね」

「どーせオイラは日本一さっ」

「それは富士山」

「どーせ俺は、桃太郎の子分……」

「それはキジさん」

「どっ、どーせ俺は、朝ごはん……」

「それはクロワッサン。ちょっと苦しかったですね」

どんな苦しい調査の時でも、滝川さんと安原さんは笑いを忘れはらん人達どすね。

それからお子らと共に校舎内を見て、何や、校舎の壁を壊せるもんがないかと探したんどすが。なかなか見つからへんかったんどす。
「教室を一つずつ清めて封じていく。最終的に一番奥の教室だけを残す方法で行こう」

「それしかねえわな」

「問題はあの子達だ。力を分散したくない。一緒に連れて行けるか？」

「そうだなあ。うーん……」

「ボクか滝川さんが残る方がええでしょう。教室を封じるなら、滝川さんの方が適任やと思いますけど……」

「俺とナルだけってのも若干不安があるな」

「何とかなるだろう」

「ジョーダンじゃねえって。何とされちゃ困るの。こないだみたいに、気功を使ってぶっ倒れても、この状況じゃ救急車も呼べねえんだからな。ジョン。子供達を任せていいか？」

「ハイです」

「麻衣。わりいが付き合ってくれや。ナルを任す」

こうして、滝川さんが渋谷さんと麻衣さんと一緒に二階を封じている間、ボクはお子らと一緒に一階に残ることになったんです。

「ねえ。お兄ちゃんは一人だけ残されて、寂しくないの？」

「皆さんが一緒ですから、寂しくなどありません」

「そうなのー？」

「ハイです」

「じゃあ、僕達と一緒にいてくれる？」

その時ボクは、お子らの言葉の意味が分からへんかったんです。せやけど、なんぼ待っても誰も降りて来へんどした。

「あれ？ ボクはどうしてはったんですやろ」

急に霧が晴れはったように、頭の中のモヤが消えてはりました。

ボクはいつの間にか、一人で教室に佇んどったんです。それから自分がここにいた目的を思い出して、いなくなっただみんなを捜すことにしたんです。

せやけど、何や、いくら捜しても誰も見つからへん。

「諦めるわけには行かへん」

ジョンを子供達と残して、ぼーさんに二階の各部屋を封じさせた。

「よし。これで、とりあえず二階の教室はオシマイ」

「ね。できたと思う？」

「分からん。どうも手ごたえがないな。何の反応もねえし。麻衣は何か感じないのか？」

「さつきから変な感じがして、いつもの感覚にならないんだよね」「変な感覚？」

「邪魔されてるって言うか……。何て言ったらいいのかな」

麻衣の言葉が気になって、僕らは一階にいるジョンの所に戻るところにした。

「戻ろう。…ジョンが気になる」

一階にいた子供達は無事だった。

「あつ、帰って来た！」

「どうやら、何ともなさそうだな」

「だけど、途中で麻衣は何かを感じたのか、立ち止まった。」

「待って！ ねえ、戻ろう」

「麻衣？」

「変だよ……。何か、変。子供達だけでここに残すなんてことすると思う？ 何かおかしいよ、絶対。ね、戻ろう」

「戻ろうって……。チビさん達をどうすんだ」

「お願い。戻ろう！ どうして車が二台なの！？ 一台を運転してたのがぼーさんで、じゃあ、もう一台は？ あたしもナルも免許なんてまだ取れないのに！！」

「麻衣。来いっ！ ぼーさん！」

僕は急いで、麻衣の腕を引っ掴んだ。

「ナウマクサンマンダバザラダンカン！」

ぼーさんは子供達の霊に襲われて引きずり込まれて行った。僕と麻衣は、二階にどうにか戻ることができたが……。

麻衣と二人で、消えた仲間が誰だったのか思い出した。

「麻衣。浄霊は可能か？」

「分かんない。……この霊は強いよ。ぼーさんでも感覚が狂わされるぐらい」

「だが、僕には出来ない。リン達がどう言う状態にあるのか分からない以上、僕は麻衣を頼らざるをえない」

「……ジーンは、この状況を見てるのかな？」

「恐らくな」

僕は、麻衣の頬を撫でた。だけど、麻衣はその僕の手を取った。

「今は、そんなことしている場合じゃないでしょ」

「……麻衣は、一度も僕の見舞いに来なかつたな」

「行ったには行ったよ。ナルが寝ている間に服とか届けて帰っただけだけ」

「入院している間、僕は麻衣に触れられなかつたんだが」

「だって、リンさんが自重した方がいいって言ったの。……あたしだって、ナルが助かったって分かった時、本当は縋って喜びたかったんだよ。ぼーさんや綾子達の手前、そんなことできなかったけど」
麻衣は掴んでいた僕の手をそのまま引っ張った。軽く触れるぐらいのキスをされた。

「本当は、真砂子に嫉妬してる！ ナルはあたしの恋人なんだってみんなに言いたい！」

その言葉を聞いて僕は嬉しくなった。

「……ナルが悪いんだ。有名な博士なんかになっちゃうから。昔みたいに、ただの口の悪い、捻くれた、ちよつと特殊能力を持つ少年のままだったらよかったのに……」

「口が悪くて、捻くれてて悪かったな」

とりあえず一階に戻ることにした。何にせよ、僕では除霊も浄霊もできない。こう言う時、ジーンなら麻衣に頼ることなく、自分で解決できるのかと思うと、やるせなさを感じた。

「ねえ、ナル。ぼーさん達、きつとナルの正体に気付いてるよ」

階段を下りる時、麻衣がそう言った。言われて不意に、ぼーさんから寄越された独鈷杵を、サイコメトリした時のことを思い出した。
「そつみいだな」

「ね。あたしが言ったとおりだったでしょ。ぼーさんがナルの正体に気付くって」

「ぼーさんは、思ってた以上に頭のキレる人間だったと言うことか」
「違うよー。ナルの大ファンだってこと。……ファンは大切にしようね」

その台詞は、勘違いした人間から逃げる時や、追い払っている時にジーンと共に何度も言われたな。

二階と一階の間を抜けようとした時、麻衣に引っ張られた。影壁にしていた下駄箱が倒れて来たらしい。

「助かった」

「どついたしまして」

それからどうにか一階に出たんだが、下駄箱を調べるとリンが貼っておいた護符が剥がれていた。

「このせいで真砂子は消えちゃったんだね……」

「とりあえず教室に向かおう」

「ナル。ここからは一人で行かせて」

「そんなこと、できるわけがないだろ！」

「あたしなら大丈夫。……それに、もしナルと一緒にいる時に何かあったら、あたしの方が耐えられない。目の前にいるナルが居なくなる瞬間を見るなら、ナルを残してあたしが教室に向かった方が楽なの」

僕は麻衣の真剣な表情を見た。麻衣はプロだ。記憶喪失中に一年半のブランクはあるものの、能力がなくなったわけではなかった。

「分かった。麻衣を信じる」

「ありがとう……」

玄関のある場所で僕は待つことにした。麻衣は教室のある場所に向かった。

どれぐらい経ったんですやるか。

不意に淡く、温かい光が見えたと思うたんです。

「浄化の光……？」

ボクは神様が見守ってくれてはるような気がしたんですが、何や、今は、仲間の誰かが浄霊を行ったゆうことが分かったんです。

「ぼーさーん！」

外で麻衣さんが、滝川さん呼びはっている声が聞こえました。ボクも慌てて外に出たんですが、どうやらボクが最後のようどした。

「そんで？ 誰が何をやったんだ？」

「と、聞くとところを見ると、滝川さんじゃないんですね」

「…少年じゃねえのは、確かだな」

「それだと、皆さんの立つ瀬がないでしょ。渋谷さん…。と、言うこともないですよ。無事に立って歩いてるし」

「あたくしも違います。リンさんでも、ブラウンさんでもないと思いますわ。除霊ではなく、浄霊でしたもの。浄化の光が見えましたから」

「さいです。ボクは何もでけへんかったです」

「ってことは」

「あっ、アタシ!? ちっ、違うわよ! この近くにはお継りできるような木はないもん」

ボクとしては少し、意地悪をしてしまいました。ほんまはみんな、麻衣さんやと分かってはったんどす。

博士の正体

廃校になった小学校の調査から一夜が明けましたわ。

浄霊をした麻衣は疲れているのか、険しい顔で昼過ぎまで寝ていらっしやいましたわ。

「……あのう。そろそろ起こしてあげはった方が……」

「うなされてるしねえ」

「もう、お昼もとくに過ぎてますし」

「よっしゃ。では、ワタクシが」

「って、何する気ですか」

滝川さんが麻衣の寝ている布団を引つ張って起こそうとされた時、麻衣が急に起き上がったんですわ。

「！ ビックリさせんなよ……」

「……ぼーさんは今日、近日中で、もっとも恥ずかしい思いをする
と、麻衣が言いましたわ。

「……あれ？ あたし、どうしてたんだっけ？」

「麻衣……。今の予言か？」

「何が？」

「俺が今日、恥ずかしい目に遭うって、今、お前さんが言ったんだ」
「……じゃあ、そうなんじゃないかな」

「それよりも、滝川さんが恥ずかしい目に遭うって、どんな状態だ
つたんですか？」

「……よく覚えてないけど、顔を真っ赤にして恥ずかしがってまし
た。あ！ 安原さんの姿も見えましたよ」

「ぼくもですか？」

「はい」

「そうなんですか……。じゃあ、恥ずかしがる滝川さんを側で見れ
るかもしれないですね。楽しみだな」

安原さんは面白がっているようでしたわ。

それから昨日の調査の話になって、ナルの捜している人物の遺体の話になりましたわ。

「そう言えば、麻衣はイギリスに帰らないんですの？」

「……里帰りって言うよりも、帰るとしたら本格的に戻ると思うんだ」

「どう言うことですか？」

「あ、少年は詳しいこと知らないだったな。麻衣は、記憶喪失だったんだと。日本に来る時に何かの拍子に記憶を失ってそのまま日本で一人暮らししていたらしい」

「へえ。谷山さんにそんな秘密があつたんですか」

「……秘密って」

「秘密と言えば、渋谷さんですよ」

安原さんは、なぜか急にナルに話題を変えましたわ。ちょうどその時、ナルとリンさんが表を通られた時、安原さんが呼び止めてバングローに引き入れられましたわ。

「ちつとばかり質問をしたいんだが、答えてくれるかね？」

「時間のムダだな」

出て行くこうとするナルの進路を、安原さんとブラウンさんが妨げられましたわ。

「時にはムダも必要ですよ。人生には」

「腕ずくで通ることも出来ますよ」

「うーん。ケガが悪化したら困るなあ。それでもって救急車を呼んで、ぼくが「リンさんに暴力を振るわれた」なんて口走ったら、警察まで来ちゃいますよね。渋谷さんも調書を取られて隠していたことがモロバレになる可能性がありますけど……。どうです。ここは一つ、穏便にいきませんか？」

「五分間」

「そんなセコイことを。三十分欲しいね」

「十五分」

「おっけー。十五分」

それから滝川さんの推理が始まりましたわ。全部知っているはずの麻衣は、ただ、何も言わずに黙って見ているだけ。麻衣はきつと、前々から滝川さん達がナルの正体に気付くことをご存知だったんですわね。

ナルに無条件で傍にいろことを許された女性。

それを知った時、羨ましいと思う反面、入り込む隙間がないのだと思いつてしまいましたわ。

「ひよつとして「渋谷一也」ってのは偽名で、本名の方が「ナル」なんじゃないか？」

「……うがった所を突いてくるな」

「お楽しみはこれからだぜ？」

滝川さんは、ナルの性格やリンさんの性格から、ナルが本名ではないかと推理したようでしたわ。それから住んでいる場所や、ナルがことわざや格言に弱いことからナルが外国人だと判断したようでしたわ。

「こいつは日本人じゃない」

そして、渋谷サイキック・リサーチの略称であるSPRから、英国心霊調査会に辿り着いたようですわね。

「さてお立会い。この「SPR」ってのと、異常に高価な機材。ナルが日本人じゃないらしいってのを混ぜてシャカシャカ振ってやると、一つの答えが出るんだよ」

「あー！」

松崎さんが滝川さんの意図に気付いたようですわ。

「そう。「Society for Psychological Research」イギリスにある最も古い権威ある心霊調査団体だ。「渋谷サイキック・リサーチ」ってのは世を忍ぶ仮の姿。実は、あのオフィスは「心霊調査協会」の日本支部なんじゃねえのか？ もしもナルが「心霊調査協会」の正式な調査員なら、あの機材にも説明がつく。ありゃ「心霊調査協会」のものさ。ナル個人のもんじゃない。しかも、この仮定にはもう一つおまけが付く。ナルが「SPR」

の人間だとすると、なぜ、偽名を使って身分を隠すのだったのにも想像が付きちゃうんだな」

「ぼ」さんの推理が本当なら、あたしのこと知ってると思うけど」
麻衣の意地悪な質問が出ましたわね。

「麻衣は三年前に日本に来る途中で記憶をなくしたって言ってただろ。その間にSPRに入ったか。元々知り合いでもなかったか。それか、知り合いであることを隠しているかってことだ」

「そう言えばそうね。ナルは麻衣の能力を知っているはずなのに、調査の時は余所余所しいわね。」

「それに、麻衣の普段の性格を考えれば、今回ここに残ることになった理由だって、なぜなのか、とナルに問い質してもおかしくない。麻衣が記憶喪失だったのは事実だったにしろ、思い出した後にナルヤリンから事情を聞いたんじゃないのか？」

「それだったら、記憶が戻った後、あたしがイギリスに帰れば済むと思うけどなあ」

「言われてみればそうよね。さっきの起き抜けの予知や予言もそうだけど、麻衣は調査の時なんか、普通に寝ていても寝ぼけていることがあるもの」

「……綾子。あたし、そんなに寝言多いの？」

そう言えば、聞き取れませんが、時々何か喋っているのは事実ですわね。

「麻衣の能力はともかく。麻衣の性格は秘密を守るには向いているとは思えない。なのに、ナルは麻衣をバイトとして雇い、傍に置くことを選んでいる。普通に考えれば、麻衣がイギリスに戻る戻らないうって言うよりも、バイトとして傍に置かなければバレる心配は減る。それにも拘らず、ナルは麻衣を傍に置いている」

「……麻衣が何か関係あるとでも仰るんですか？」

「そうだな。……俺は、二人が恋人同士じゃねえかと思ってる。それもかなり深い関係だ。元々付き合っていた可能性も高い。記憶喪失で行方不明だった恋人に再会して、離れ離れになるよりは、リス

クを背負ってでも傍に置きたいと思うだろう。どうだ？ 違うか？」

滝川さんの推論を聞いていた麻衣はなぜか、突然、お腹を抱えて笑い出しましたわ。

「あはははは。ぼーさんってすごいよ。ほんとに」

「何で、笑うんですの？」

「あたし、自分の未来は予知できないから、まさか、ぼーさんがそんなことまで分かるなんて思わなかったの。それで、ナルの正体は分かっているんだよね？」

麻衣がにっこりと笑ってそう言っていると、滝川さんはナルの正体の話に戻りましたわ。

「ジョンにナルがオリヴァーの愛称だって聞いて、一人思い出した人物がいるんだ」

「「SPR」のオリヴァー……。まさか、デイヴィス博士……。ってこと？」

松崎さんがそう言いながらナルの方を見ましたわ。

「返答する必要があるとは思えない。十五分は経過しましたが」

ナルはそのまま、出て行ってしまいましたわ。それからリンさんがナルのことを説明しましたわ。

「麻衣は、ナルといつ知り合っただ？」

「二人がイギリスに来た時からだよ。あたしが八歳で、ジーンとナルが九歳の時。実は、リンさんとの付き合いは、ナルよりも長いんだ。それに、会員になったのはナルよりも一年遅れてだけど、被験者としては二人よりも古株なの。博士号は持ってないから、ナルよりも立場は下なんだけどね」

「じゃあ、さつき、ぼーずが言ったのは本当なの？ 恋人同士って話」

「……まあ、嘘じゃないかな」

「谷山さん。あんまり隠していると、ナルの機嫌が下降しますよ」

「そうですね」

リンさんに言われて、麻衣は慌ててましたわ。

「あ」

その時、突然、安原さんが大きな声を上げられましたわ。

「ど、どうした少年」

「あのー。ぼく、素敵な事実が気が付いちゃったんですけど。滝川さんでデイヴィス博士に傾倒してるんですよ。ってことはつまり、渋谷さんの大ファンってことじゃないですかあ」

滝川さんが顔を真っ赤にして恥ずかしがる様子を見て、あたくしだけでなく、松崎さんやブラウンさんも、先ほどの麻衣の起き抜けの言葉を思い出しましたわ。

安原さんがいる状況で恥ずかしがる滝川さんの姿は、正に麻衣が言っていたとおりですわね。

それから、ナルのお兄様の遺体が見つかったと言う話がありましたわ。麻衣はイギリス時代に仲が良かったのだと教えてくれましたわ。

「ジーンとは性格が似てるって言われてて、小さい頃はナルよりも一緒にいることが多かったの」

「……麻衣はなぜ、ナルの方を選んだんですの？」

「あたしが選んだんじゃないわ、ナルが選んでくれたんだよ。……大学に入って一年が過ぎた頃かな。その時はナルもまだ博士号なんか持ってなくてね……」

麻衣はその時のことを思い出しているのか、何だかとても、嬉しそうに顔をしていらっしやいましたわ。

「好きだと言われたんですの？」

「ううん。違う」

「じゃあ、愛しているとしても仰ったんですの？」

「それも違う」

「じゃあ、何なんですの？」

「抱き締められてキスされたの。……ナルの能力は知ってたから正直驚いた。あたし、その時、ジーンも含めた同年代の友達と喋ってる最中だったんだよ。ジーンですら、ナルの行動には驚いてたっけ」

「ナルが人前でキスしたんですの？」

正直驚きましたわ。あのナルがそんなことをするなんて。

「ですけど、最初の頃は麻衣はあたくしのしていることを応援しているフリをして下さっていましたけど、なぜですか？」

「応援って言っよりも、ナルに真砂子のご機嫌取りをするように言っただけ。あたしには霊視の能力がないからさ。真砂子みたいな霊媒師は貴重だっって言っただの」

「……あたくしはプロですわ。ご機嫌取りなど不要ですわよ」

「そうだね。ナルにも同じこと言われたよ。……あたし、同い年の友達っていなかったから、真砂子に会えて本当はすっごく嬉しかったんだ」

「学校の友達は違うんですの？」

「違うよ。イギリスの同級生は年上ばかりだったし、日本の方も、あたしのことは何も知らないから」

あたくしは聞いてみようと思って聞いたことを聞いてみましたわ。

「……麻衣は、ナルと一緒にイギリスに帰るんですの？」

「検討中」

「検討中ですか？」

「うん。ナルがね、分室維持の申請を出しているんだって。向こうに戻ったら、あたしはもう日本に戻れないし、元々あたしはナルの研究チームに所属しているわけじゃなくて、大学の方で別のチームに入ってたから、余程じゃないと戻って来れないと思うの。だから許可が下りたら日本に残ると思う」

「……下りなかったら、帰ってしまうんですの？」

「日本に残りたいとは思ってる。ただ、イギリスの研究チームの間もいるんだよね。だから、全ては申請の許可しだいかな。あたしがナルの手伝いをしてたのは、みんな知ってるし、機嫌の悪い時のナルの機嫌取り扱いだったんだよね」

「そうだったんですの？」

「そうだったんです」

それから、あたくしは麻衣と二人で一晩中お喋りしてましたわ。
翌日の午後。ナルのご両親がいらっしやいましたけど、ジーンのことを悲しむ一方で、麻衣に会って嬉しそうにしていらっしやいましたわ。

ご両親は茶毘にふされたジーンの遺体と共に一足先に帰って行きましたわ。

それからあたくし達は東京に帰りましたの。

「真砂子ー！ 維持申請の許可が下りたんだって！ とりあえずあたし、高校卒業までは日本にいられることになったの」

「よかったですわね。学校や研究の方はよろしいんですの？」

「あ、それがね。本格的に戻らなくてもいいから、一度、戻って来るように言われちゃった」

「……じゃあ、夏休みの間はいないんですの？」

「と、言ってもナルと違って一週間ぐらいだけだね。所長代理として来てくれるまどかさんと一緒に戻って来るから」

「当分、麻衣と一緒にいられるんですね。何だかあたくし、ナルが羨ましくなっちゃいましたわ。」

「……原さん。麻衣は僕の物ですから」

「あら。選ぶのは、麻衣ですわよ」

片想いだった相手は、今やライバルですわね。麻衣の親友の座は渡しませんわ。

双子との思い出 (前書き)

性的描写が入ります。

双子との思い出

あれは、日本にいる両親が事故で亡くなったと言う知らせを受けて、渡英以来始めて日本に戻って両親の葬儀に参加した日から一ヶ月ほど経った頃だった。

今度、新しい子供がここに加わることになったんだ。アメリカ出身の双子でね、とっても可愛いんだよ

能力者の子供達が集められた部屋には、あたしのような日本人はいなかったけど、同じくらいの子供は何人かいた。双子と聞いて、友達になれるかなと期待した反面、あたしも含めてみんな、新しく来る子は女の子だと期待していた。

だって、可愛い子だって言ったから。

デイヴィス教授に連れられて来たのは、それはもう黒髪と深い青が特徴的なソツクリな双子だったの。

うわ、そっくり

キレイ

女の子みたい

みんなが口々に感想を述べる中、片方はニツコリと笑い、もう片方はブスっとした顔つきをしていたの。

僕はコージン。ジンって呼んでね。こっちは弟のナルだよ

ジンがそう言うと、ナルはその横でボソリと呟いていた。

…… オリヴァーだ

あたし達はそれぞれ自己紹介したけど、ジンが社交的な性格である一方で、ナルは内向的な性格に見えたわ。

ねえ。ナルはジンの付き添いな？

ええ、そうよ

…… ジーンは霊媒師なんだよね？ じゃあ、ナルは？

双子で片方だけ能力者って言うのは珍しくないけど、あの二人は何だか違う気がした。シンク口率が高すぎる。

ナルは、ジーンの実験によく付いて来ていた。待つている間、ほとんど本を読んでいることが多かったんだけど、誰が話し掛けても返事なんかしなかった。

聞いてよ。オリヴァーに 元気？ って声を掛けたら無視されたのよ

アンナってば勇気あるわね。オリヴァーが返事を返してくれないなんて今更じゃない

マイはよく、ジーンと一緒に実験やってるから、オリヴァーに会う機会も多いでしょ？

いっつも本ばっか読んで。きつと、あたしの顔も名前も覚えていないと思うな。オリヴァーが話し掛けて返事するのは双子の兄のジーンと、両親だけみたい

その頃のあたしは、ナルのことを「ナル」ではなく、「オリヴァー」って呼んでいた。それに、ナルの能力もSPRでは知られていなかった。

そんなある日。後見人のライアー教授に連れられて、久方ぶりにデイヴィス家を訪ねた時だった。双子がデイヴィス家の養子に来てからここに来るのは初めてだった。

まあ、マイ。久しぶりね
ルエラ。ごきげんよう

ここのところ、遊びに来てくれなくて寂しかったわ

だって、せっかくルエラに本当の子供が出来たのに、あたしがいたら迷惑かなって思ったの

そんなことないわ。マイは特別よ。ジーンやナルとも仲良くしてちょうだいね

……ジーンはともかく、あたし、オリヴァーと仲良くなる自信ないかな

あたしが正直にそう言うと、ルエラは少し困った顔で苦笑していた。ライアー教授は独身だったけど、マーティンとルエラも結婚して十年になるけど子供のいない夫婦だった。あたしの両親が死んだ

時、養子の話があつたけど、国籍の問題や、あたし自身、二人の養子になることを拒んだ。だって、両親が亡くなった時にはすでにジーンとナルの養子の話が決まっていたから。

あたしはルエラに頼まれて、双子を呼びに二階に向かった。

「ナル。どうしてもっと、愛想よく出来ないかな」

「そんなのは僕の勝手だ。それに、同じ顔でヘラヘラ笑っている人間がいるんだから、今更僕が愛想よくする必要があるとは思えない」「だけどさ、せめて返事は必要だと思うよ」

「僕は、僕の邪魔をする相手と会話しようなんて気はさらさらない」扉が少し開いていて、聞こえて来た会話は日本語だった。あたしは双子の部屋の扉をノックした。

ルエラが呼んでるんだけど

……えっと、マイ？

うん。教授と一緒にホームパーティにお呼ばれたの

そうなんだ。今、行くよ

そう言いながら、ジーンが出て来た。続いてナル。二人はあたしが日本人であることを知らない。それから、誰にも理解出来ないと思つて、時々二人が日本語で会話しているのをこっそりと聞いていた。

あたしが日本人だつて知っている人は、ほんの一握りしかいない。出会ったばかりの頃ですら、リンさんもあたしが日本人だつて知らなかったくらいだ。

リンさんは、日本人が嫌いだつて言つてたけど、あたしのことも嫌いなんだ

あなたは、私の知っている日本人とは少し違います

違うないよ。イギリスにいても、どこにいても、あたしが日本人であることは事実だもん。リンさんが例えイギリス人になつても中国人であることは変わらないのと同じことだよ

ですが……。そうかもしれないですね

何かの本で読んだんだけどね、人の性格って、国や人種じゃなく

て、周りの環境で変わるんだって。リンさんが日本人嫌いになっちゃったのは、日本人は悪い奴だって教えた大人のせい。あたしだって、日本にいた頃は外国人は怖い人だって聞いたけど、理解するつもりがないからそう見えるんだって分かったの

マイさんは不思議な人ですね。そんなに幼いのに、達観していません。ジーンやナルに少し、似ているかもしれません

あの二人に？ そう言えば聞いたんだけど、リンさんはオリヴァーに気功術を教えているんだって？ やっぱり、オリヴァーも能力者なの？

まだ、はつきりとしたことは何とも。ですが、デイヴィス教授はその可能性がなくもないと仰っています

ってことは、ジーンと同じ霊媒師系なのかな……

考えても分からなかった。それに、その頃はあたしの能力も安定したものじゃなかったし、ナルの能力を知ることが出来るとは思えなかった。

デイヴィス家に何度かお呼ばれして、二人と食事を一緒にする機会が増えたけれど、相変わらずナルはあたしの存在を無視し続けた。どうしたら、マイはナルと仲良くなってくれるの？

そんなこと言われても、あたしは今のままで構わないと思ってるけど

そんなことないよ！ せっかく一緒に食事してるのに、会話がなかなんて寂しいじゃない

あたしとナルが会話しなくなつて、ジーンやルエラと会話するし、オリヴァーだって、マーティンや教授と会話してるじゃない

だから、そのオリヴァーって呼び方が問題なんだよ。リンだってナルって呼んでるんだよ。だから、マイもナルって呼んであげてよ。だって、オリヴァーって誰かが ナル って呼ぶと嫌そうな顔するじゃない。マリーやナターシャが言ってたよ

あれは……

ただでさえ不機嫌な顔をした人間を、さらに不機嫌にさせるつも

りはないから。この話はここでおしまい

あたしがそう言つて帰ろうとした時、置いておいたバレッタがなくなつたことに気付いた。

あれ？ここに置いてあつたバレッタ知らない？

ううん

ジーンは首を横に振つた。確かに置いたことは覚えている。そんな風に考えていると、ナルが来た。

ジーン。何やってるんだ！先生が怒つてたぞ

マイのバレッタがなくなつちやつたんだよ

はあ？

一緒に探してあげようよ

何で、僕が

ジーン。いいよ。先に戻つて

ナルに頼るのは何だか嫌だつた。イギリスに来る前からしていたお気に入りのバレッタだつたけど、なくなつちやつた物は仕方ない。どこでなくした？

え……

耳が聞こえないのか？

だつて、ナルがあたしに話し掛けてくるとは思わなかつたから。きつと、認識なんかされたことなんか一度もないと思つていた。

えつと、そのベンチに

あたしがそう言つと、ナルはなぜかベンチに触れていた。ジーンは何も言わずに黙つて、その様子を見ていた。

銀色のバレッタか？ 花模様の

そうだけど

カラスが銜えて行つたみたいだな。その木の上に巣がある

ナルが少し離れた所にある木を指差した。さすがにあたし達子供だけじゃどうにもならなくて、先生に頼んで取ってもらつた。

どうして、あそこにバレッタがあるつて分かつたの？

ナルは、サイコメトリーの能力者なんだよ

気功じゃなくて？

それもあるけどね

でも、ありがとう。このバレッタ、両親の形見だから

あたしが言ったその一言に二人は驚いていた。

形見って……。マイはライター教授の子供じゃないの？ だって、

マイ・ライターって

教授は後見人だよ。あたしの両親はもう、いないの。どこにも

あたしは何だか泣きたくなった。そしたら、ナルとジーンが揃って、ハンカチを差し出してきた。その様子を見て、あたしはナルを誤解していたんだと思った。態度や見た目に騙されていたのは自分の方だと思った。それがちょうど二人がイギリスに来てから一年が過ぎた頃だった。

それからさらに半年ぐらいして、ナルは被験者としてSPRに入りするようになった。ナルは、サイコメトリとPKの保持者だった。

あたしは十歳。ジーンとナルは十一歳になっていた。

他の人に比べれば、少しは喋るようになったけれど、それでもナルはその能力の弊害ゆえに、ジーン以外が触れるのを拒絶した。

「僕は、案外、マイがナルに触れても平気なんじゃないかなって思うんだ」

「お前は、僕を卒倒させるつもりか？」

「そうじゃないよ。自分だって、マイはインナーだって認識はあるでしょ。そうでなければ、ナルが敬意の度合い以外で人と話すなんてしないじゃない」

「……それは、そうだな」

「でしょ」

会話内容がバレていないと思って、日本語で会話を続けている二人の側で、あたしは正直言って、どう反応していいか分からなかった。自分の話が出て、冷静でいられるほど、あたしは大人じゃなかったから。

学校の方はナルとは同じクラスだったけど、研究所ほど会話することはなかった。能力者であることは内緒だったし、ナルもジーンもあの顔立ちのせいでみんなに人気があったから、他の子に恨まれるのは勘弁して欲しかった。

だけど、ある日の体育の時間。あたしは飛んで来たボールを避け切れなくて脳震盪を起こして倒れてしまった。

体育の時間。ボールにぶつかったマイは保健室に運ばれた。

ドクターがいないな。私は捜しに行つて来るから、オリヴァーはマイを見ていてくれるかな

分かりました

先生が、保険の先生を呼びに行つて居る間、宿直だった僕は、脳震盪を起こしたマイに付き添うことになってしまった。

あれぐらい避けられないのか

物凄い顔で眉をしかめて眠るマイを見ると、彼女の頬を涙が伝った。

「お父さん……。お母さん……」

マイが呟いたのは日本語だった。

「何で……。何で、待つてくれなかったの……」

夢を見ているのだろうか。彼女が呟く言葉は全て日本語だった。

「……もしかして、日本人なのか？」

その時、僕はマイがイギリス人であると言つたのを、一度も聞いたことがなかったことを思い出した。だが、マイは日本人嫌いを公言しているリンと仲が良かったはずだ。

考えれば考えるほど、分からなくなりそうだった。

僕は何気に、マイの涙を拭いた。彼女の感情が流れて来た。恐らく、両親が亡くなった時のことを夢に見ていたのだろう。知らせを受けて、ライアー教授と共に日本に向かうマイ。

葬式の間中、マイは泣き続けていた。両親には、兄弟も親戚もい

ないらしく、イギリスに行っていたマイを冷たい目で見る人々。薄情な子供と陰口を叩いていた。

「だって！……だって、一緒にいる時の方が二人に迷惑掛けちゃったんだから……。あたしのこと、気味悪がってたくせに、薄情なんて言わないでよ！」

マイは、自分の能力のために両親の元を離れたのだ。

彼女は、わずか六歳で周囲の人間の感情を読み、理解し、自分が出来る最善のことをしていた。

この日以来、僕は、マイに対する考え方が変わった。

ナルは他人を排除しようとすることがある。

ジーンと仲良くなって、ナルもジーンと同じように笑ってくれたら嬉しいなとちょっと思っていた。だから、ジーンにするイタズラに付き合っていたんだけど。

ルールを決めよう

ルール？

そう。大ケガや、命に関わるようなイタズラはしない。それからナルに対しては、亡くなった人やひどい暴力を受けたことがある人の物はしようしない

そうだね

今思えば、自分でも子供だったと思う。ジーンと二人で、イタズラをしては色んな人に叱られた。それに、あたし達のイタズラの一番の被害者はナルだったかもしれない。

日本で言う中学に入ってから数ヶ月が過ぎようとしていた頃、あたしは大学受験に挑戦することになった。スキップ試験がかなり成績がよかったかららしい。何だかよく分からなかったけど、とりあえず受験してみることにした。

おめでとう、マイ。試験に合格したよ

ライター教授はそう言って、合格通知をくれた。何だか実感が湧

かなくて、あたしはしばらく合格通知を眺めていた。受験したことは、ジーンはもちろん、ナルにも言わなかった。と、言っても、ナルにはそんなことを話すほど親しくはなかったんだけど。

この頃すでにSPRの史上最年少会員になっていたナルは、常に忙しそうにしていたから、ジーンとのイタズラも消極的になりつつあった。

一緒に進級試験を受けて、進級すると思っていたジーンとナルは、あたしが大学に入ることを聞いて驚いていた。

だ、大学……。マイってば、大学に入ったの！

うん。それとね、SPRにも入れることになったの。今度は被験者じゃなくて正式に会員登録されて

マイちゃんは、ナル同様、わたしの部下になるのよ

そんなに一緒に参加できないかもしれないかもしれませんが、なるべく調査に参加しますね

期待してるわ

まだかさんは面白い人だった。あたしと同じ日本人なんだけど、ナルを笑顔でやり込めるぐらい大人だった。あたし一人、先に大学に進学したため、ジーンやナルとはSPR以外ではほとんど会うことはなくなった。

大学に入って一年が過ぎようとしていた頃のことだった。ジーンを含めた友人数人とお喋りしている時だった。

なあ、マイは誰とも付き合っていないんだろ？ だったら俺と付き合ってよ

俺の方が前々から申し込んでるんだ

順番なんか関係ないだろ

あのねえ、人の気持ちを無視しないでくれないかな

マイはジーンと仲良しだけど、付き合っていないって言うてたわよね

うん

じゃあ、他に好きな人でもいるの？

今のところは特には……いないかな

試しに付き合ってみるってのもいいと思うけど？

友人のマークがあたしの肩に手を掛けてきて、引き寄せられそうになった時、突然、反対側から腕を引つ張られた。驚いて声を上げそうになった瞬間、キスをされているのだと気付いた。

きめ細かい肌。長い睫毛。それ以上に、周囲の驚いている顔が見えた。

ジーンの存在を見るまで、自分にキスをしているのがナルだと認識するのに時間が掛かった。唇が離れた瞬間、あたしはナルに平手打ちを食らわせた。

何すんのよ！

あたしの手形が付いたナルは、それ以上は何も言わずに立ち去った。一人取り残されたあたしは、みんなから質問攻めにあい、最悪なことになった日には、現場を目撃したSPR会員や大学関係者に知れ渡ることになってしまった。

何で、あんなことしたの？

したかったから

……ナルはあたしが好きなの？

そうなのかもしれない

ナルが少し恥ずかしそうに視線を逸らした。その顔を掴んで前を向かせた。

だったら、はっきり言いなさいよ。告白ぐらいなら受けてあげるわよ

告白……だけなのか？

まるで子犬のような瞳で見るナル。ジーンと違って、普段のナルとのギャップがあるせいなのか分からないけど、こう言うナルの表情は、ジーンよりも効果が絶大だった。

はっきりと告白されなのまま、あたしとナルは付き合うことになった。って言うよりも、あのキス事件で周囲がそう思うようになったって言うのが正解かもしれない。

付き合い始めて数ヶ月。学会に発表したナルの論文が認められた。博士号をもらってデイヴィス博士と呼ばれるようになったナルに注目が集まるようになった。博士号をもらう前から付き合い始めていたあたしを、分かっていたから付き合い合ったんだろうと言う人がいたけど、あたしの能力以前に、ナルをよく知っている人達はこう言うてフォローしてくれた。

ナルが自分から触れるだけでも奇跡なんだよ

主に言っているのはジーンだったけど。自分の娘をナルと一緒にさせたいと思う人にとっては、あたしは邪魔者だったけど、ナルの機嫌が悪い時の機嫌取りに使っている人達にとっては、あたしの存在はナルの精神安定剤のようだと思っていたらしい。

ナル。もうすぐ、ナルとジーンの誕生日だね。何か、欲しい物ある？

……何でもいいの？

高い物や珍しい物は無理だよ

マイしか持ってない物だから大丈夫だ

あたしはその言葉の意味が分からなかった。

だけど、二人の誕生日から数日。あたしはナルの部屋に連れ込まれて、ベッドに押し倒された。

何するつもり

誕生日プレゼントをもらおうかと思って

ちゃんと上げたじゃん

僕が欲しい物はもらってない

ナルにとってはまだの実験にも似た行為だったのかもしれないけど、あたしにとってはただの恐怖にも似た行為だった。前戯もへつたくれもない状態で、ナル自身があたしの股間に侵入してきた。

やあー！

……マイ

やだ……止めて

泣いて訴えても、ナルの侵入を阻めずにいた。それでも、ナルを

嫌いになれない自分が一番許せなかった。ナルが焦っている気持ちが何となく伝わってきたから。

初めての行為はただ、痛いだけだった。

サイコメトリストのナルにとつては、性欲を感じるかどうかの実験のようなものだったのかもしれないけど、あたしはナルによって大人になってしまったのだ。

国籍を移籍させるために、あたしが日本に向かったのはそれからわずか十日後のことだった。

見送りに来たナルやジーン達と別れて、搭乗口に向かったあたしは、同じ飛行機に乗る人々に混じって歩いていた。その時、段差に躓いて前の人に触れた瞬間、飛行機が落ちるのを見た。

あたしの前方を歩いていたのはテロリストだった。だけど、すぐ後ろにも仲間がいた。あたしを助けてくれるフリをしながら、後ろにいた男が囁いた。

マイ・ライアーだな。お前は、何も知らなかった。そして、私達と一緒に死ぬんだ

狙われたのは誰だったのか、今でも分からない。もしかしたら、あの飛行機が落ちたのはあたしのせいなのかもしれない。

こうして僕はけしかけた

SPRの研究所内で、みんなの目の前でナルがマイにキスをした事件から数日前に遡る。

「ナルはさ、マイのこと嫌い？」

「……何だ。突然」

「嫌いじゃないよね。だって、僕がマイを、僕達の部屋に連れて来ても文句言わないし」

「言い争って、ムダな時間を過ごしたくないだけだ」

「それにさ、ナルと同年代でナルの話について行けるような女の子って、マイがぐらいじゃないかな。マイは頭いいし、能力者だけど、底抜けに明るいいし、社交的だし、男の子達に人気あるよ。大学の方はさすがに年齢的なんだけど、ナルは気付いてないかもしれないけど、スクールの方じゃ、マイが大学に入ったことに未だに残念がつている子も多いよ」

「……さっきから、何を言いたい」

「ナルは、マイのこと好きでしょ」

「は？」

僕の言葉に、ナルは眉間に皺を寄せた。

「だから、ナルはマイが好きだよ。って言ったの」

「マイが好きなのは、ジーン、お前だろう。いつも一緒にいるんだから」

「まあね。マイを嫌いになる人間は滅多にいないよ。せいぜい、ナルや僕に対して恋心を抱いて、側にいるマイに嫉妬するか、マイ自身を憎むかってぐらいかな」

「僕やジーンに……の部分分かるが、マイ自身が直接憎まれるよ。うなことがあるのか？」

「そりゃ、あるでしょ。マイに自分の好きな人が惚れちゃったとかね」

「それでマイに恨みか、くだらない」

「くだらないって言うけどね。女の嫉妬は怖いよ。子供の頃ならいざ知らず、学校も別々になって、友人ってだけで四六時中側にいるのは変だよ。だからさ、僕、思い切ってマイに告白したんだよ」

ナルの皺が先ほどよりも深くなった。

「そしたらフラれちゃった。「ジーンが一番はナルでしょ」って。

マイには見透かされちゃっていたんだね」

「……その話と、僕がマイを好きかどうか云々と、どう関係があるんだ」

「うん。だからね、いつも一緒にいる僕がダメだったんだから、ナルはどうかなくって思ってる。でも、面白い答えが聞けたからいいでしょう」

「僕は、何も答えていないんだが」

ナルはどうやら気付いていないみたい。一瞬、垣間見えた質問に、微妙な嫉妬がはらんでいることを。

じゃあさ、マイは誰が好きなの？

ナルだよ

ナルが好きなら、僕でもいいじゃない

あたしとジーンじゃ似すぎてるもん。行動パターンも似ているしさ。何かあった時に共倒れでしょ。それに、ジーンとは世間一般的な話は出来るけど、研究に関することはあんまり話せないよね

まあ、そうだね

だからって、別にジーンが嫌いとか、ナルと付き合いたってこととはないの。あたしだってまだ、十三歳なんだから、他の人を好きになるかもしれないでしょ。それに、ナルが振り向いてくれるとは思えないんだよ

マイが僕達以外の誰かと一緒にいて、キスして、触れ合っている姿を想像して、僕は何だから微妙な気分になった。

それからほんの数日後。ナルのキス事件が起きたのは。

両親は幸せになれますか？（前書き）

ライアー教授は、金持ちの息子で、事業家で、大学で超心理学を教えている教授なんだけど、ホモなんです。本命はマーティン・デイス。デイス夫妻はその事を知っています。夫妻とは仲良し。

両親は幸せになれますか？

小学校の入学前に、学力レベルを調べるためと言う名目で行われたテストで、あたしは当時、驚異的な数字を叩き出したらしい。

自分の特殊能力のために保育園はおろか、幼稚園にすら通っていなかった。

その時出会ったのがライター教授だった。彼は、家に訪ねて来た。「こんにちは。ビンセント・ライターと言います」

「だあれ？」

「谷山麻衣ちゃんだね。君の知能指数を見せてもらったよ。君は素晴らしい頭脳の持ち主だね」

「すばらしいって、すごいってこと？」

「ああ。そうだよ」

「へん……じゃないの？」

「そんなことはない。とても素晴らしいよ」

その言葉を聞いて、あたしは何だか嬉しくなった。会ったばかりだって言うのに、あたしはすぐにライター教授に懐いた。だって、教授はお父さんやお母さんもしてくれなかった、あたしを抱っこしてくれなかったから。

教授はよく来てくれるようになった。でも、来る度にお父さんもお母さんも微妙な顔をしていた。そしてある日、聞いてしまった。

「彼女の才能を日本で埋もれさせるのは、先人への冒瀆です。あなた方さえ承諾してくだされば、彼女をイギリスへ連れて行きたいのです」

「あなたは、そんなことを言って、麻衣を見世物にする気だろう」「そんなことはありません」

化け物と言われたことはあった。住む場所がコロコロ変わるのはいあたしのせい。両親がいつもやつれているのも。それに、そのせいで家は貧乏だった。

「……お父さん。麻衣、この人と一緒にイギリスに行きたい。教授と一緒にイギリスに行くよ」

「麻衣……何を言うんだ」

お父さんが複雑そうな顔をしているのは、あたしにもよく分かった。ここから先、あたしをずっと世間から隠して、怯えて暮らすよりは、ライター教授に預けた方がいいってお父さんもお母さんも分かっている。

だからあたしは、自分で決断した。

教授について行くこと、イギリスに行くこと、自分の能力について勉強すること、そして、両親から離れること。

世間を気にして、あたしは能力者ではなく、天才少女としてイギリスに渡ることになった。ちょっと驚いたのは、空港にマスコミがいたこと。

カメラのフラッシュがまぶしくって、両親がどんな顔をしていたのか覚えていない。生きている両親に会ったのは、それが最後だった。

あたしは飛行機の中で教授に言われた。

「本当に後悔していないのかい？」

「……あたしは子供だからよく分からないけど……。あたしはお父さんやお母さんと一緒にいない方がいいと思ったの」

「子供を心配しない親はいないよ。麻衣が会いたくなったらいつでも帰って来れるよ」

「ありがとう」

ねえ神様。あたしがいなくなったら、両親は幸せになれますか？

知識を蓄える

デイヴィス教授は、時々私を自宅に招いて下さる。

この日も当たり前のように教授の手伝いをしていて遅くなったため、自宅の夕食に招かれました。

さあ、遠慮しないで

失礼します

デイヴィス教授に促されて、デイヴィス家に入ると奥の方から話し声が聞こえました。

あれ？ 誰かお客様が来ているようだね

デイヴィス教授は相手が誰だか分かっていたらっしゃるようでした。誰とは限定できませんでしたが、私もどこかで聞いたことがあるような気がしました。

リン。座って待っていてくれ。ルエラに帰って来たことと、訪問客が誰なのか確かめて来るから

分かりました

どうやら客は奥のほうにいるらしい。

少し片付けで疲れていたこともあって、ソファで休ませてもらうかなと思ってソファに近付くと、この家にはいるはずのない子供がソファにいた。

いや、正確には眠っていた。

確か、教授には子供がいらないと言う話だったはず……

ん〜

私の声で起きてしまったのでしょうか。子供は瞼を擦ると、短い手足をいっぱい伸ばしていました。もしかしたら、お客様の連れて来た子供なのでしょうか？

その時、周りを見回していた子供は私に気付きました。その髪は蜜茶、瞳の色も同じ。イギリス人ではないようですが、ハーフのような、それぐらい、その子供は国籍が分かりにくかったです。

お兄ちゃん。だあれ？

子供特有の舌たらずな話し方。

あ！ 分かった。教授が言っていた リン って、あなたのことね。ルエラが最近、お夕飯を食べに来るって言うてた

私は人よりも身長が高い方なので、特に子供などは先ず、私の身長で驚きますが、彼女が始めからソファに座っていたこともあって、今までの子供よりも驚いた様子がありませんでした。

君は、デイヴィス教授の親戚の子ですか？

あたし、麻衣って言うの。この家の親戚の子じゃないよ

マイさんですか。ですが、確か教授には子供はいないはず

私がそんなことを考えていると、奥の方からデイヴィス教授とその奥様。それに、私は学科を取っていませんでしたが、同じ大学の教授の一人である라이어教授がいました。

教授！

やあ、麻衣。起きたのか？

うん。ねえ、このお兄さんがリンさんだよ？ だって、聞いた特徴と同じだよ

そうだよ

確か、라이어教授は独身だったはず。

リン。この子は、라이어教授の被験者なんだよ

被験者……ですか？

まあ、ビーンがこの子を連れて来たのは、それだけではないのだがね

実は、マーティンに君のことを聞いてから、相談したいことがあったんだ

せっかくだから、ビーンもマイと一緒に夕飯を食べて行ってちようだい

ルエラの提案で、私は라이어教授と謎の子供と一緒に夕飯を食べるようになりました。

ところで라이어教授、私に相談したいことは？ まさか、私

にこの子に何かを教えろと言うのではありませんよね？ 私は子供が苦手なのですが

そんなことではないから安心していいよ

それを聞いて、その子の前だと言うのに私はホッと胸を撫で下ろしてしまいました。マイさんは、私のそんな様子を気にすることもありませんでした。

実は……

라이어教授が話し掛けた時、その横にいたマイさんが自ら話し始めました。

あのね。東洋のことについて勉強したいって言ったら、マーティンの教え子に香港出身の人がいるって教えてくれたの。라이어教授の蔵書は西洋の物ばかりで、東洋の物はほとんどないから借りたくなって思ってた……

マイさんは、私の様子を見るかのようにジッと見つめていました。私の持っている本でしたら、貸すのは構いませんが、あなたにその本が読めるのですか？ 一応、中国語や日本語で書かれています

それが平気よ。今、お勉強しているラテン語に比べればずっと楽だわ

私はその時、彼女を子供だと思って甘く見ていたんだと思います。後日、라이어教授にもう捨てるつもりでいた本などを何冊か渡しました。ですが、驚いたことにその翌日、本を読んだ感想と共に何冊かの本が返されてきました。その中でももっとも驚いたのは、彼女の感想文が、中国語で書かれていたことでした。

英語を喋れる中国人はいても、漢字を書けるイギリス人は滅多にいません。

麻衣から伝言だよ。子供だと思わないでだ、そうだ。私も説明しなかったのが悪かったのだがね。彼女は、能力者としてではなく、その頭脳を買って連れて来たんだよ

頭脳ですか？ と、言うことは天才児と言うことですね

ああ。麻衣のIQは200ある

200……

私は思わず口を開けたままになっていたことにしばらく気付きませんでした。通常の人IQのが100前後。それを倍近い数値を持つ。

あの子のことを知って、イギリスに連れて来ようと思った時、ご両親を説得した時に彼女の能力を知ったんだ

イギリスに、と言うことはイギリス人ではないと言うことですか？
もしかして、私と同じ中国か香港の出身ですか？

……そのことは麻衣の人生に関わるから、その内話すよ
私もそのことについて詳しく聞く気はありませんでした。

それから数カ月後。何度か本や書物を貸したのですが、マイさんは貸すとすぐに読んでしまったのです。私が持っていた東洋の本のほとんどを読んでしまったマイさんは、読む本がなくなってしまったことを、ひどく残念そうにしていました。

マイさんは、他の子のように遊んだりはしないんですか？
SPRに被験者として通っていると聞いていますが

え？ 他の子とも遊ぶよ。SPRの友達とも遊ぶし、学校の子とも。昨日も、学校帰りに友達ん所に寄って遅くなったら、教授に怒られちゃった

……昨日は確か、かなり難しい本を渡しましたよね……

彼女はいつもものようになぜか、感想文をくれた。最初に本を貸した時から習慣になってしまったようですが。そう言えば、最初に貸した本数冊も一日で読んでいたような。

あ、本はいつ読んでいるのかってことだね

マイさんのその言葉に私は頷きました。

あたし、速読ができるんだよ。学術書は速読で読んで、文学は普通に読むの。感動する本は、ゆっくり読みたいんだ

速読ですか……。道理で、読むのが早いはずですね

彼女と知り合って一年が過ぎた頃。私は初めて、彼女が日本人で

あることを知りました。

マイさんのご両親が日本で事故死したのです。

知らせを受けたマイさんは、すぐにライアー教授と共に日本に向かいました。彼女のご両親にはご親戚がいなかったそうで、ライアー教授はマイさんをそのままイギリスで面倒を見ることにしたそうです。

独身のライアー教授では彼女を養女にすることはかなわず、デイヴィス教授夫妻がマイさんを養女に、と言う話しがあったのですが、夫妻はすでにアメリカの孤児院にいる双子の男の子を養子にする手続きをしていました。

せっかくマーティンとルエラに子供ができるんだもん。それに、その子達だって両親ができるんだから、あたしが邪魔しちや悪いでしょう

マイ……。じゃあ、ビーンに相談できないことは私に教えてくれるかしら。女同士の約束

うん

ジーンとナルがイギリスに来たのは、それからほどなくしてからでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0904v/>

奇跡の再会

2011年8月7日03時15分発行